

2022 年 6 月

食料安全保障月報 (第 12 号)



令和 4 年 6 月 3 0 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 6 月食料安全保障月報（第 12 号）

目 次

概要編

I	2022 年 6 月の主な動き	1
II	2022 年 6 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報 ウクライナ情勢を受けた豪州、カナダの生産動向等 （資料）	5
1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（A L I C 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 生産量は前年度に比べ 5.5% 増加も、ここ 20 年で 2 番目に少ない	
	＜カナダ＞ 干ばつ被害から回復し、生産量は前年度に比べ 5 割以上増加	
	＜豪州＞ 生産量は史上最高の前年度を 17.4% 下回るも 30.0 百万トンの見込み	
	＜EU27+英国＞ 輸出量は世界第 2 位となる見込み	
	＜中国＞ 小麦生産量は前年度に比べ 3.2% 増加の 138.5 百万トン	
	＜ロシア＞ 小麦輸出量は世界第 1 位	
	＜ウクライナ＞ ロシアの侵攻により小麦の輸出量は前年度に比べ 47.4% 減少	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は主に収穫面積減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続	
	＜中国＞ 生産量減少、消費量史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ ロシアの侵攻の影響等で生産量・輸出量が大幅に減少見通し	
3	コメ	15
	＜米国＞ 減産に伴い輸入が史上最高の見込み	
	＜インド＞ 単収の向上により生産量が 7 年連続史上最高を更新	
	＜中国＞ 世界の期末在庫量のうち、中国の割合は 6 割弱	
	＜タイ＞ バーツ安や低価格他国産米への需要シフトで輸出価格は下落傾向	
	＜ベトナム＞ 2021/22 年度の夏秋作の作付けが開始。進捗率は約 4 割。	

II 油糧種子	
大豆	21
＜米国＞	生産量は史上最高、輸出増の見通し
＜ブラジル＞	2021/22 年度の収穫終了、高温・乾燥で減産見通し
＜アルゼンチン＞	2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続
＜中国＞	増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し
＜カナダ＞	収穫面積の増加により増産、輸出量も増加見通し

(参考) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23 年度) . . . 27

特別分析トピック 1

インド、トルコ、エジプトの小麦政策

特別分析トピック 2

「食料の安定供給に関するリスク検証 (2022)」について

【利用上の注意】

表紙写真：中国山東省の冬小麦の収穫（6 月 7 日撮影）

当該圃場では天候に恵まれ前年度より単収が増加した。

(概要編)

I 2022 年 6 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球の冬小麦は成熟期で、一部では収穫が開始された。その他の作物は作付けがほぼ終了し、生育期を迎え、南米では、今後作付けが開始される。

品目別にみると、6 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、世界の小麦については、生産量は前年度より減少する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、ウクライナの小麦生産量・輸出量が前年度より大きく減少し、国際相場は過去最高を更新した後も、高い水準で推移しており、今後も注視が必要。

また、とうもろこしについては、世界の生産量は前年度より減少する見通し。ウクライナの生産量は前月より上方修正されたものの、前年度よりは生産量・輸出量が減少している。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通しである。いずれも期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：5 月）については、肉類（121→122）が過去最高、穀物（170→173）が上昇したものの、植物油（238→229）、乳製品（147→142）が下落した影響により、4 月より下落（158→157）した。

海上運賃について、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年 10 月に直近 5 年間の最高値を記録。それ以降は下落していたが本年 2 月から上昇に転じ、直近では再び下落傾向で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、6 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の6月15日プレスによれば、ロシアの侵攻により、農業分野で農地や農業機械など合計で43億ドル（5,600億円相当：1ドル=130円で換算）の被害があったとしている。

ウクライナ農業政策食料省の6月17日プレスによると、小麦の大半を占める冬小麦は650万ヘクタール(※)作付けされ、6月現在、成熟期を迎え、今後収穫期を迎える。また、ウクライナ農業政策食料省によると、春作物の作付けは終了し、生育期を迎えている。6月16日時点で作付面積は1,416万ヘクタール（前年度1,692万ヘクタール）。うち、春小麦は19万ヘクタール(※)作付け、とうもろこしは464万ヘクタール（前年度550万ヘクタール）となっている。

米国農務省（USDA）によれば、2022/23年度のウクライナの小麦生産量は、ロシアの侵攻の影響を受け、5月見通しと変わらず対前年度比35%減の2,150万トン、輸出量も5月見通しと変わらず、対前年度比47%減の1,000万トンの見通し。

一方、とうもろこし生産量については、作付面積が予想より増加したため、対前年度比では41%減も、5月見通しからは550万トン上方修正され2,500万トン。ただし、輸出量は、ロシアの侵攻により黒海の輸出港の封鎖が続いているため、対前年度比で61%減の900万トンで据え置かれている。この結果、期末在庫量は積み上がり、小麦ととうもろこし計で1,800万トンを超える見通し。

このような情勢に対し、USDAは16日、被害をうけた農業分野への支援を含めた農業協力のMOUをウクライナ農業政策食料省と締結することを公表した。

※前年度の冬小麦、春小麦の作付面積を比較するデータは公表されていない。

1 米国の春の作付け遅れの改善と生産見通し

米国農務省（USDA）によれば、6月19日時点の2022/23年度のとうもろこしの作付けはほぼ終了し、大豆、春小麦の作付けの進捗率はそれぞれ、94%、98%と、作付けの遅れは5月下旬以降の天候の回復により改善している。一方、冬小麦については収穫が開始され、収穫進捗率が25%と前年同期（15%）、過去5年平均（22%）と進展しているが、作柄評価は「良からやや良」の比率が乾燥の影響もあり、30%と前年同期（49%）を下回っている。

春作物については現時点の作付～初期生育段階で2022/23年度の見通しをすることは難しい。USDAによれば、前年度の春小麦の記録的な減産からの回復に加え、冬小麦の生産見通しが5月からわずかに引き上げられたことから、小麦計で前年度比5.5%増の4,730万トンの見通し。とうもろこしは肥料価格高騰に伴う作付面積減により、5月見通しから変わらず、対前年度比4.3%減の3億6,730万トンの見通し。一方、大豆も5月見通しから変わらず、作付面積増から前年度より4.6%増で史上最高の1億2,630万トンの見通し。

6月30日に作付面積調査結果が公表される見通しで、市場関係者の間では、当初よりとうもろこしの作付面積が増加するのではとの見方もある。とうもろこしは7月以降、作柄を大きく左右する受粉期を迎えることから、今後の生育状況が注目される。

2 ブラジルの冬とうもろこし収穫が開始され、史上最高に

大豆収穫後に作付けされたブラジルの 2021/22 年度の冬とうもろこしは、ブラジル食料供給公社（CONAB）の 6 月見通しによれば、2020/21 年度に引き続き干ばつの影響を受けたものの、作付面積の増加から、前年度比 45%の増加の 9,040 万トンが見込まれている。夏作と冬作の合計では、1 億 1,520 万トン（前年度比 32%増）で史上最高となる見込みである。

6 月に入り、収穫が開始され、主産地のマットグロッソ州では 6 月 10 日時点で収穫進捗率は 16%となっている。7 月以降、収穫・輸出も本番を迎えるとみられる。なお、5 月下旬に中国はブラジル産とうもろこしの輸入の植物検疫上の問題をクリアし輸入に合意しており、従来中国が輸入してきたウクライナ産とうもろこしの代替として、今後輸入に向けて諸手続きが行われるとみられる。

Ⅱ 2022 年 6 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、5 月末、390 ドル/トン台後半で推移。6 月に入り、ウクライナ産輸出の期待から一時 380 ドル/トン台前半に値を下げたものの、黒海地域からの輸出に対する懸念が強まり 400 ドル/トン前後まで値を上げた。その後、6 月の米国農務省需給報告で米国産冬小麦の生産量が引き上げられたことや、米国産冬小麦の収穫の進展等から値を下げ、6 月下旬現在、350 ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、5 月末、290 ドル/トン台後半で推移。6 月に入り、ロシアのウクライナ侵攻の継続、原油価格の高止まり、堅調なエタノール生産に加え、6 月後半からは米国中西部の高温・乾燥予報に伴う作柄悪化懸念等から緩やかに値を上げ、6 月下旬現在、300 ドル/トン前後で推移。

コメは、5 月末、480 ドル/トン前半で推移。6 月に入り、2017 年以来のバーツ安に加え、イラクやアフリカ諸国からの需要が低下したことから値を下げ、6 月下旬現在、価格は 440 ドル/トン台前半で推移。

大豆は、5 月末、610 ドル/トン台後半で推移。6 月に入り、大豆の堅調な国内需要や原油相場の上昇等から 6 月上旬に 650 ドル/トンと 2012 年 9 月の史上最高値に迫る水準まで値を上げた。その後は、中国需要の伸び悩み懸念や欧米のインフレや経済成長の減速懸念に伴うその他金融市場の下落等を背景に値を下げ、6 月下旬現在、610 ドル/トン台後半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 260 万トン上方修正され 27.7 億トン。消費量は、前月予測から 90 万トン下方修正され 27.9 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 28.2%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦で下方修正も、とうもろこし、コメで上方修正され、穀物全体で上方修正され、27.7 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦で下方修正、とうもろこし、コメで上方修正され、穀物全体で下方修正され、27.9 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで下方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.9 億トンと前月予測から上方修正、期末在庫率は、前月予測から上方修正された。

(注：数値は 6 月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.5 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、19.1%となる見込み。

(注：数値は 6 月の USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：ウクライナ情勢を受けた豪州、カナダの生産動向等

ウクライナは、ロシアの侵攻前は2,000万トン前後の小麦を輸出してきたが、ロシア侵攻以降輸出量は大きく減少した。一方、カナダは前年度の干ばつから穀物の生産、輸出が回復するとみられ、豪州も降雨に恵まれ穀物は3年連続の豊作が期待されている。世界の主要小麦輸出国の状況を中心に穀物の貿易への影響についてまとめた。

注 文中の「2022/23 年度」等は穀物年度で、ウクライナの小麦は 2022 年 7 月から 2023 年 6 月。国や作物によって異なる。(品目別需給編 P. 27 参照)

1 ウクライナの生産・輸出動向

(1) 生産・輸出動向

米国農務省 (USDA) の 2022 年 6 月の需給見通しによれば、ウクライナの 2022/23 年度の小麦生産については、ロシアによる侵攻を受け、史上最高であった前年度比 35%減の 2,150 万トンで 5 月見通しから据え置かれた。輸出についても減産に加え、インフラ等が被害を受けたことや、ロシアによる黒海のアデーサ港等主要輸出港に対する封鎖が続いており、対前年度比 47%減の 1,000 万トンで据え置かれた。とうもろこしについても輸出量が 900 万トンで据え置かれている。

なお、ウクライナは、鉄道輸送により、ルーマニアやポーランドを経由した輸出も検討してきた。しかし、ウクライナと EU の鉄道の軌道幅の相違等の課題から以前の輸出量の完全な代替は難しく、3 月以降の小麦を含む穀物輸出は侵攻以前の毎月 600 万トン前後から毎月 100 万トン程度へと大きく減少している。

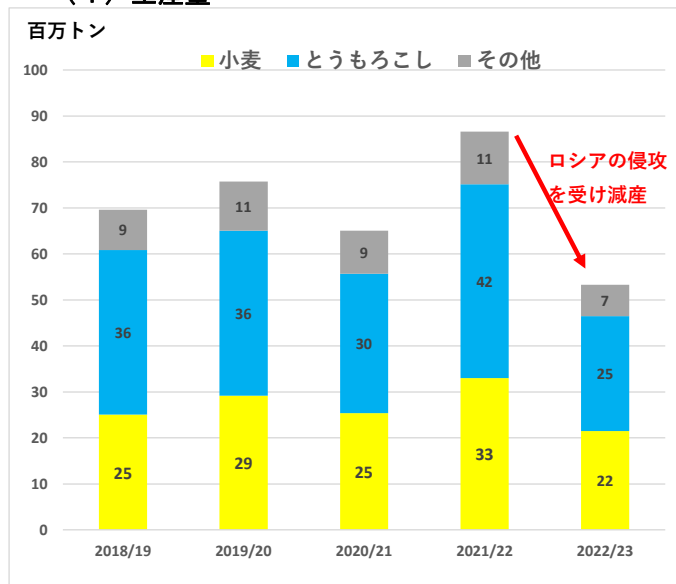
(2) 国際相場への影響

この結果、2021/22 年度の北米産の干ばつによる小麦の減産や中国の需要等から上昇してきた小麦相場は、2 月 24 日のロシアによる侵攻等を背景に大きく上昇し、3 月 7 日には史上最高値 (14.25 ドル/ブッシェル) を更新し、その後下落したものの、6 月現在も依然として 10 ドル前後で推移している。

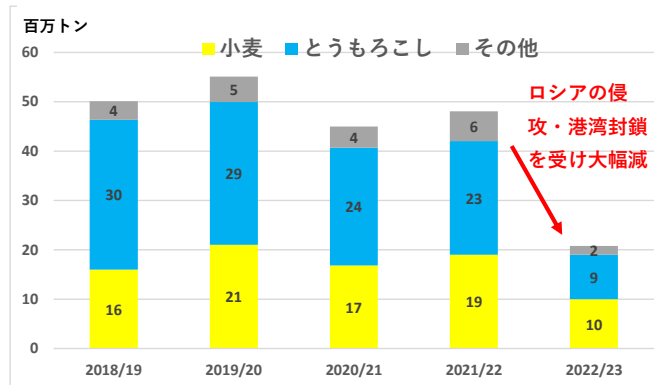
6 月 3 日には、アフリカ連合の議長国セネガル・サル大統領がロシア・プーチン大統領と会談した。報道等によると、サル大統領は、アフリカ諸国は、戦争前は年間 3,000 万トンのロシア・ウクライナ産小麦、とうもろこしを輸入している。ロシアによるウクライナ侵攻や欧米の対ロシア経済制裁による影響を受けており、その改善を訴えたとみられる。

図 1 ウクライナの穀物の生産・輸出見通しの推移

(1) 生産量



(2) 輸出量



出典: 米国農務省 「PS&D」 (2022. 5)

2 カナダの生産と輸出動向

(1) 作付け動向

2022/23 年度の生産量は干ばつの影響を受け減産となった前年度から回復する見通し。作付け・初期生育の段階ではあるが、カナダ農務農産食品省（AAFC）の予測によれば、穀物・油糧種子全体で、一昨年の豊作時には及ばないものの、現時点の見通しでは、前年度のカナダ西部の干ばつの影響から回復し、前年度比 32% 増の 8,650 万トンの見

通し。主産地のプレーリー(平原 3 州)では、西部のアルバータ州では乾燥が継続していたが、6 月に入り降雨があり、作付けは順調に進展した。一方東部のマニトバ州、サスカチュワン州などでは雨がちな天候で洪水もあり、6 月中旬時点で作付けは完了していない。

(2) 小麦

2022/23 年度の生産量は干ばつの影響を受け減産となった前年度から回復する見通し。作付け・初期生育の段階ではあるが、AAFC によれば、単収の改善に加え、菜種からの作付けのシフトによる収穫面積の増加もあることから、史上最高の豊作だった 2020/21 年度には及ばないものの、前年度比 53% 増の 3,310 万トンの見通し。

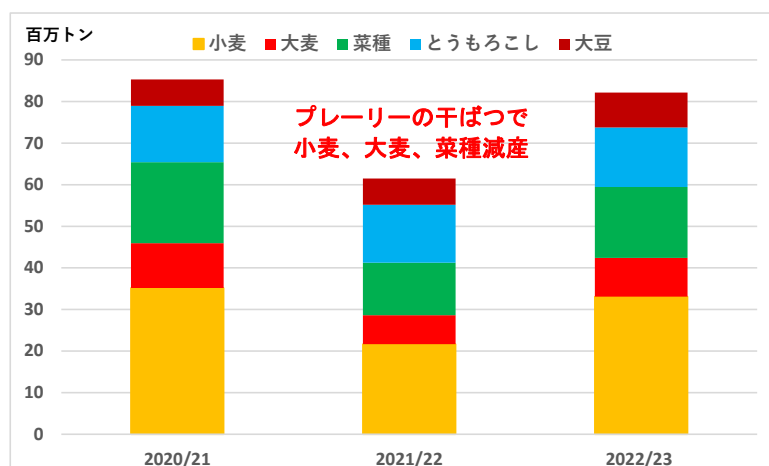
USDA の 6 月見通しによれば、輸出量は、生産量の回復により、前年度より 55% 増の 2,400 万トンの見通し。

(3) 菜種

AAFC によれば、小麦同様、2022/23 年度の生産量は、干ばつの影響を受け減産となった前年度から回復するものの、小麦への作付けのシフトから前年度比 35% 増の 1,800 万トンにとどまる見通し。

USDA によれば、輸出量は、生産量の回復により、前年度より 76% 増の 880 万トンとなるも、2020/21 年度の輸出量 1,060 万トンよりは下回る見通し。なお、中国当局から輸入を規制されていた 2 つの穀物輸出業者からの輸出が 5 月には解除されている。

図2 カナダの小麦、大麦、菜種、とうもろこし、大豆の生産量の推移



出典：AAFC「Outlook For Principal Field Crops」(2022. 6)

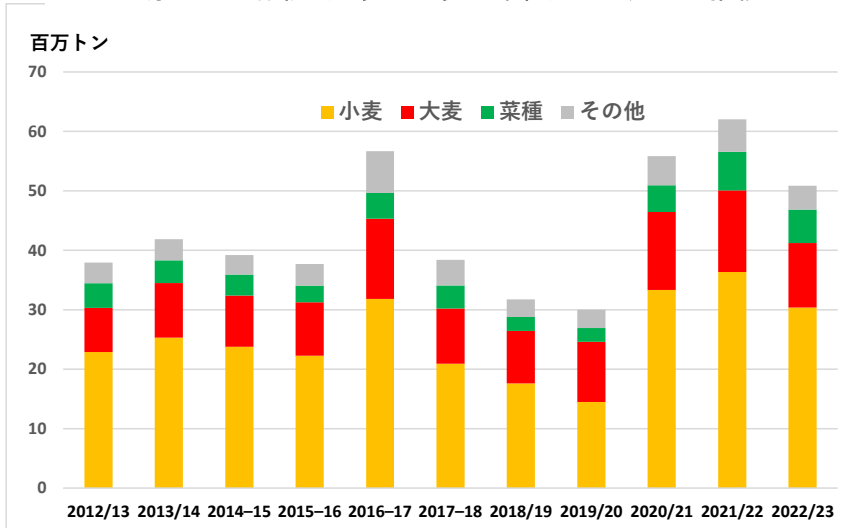
3 豪州の生産と輸出動向

(1) 作付動向

豪州農業資源経済科学局（ABARES）の「Crop Report」（2022.6.7）によれば、2022/23年度の作付面積は前年度の史上最高水準よりわずかに減少も 2,340 万ヘクタールの見込み。

大麦などから小麦(1%増)や菜種(12%増)に作付けがシフト。2022/23年度の冬作物の生産量は 5,090 万トンで史上 4 位の見込み。

図3 豪州の冬作物（小麦・大麦・菜種）の生産量の推移



出典：ABARES「Crop Report」（2022.6）

(2) 小麦

「Crop Report」（同）によれば、生産量は、史上最高の豊作であった前年度からは対前年度比 17%減産となるものの、過去 10 年平均を 22%上回る 3,030 万トンの見通し。西オーストラリア州、ニューサウスウェールズ(NSW)州とも 2 月から 4 月にかけて平年並みあるいはそれ以上降雨に恵まれた。5 月には NSW 州等で洪水による作付け遅延もあったが、概ね作付け、初期生育は順調に進展している。

USDA の 6 月見通しによると、輸出量は、前年度より減少するものの、高水準の 2400 万トンの見通し。特に前年度のカナダ、米国の干ばつによる減産、本年 2 月のロシアのウクライナ侵攻、5 月のインドの小麦輸出規制などから、各国の需要が集中し、輸出スロットの確保が難しい状態が継続している。

(3) 菜種

「Crop Report」（同）によれば、2022/23年度の菜種の生産量は、史上最高の豊作であった前年度より 14%減産となるものの、小麦と同様、作付期の降雨に恵まれ、菜種は過去 10 年平均を 47%上回り、前年度に次ぐ史上 2 位の 560 万トンとなる見通し。

USDA によると、輸出量は、対前年度比 14%減も、高水準の 420 万トンの見通し

4 世界の穀物貿易への影響

6 月 10 日、ウクライナ農業政策食料省は、カナダの庶民院とのオンライン会合で、輸出できない穀物在庫が 2,000 万トン以上にのぼること、今年の秋には 1,000 万～1,500 万トンの穀物貯蔵能力が不足することなどを訴えた。

これに対し、当面、2022/23年度の穀物収穫に向け、ウクライナ西部の国境沿いにサイロを増設し、当面の収容力を確保しようとする動きも報道されている。

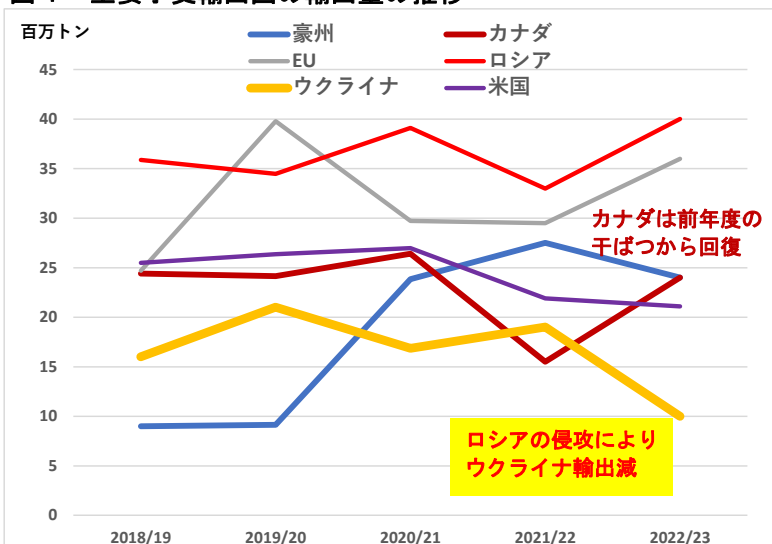
小麦の輸入国においては、インドが条件付きではあるが、小麦の輸出規制を行ったこともあり、7 月以降、新穀の収穫が開始される EU 産、ロシア産か、3 年連続豊作が予想される豪州産を中心に手当てを行うことになるとみられる。ロシア産については、対ロシア向け経済制裁を実施していない中東、アフリカ諸国向けに黒海からの穀物輸出が継続されているとみられる。輸出価格の高騰に伴い、6 月末には小麦、大麦で 100 ドル/トンを上回る水準に上昇している可変輸出

関税は、7月以降も継続されるものの、6月まで設定されていた小麦800万トン等の輸出枠は解除される見通し。一方、EU産は主産地のフランスでの高温乾燥により作柄が懸念されている。

こうしたことから、カナダ産小麦の収穫が始まる9月までは、豪州産小麦に集中が継続するとみられ、輸出スロットの確保が課題となっている。引き続き注視をしていく。

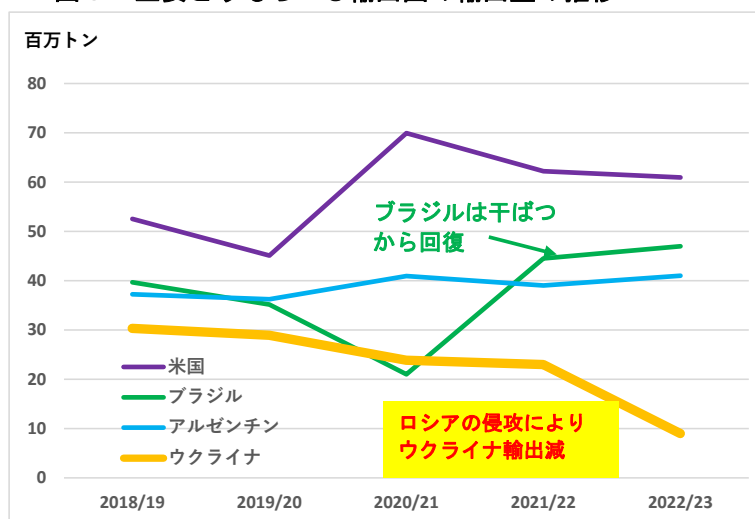
また、とうもろこしについても、USDAによれば、2022/23年度のウクライナ産は前年度41%減の2,500万トンとなる見込みで、それに伴い輸出量も前年度比61%減の900万トンとなる見通し。一方で、2021/22年度のブラジル産は、史上最高の生産量（前年度比33%増の1億1,600万トン）となる見込みであり、それに伴い輸出量も史上最高の4,450万トン（前年度比2.1倍）となる見込み。

図4 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 6)

図5 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 6)

「食料の安定供給に関するリスク検証（2022）」について

我が国の食料の生産や供給をめぐる国内外の状況は刻々と変化しており、特に近年、新型コロナウイルスの感染拡大やロシアによるウクライナ侵略といった新たなリスクの発生により、食料安全保障上の懸念は高まりつつある。

このため、農林水産省内に「食料安全保障に関する省内検討チーム（チーム長：武部農林水産副大臣）」を立ち上げ、将来にわたって我が国の食料安全保障を確立するために必要な施策の検討に資するよう、食料の安定供給に影響を及ぼす可能性のある様々な要因（リスク）を洗い出し、包括的な検証を行い、6月21日に公表した（結果概要は特別分析トピック2を参照）。

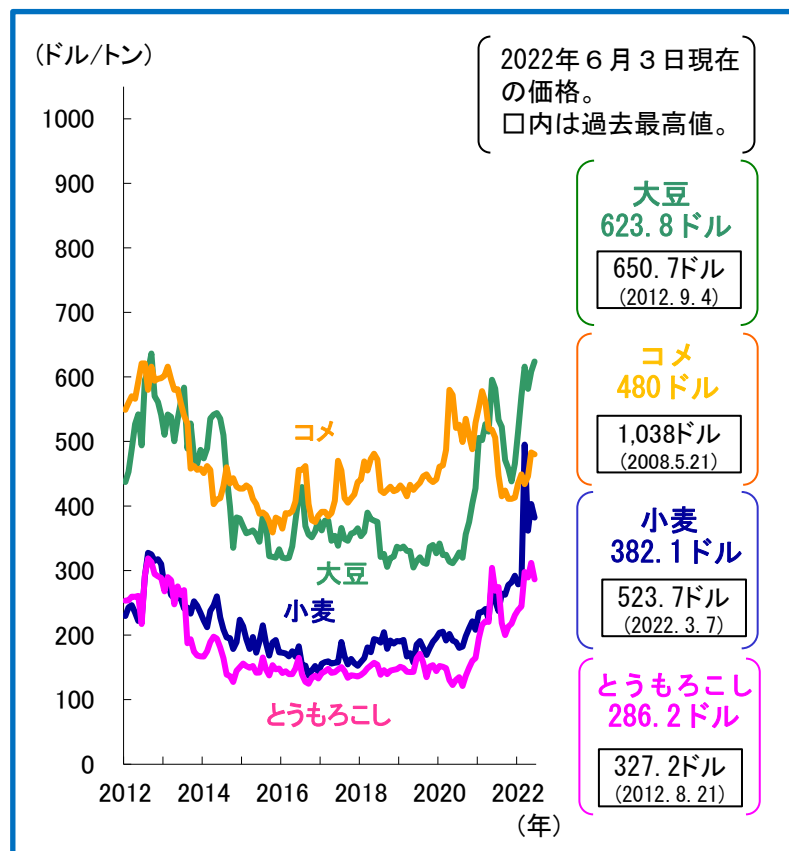
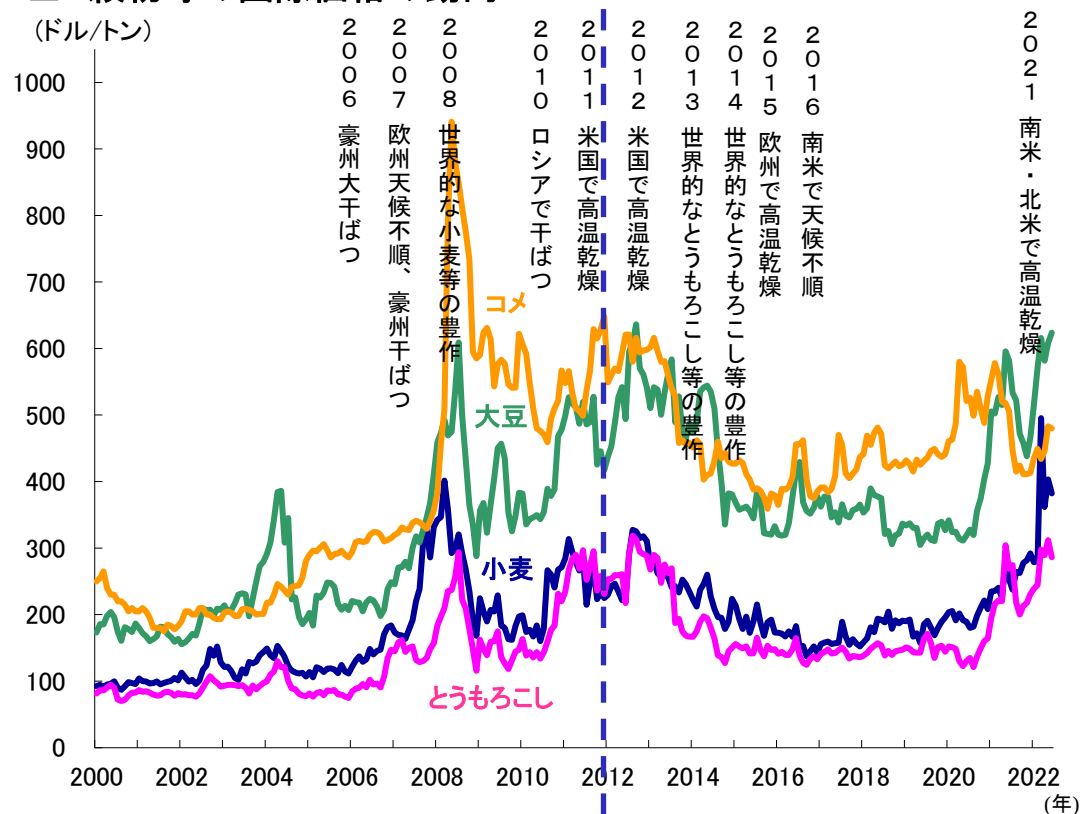
結果の詳細については以下をご覧ください。

農林水産省ホームページ：https://www.maff.go.jp/j/press/kanbo/anpo/220621_14.html

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、さらに上昇し、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



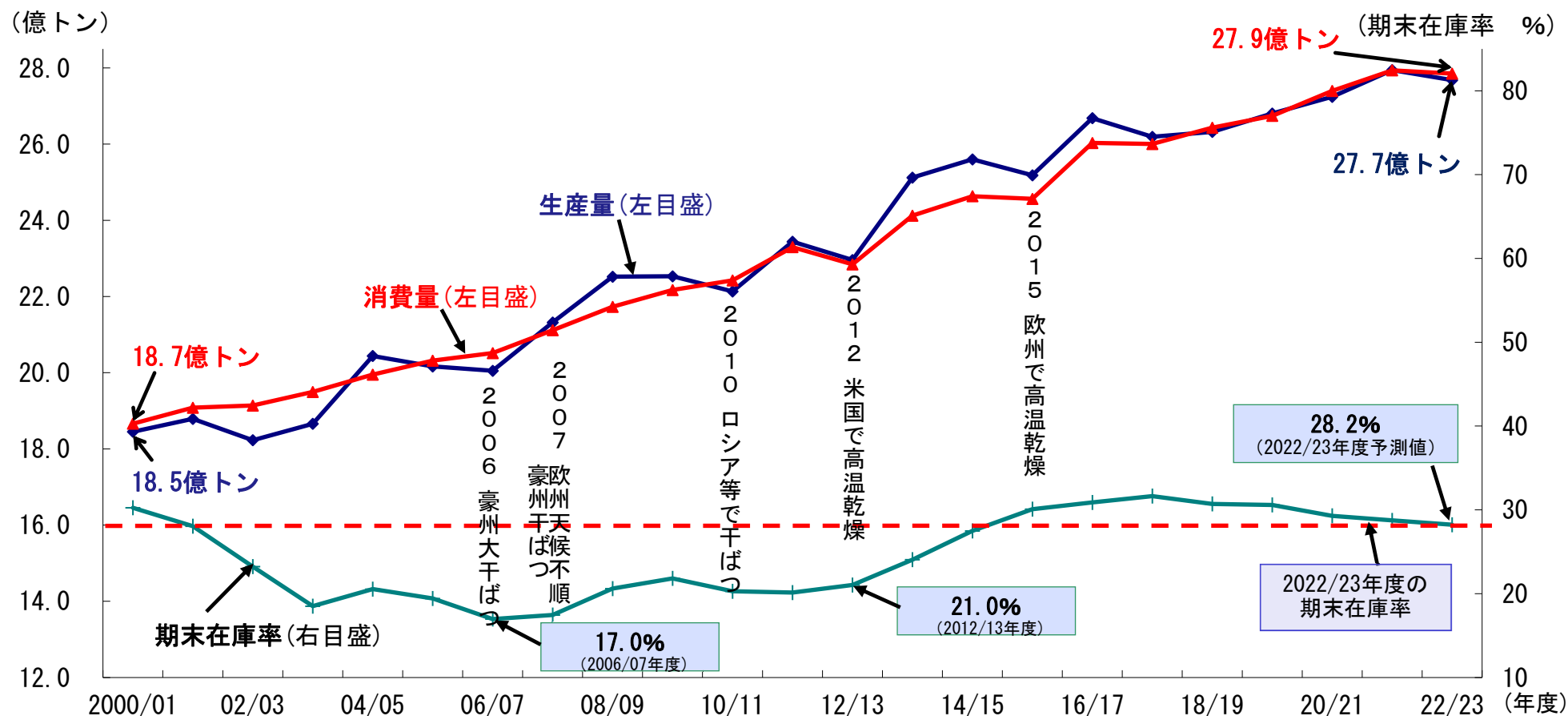
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.2%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

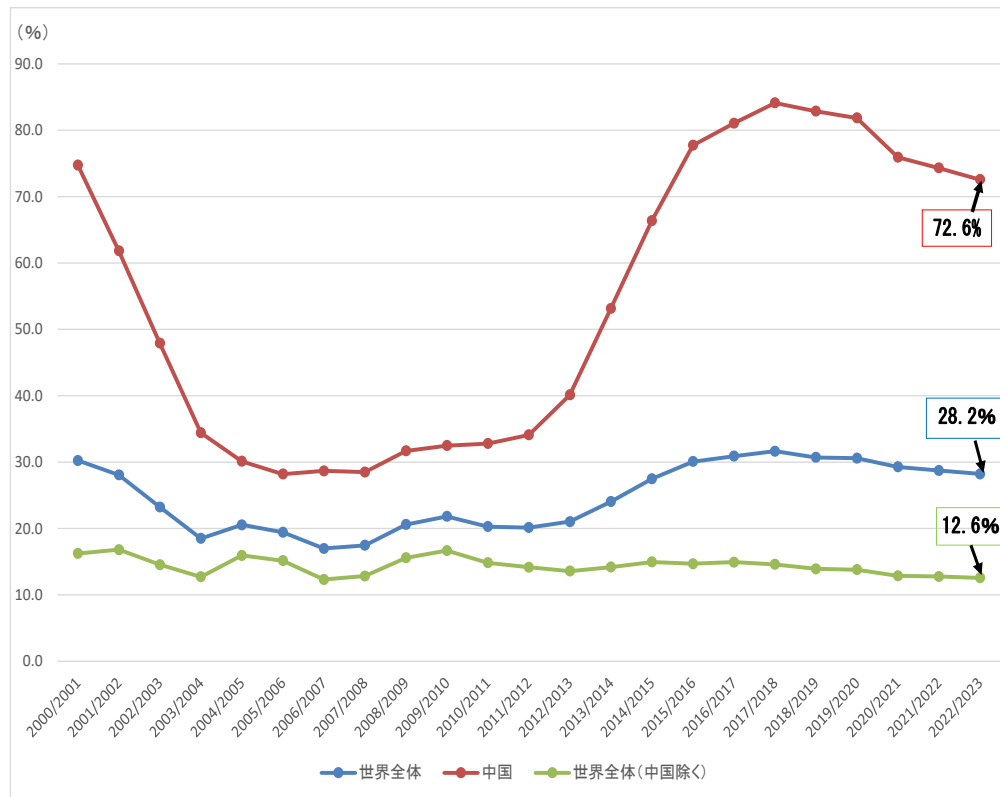


資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(June 2022)、「PS&D」

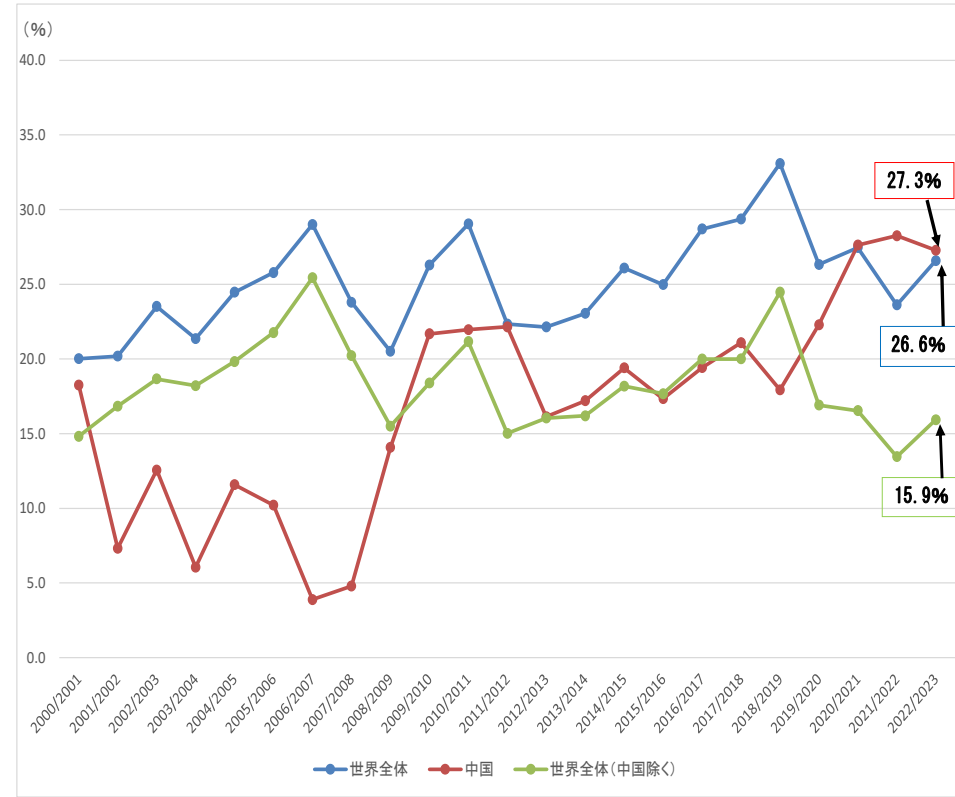
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(June 10, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

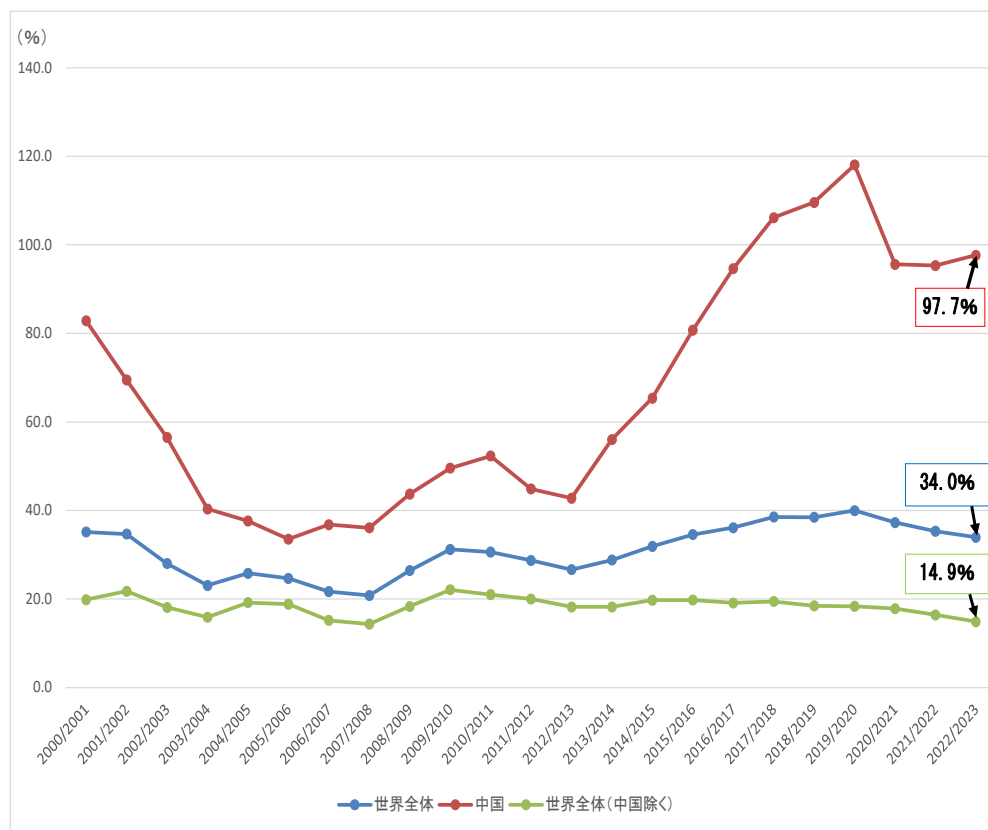
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

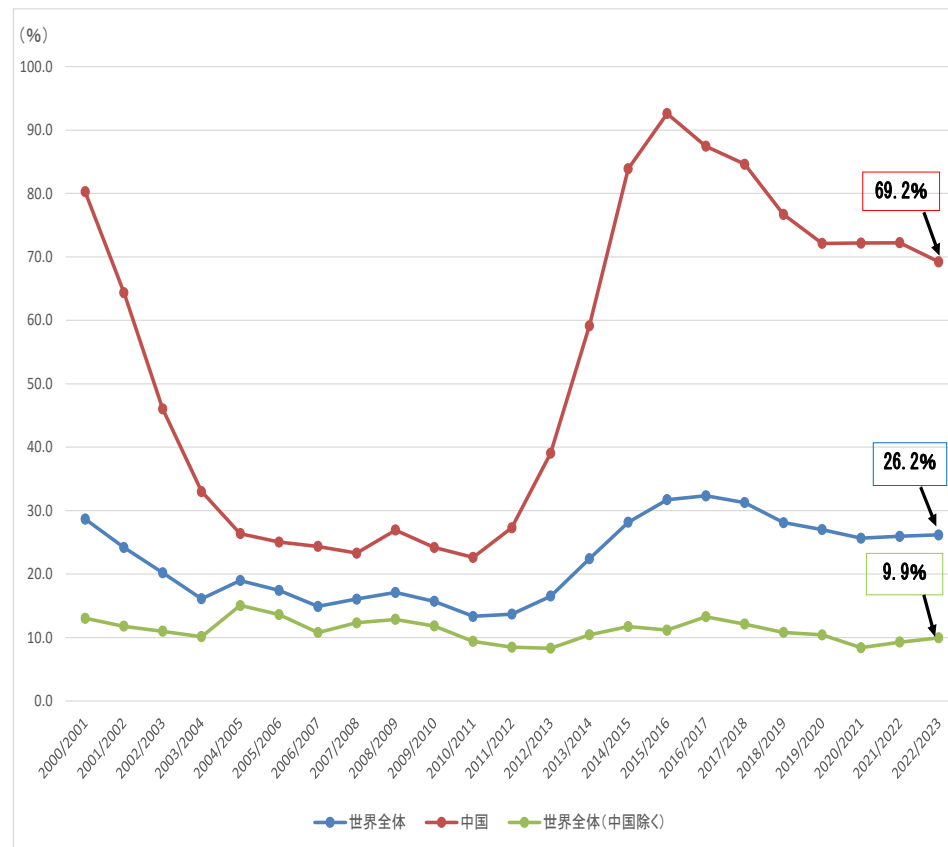
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(June 10, 2022)

注: 1) 小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

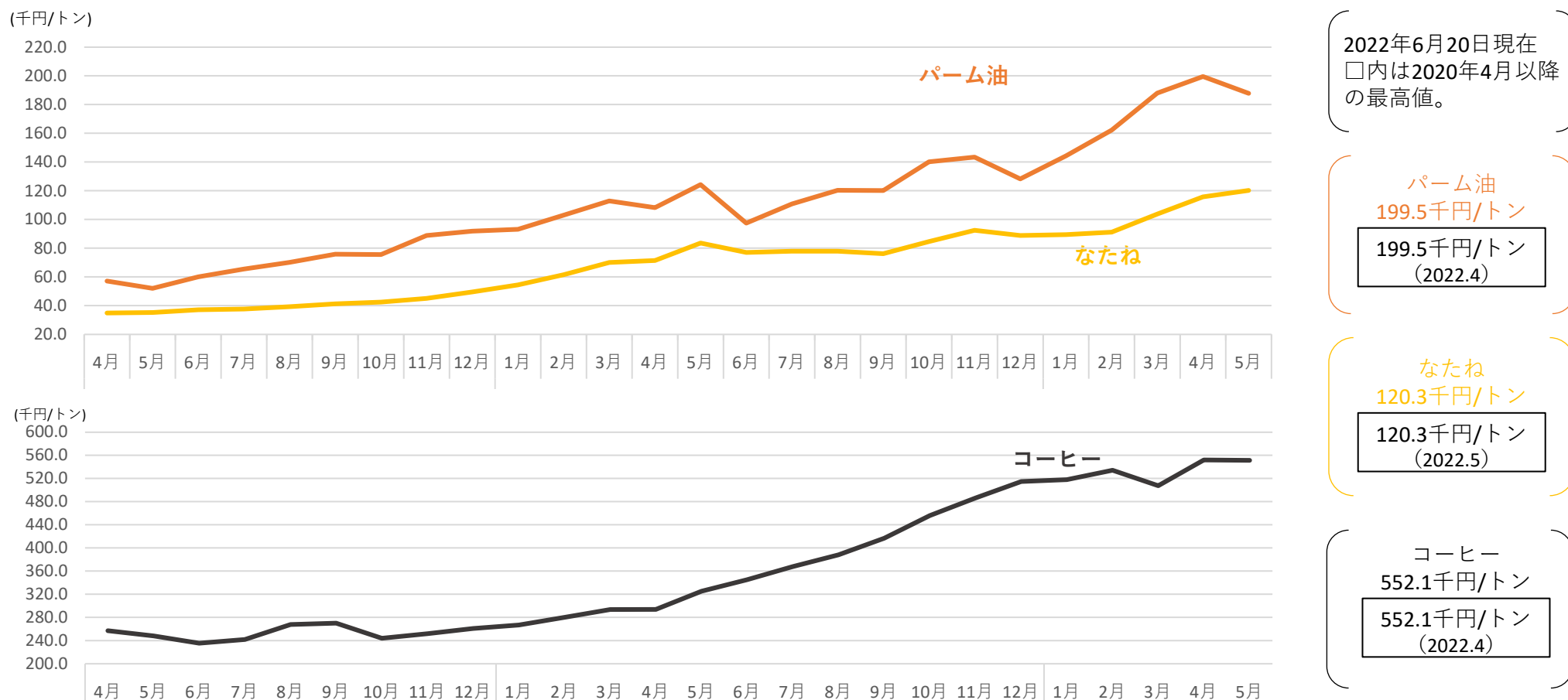
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出货量 - 輸入量) × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出货量) × 100

4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出货量) × 100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっているほか、インドネシアによるパーム油の輸出制限（5月23日解除）が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

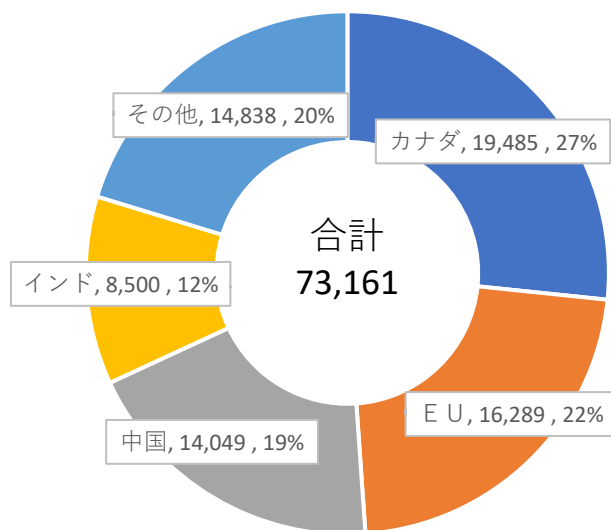


※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

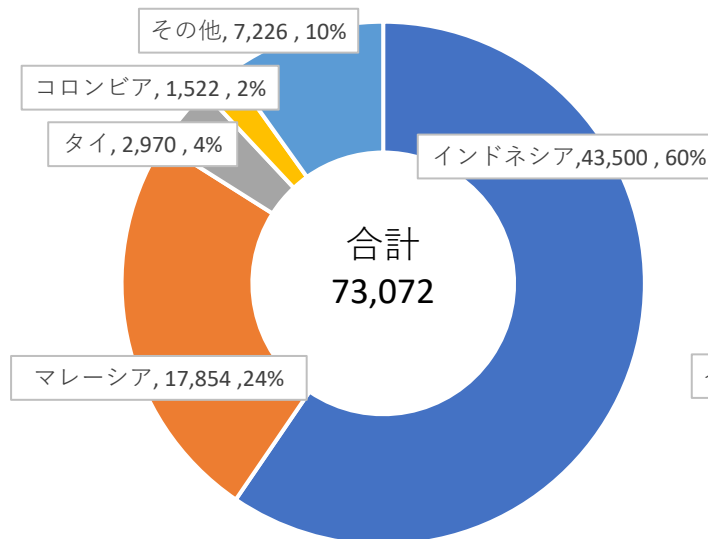
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



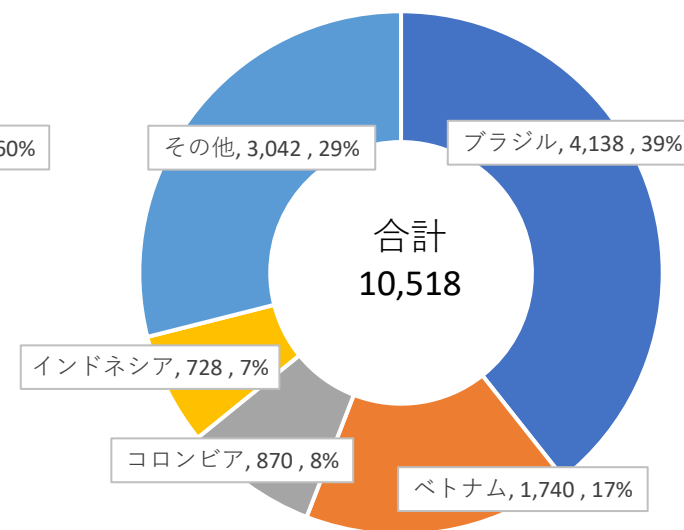
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年				
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年				
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年				
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
コーヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年5月の国内の加工食品の消費者物価指数は99.5～135.4(前年同月比で－0.4%～36.2%) の範囲内。

消費者物価指数(総務省) (令和3年12月～令和4年5月)

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R3	R4					
品目	平均	平均	平均	平均	平均	12月	1月	2月	3月	4月	5月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	100.0	103.2	107.1	107.2	108.0	107.5	9.4%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	98.5	100.4	100.9	100.9	100.1	100.1	0.4%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	102.5	102.3	102.1	102.9	103.1	104.0	3.0%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	121.6	124.6	128.4	132.2	134.8	135.4	36.2%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	97.6	98.3	99.0	99.9	100.7	101.0	1.0%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	112.0	112.3	113.3	120.3	123.9	126.1	25.4%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	95.3	98.5	100.2	99.3	103.0	105.3	7.6%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.9	99.7	99.9	99.7	99.1	99.5	-0.4%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	100.9	101.2	101.5	101.9	102.4	102.6	2.7%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査(農林水産省) (令和3年12月～令和4年6月)

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R3	R4							
品目	平均	平均	平均	平均	平均	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	98.4	102.1	105.3	104.6	105.1	104.6	105.9	1.2%	7.6%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	97.8	98.4	98.4	99.0	99.0	99.0	110.0	11.1%	10.4%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	100.7	101.6	101.1	102.0	101.6	102.4	102.9	0.5%	2.6%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	116.3	119.1	122.9	126.4	129.6	130.8	132.7	1.5%	32.6%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	97.5	97.7	98.1	98.4	99.0	99.6	98.8	-0.8%	-1.0%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	105.6	105.9	105.9	112.1	117.2	117.2	118.3	0.9%	19.5%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	92.1	98.6	98.6	98.6	105.0	104.5	105.0	0.5%	12.8%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.7	99.7	99.7	99.7	99.3	99.3	99.3	0.0%	-0.4%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年7月号（6月24日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）第1四半期の牛肉輸出は過去最高を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002257.html

（豪州）牛肉輸出量は低迷も、中国向けは比較的堅調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002258.html

（中国）牛肉生産量は増加傾向も、引き続き高値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002259.html

◆豚肉

（EU）2月の豚肉生産量は前年同月比3.7%減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002260.html

（チリ）2021年豚肉輸出量は4年ぶりに減少に転じる

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002261.html

◆鶏肉

（米国）国内の需要増により鶏肉価格は大幅上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002262.html

（ブラジル）鶏肉生産量、海外からの堅調な需要を背景に引き続き増加傾向で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002263.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）乳価は記録的高水準、好調な乳製品の輸出

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002264.html

（EU）2022年第1四半期の乳製品の輸出量は前年同期比減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002265.html

（NZ）牧草の生育不良により新シーズンの生乳生産も低調の見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002266.html

（中国）生乳生産量は増加、乳製品輸入量は大幅減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002270.html

◆飼料穀物

（世界）2022/23年度の世界のトウモロコシ生産量、わずかに減少見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002267.html

（世界）南米の生産回復などから大豆の生産量、輸出量はともに増加見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002279.html

（米国）2022/23年度の米国トウモロコシ生産者平均販売価格、12/13年度以来の高値予想

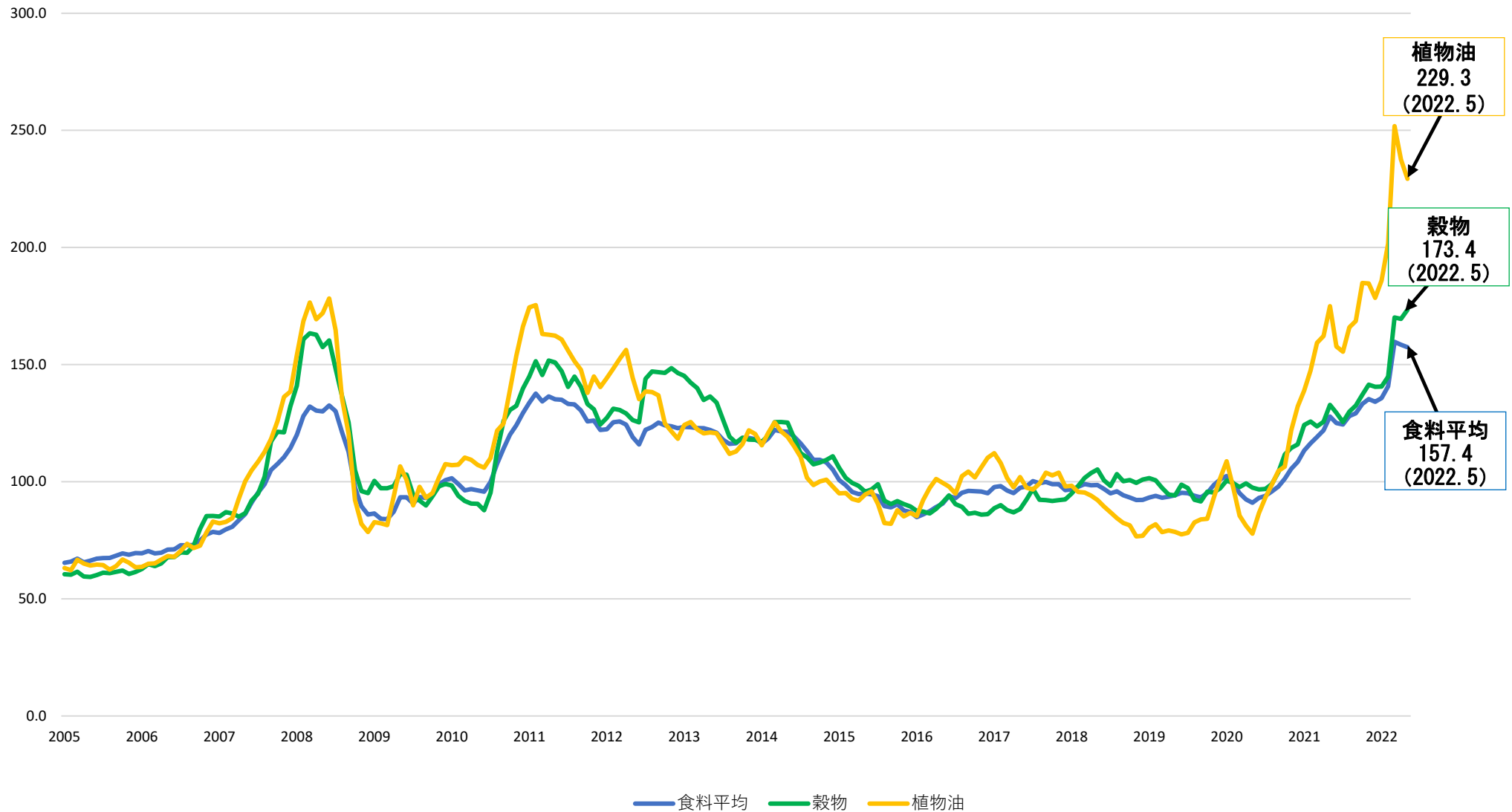
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002268.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002269.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.6)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比 ⇩ 前月比 ⇩

- ・ロシア、米国等で上方修正も、インド、EU 等で下方修正され、前月から下方修正された。

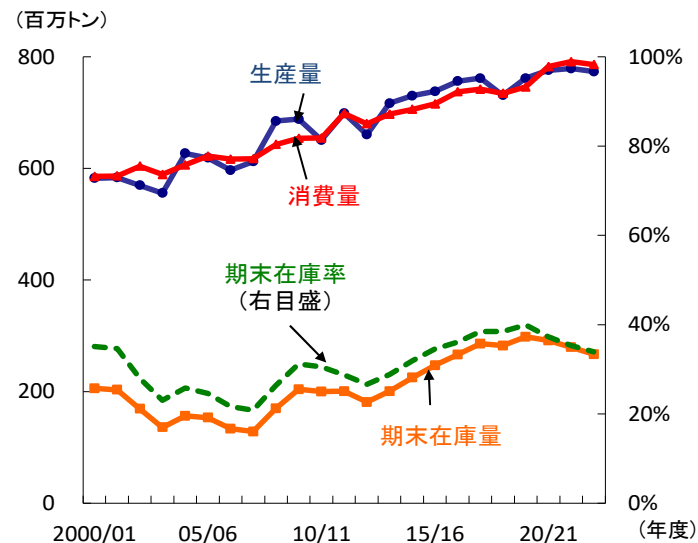
消費量 前年度比 ⇩ 前月比 ⇩

- ・イラン等で上方修正も、インド等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ⇧ 前月比 ⇩

- ・ロシア等で上方修正も、インド等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ⇩ 前月比 ⇩



資料:USDA「PS&D」(2022. 6. 10) をもとに農林水産省にて作成

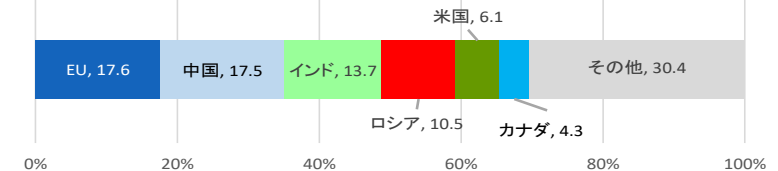
◎世界の小麦需給

（単位：百万トン）

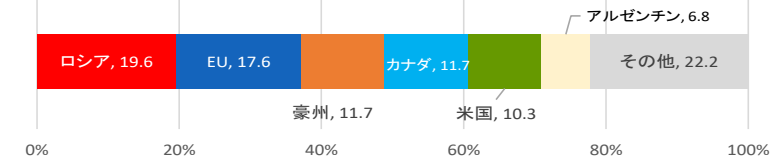
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	775.7	779.0	773.4	▲ 1.4	▲ 0.7
消 費 量	782.3	791.2	786.0	▲ 1.5	▲ 0.7
うち飼料用	158.0	161.3	153.1	▲ 0.5	▲ 5.1
輸 出 量	203.3	199.4	204.6	▲ 0.3	2.6
輸 入 量	195.4	195.4	201.5	0.2	3.1
期末在庫量	291.6	279.4	266.9	▲ 0.2	▲ 4.5
期末在庫率	37.3%	35.3%	34.0%	0.0	▲ 1.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (10 June 2022)

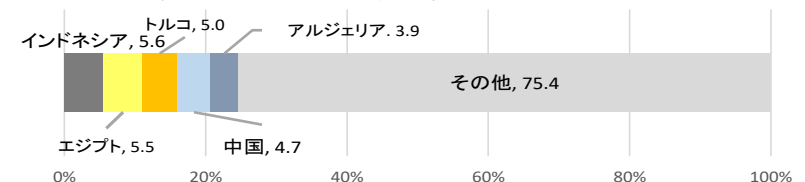
○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量(773.4百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量(204.6百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量(201.5百万トン) (単位：%)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は前年度に比べ 5.5%増加も、ここ 20 年で 2 番目に少ない

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測に比べ 0.2 百万トン上方修正され、47.3 百万トンと、前年度に比べ、冬小麦は減少も春小麦は前年度の干ばつによる減産から回復する見込み。そのうち、冬小麦の実産量は、32.1 百万トンで、品種別には、ハード・レッド・ウインター(HRW)が主産地の干ばつにより 15.8 百万トン(対前年度比 22.4%減)、ソフト・レッド・ウインター(SRW)が 9.7 百万トン(同 0.8%減)、ハード・ホワイト・ウインター(HWW)が 0.4 百万トン(同 23.3%減)、ソフト・ホワイト・ウインター(SWW)は 6.2 百万トン(同 54.1%増)。

「Crop Progress」(2022.6.21)によれば、冬小麦は出穂進捗率が 91%となり出穂はほぼ終了し、収穫が開始されている。収穫進捗率は 25%と前年度同期(15%)、5 年平均(22%)を上回っている。州別には、オクラホマ州やテキサス州では同進捗率が 72%に達している。また、作柄評価(良からやや良の割合)は、干ばつの影響により、前週から 1 ポイント低下し 30%と前年度同期の 49%を下回っている。州別には、HRW の主要生産地であるカンザス州では、27%(前年度同期 63%)、オクラホマ州では 14%(同 60%)、テキサス州では 5% (同 24%) と前年度同期に比べ悪化している。

他方、プレーンズ北部の雨がちな天候から播種が遅れた春小麦は、発芽進捗率が 89%(前年度同期 98%、5 年平均 97%)となった。春小麦の作柄評価(良からやや良の割合)は、59%と干ばつの影響を受けた前年度同期の 27%を上回っている。

「U.S. Drought Monitor」などによれば、6 月 14 日現在、HRW の主要生産地であるカンザス州の西部等を含め、冬小麦生産地の 45%が干ばつ状態となっており、前月(5 月 17 日)の 66%に比べるとかなり改善したものの、前年度(2021.6.15)の 27%よりは高い水準となっている。また、デュラム小麦は、生産地の 44 %が干ばつ状態となっている一方、春小麦は、生産地の 22 %が干ばつ状態であり、それぞれ前月(72%、31%)より改善した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は前月予測からの変更はなく、輸出余力の減少と価格上昇に伴う競争力の低下から、1972/73 年度以降最低の 21.1 百万トンと、前年度に比べ 3.7%減少。一方、2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの修正はなく、21.9 百万トン。

小麦－米国 (冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

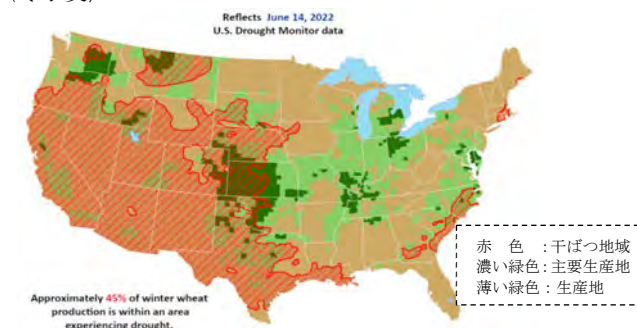
(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年6月～23年5月)		
			予 測 値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.8	44.8	47.3	0.2	5.5
消 費 量	30.5	30.7	30.2	-	▲ 1.4
うち飼料用	2.6	2.7	2.2	-	▲ 19.9
輸 出 量	27.0	21.9	21.1	-	▲ 3.7
輸 入 量	2.7	2.6	3.3	-	26.3
期末在庫量	23.0	17.8	17.1	0.2	▲ 4.3
期末在庫率	40.0%	33.9%	33.2%	0.4	▲ 0.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.89	15.04	15.00	-	▲ 0.3
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.15	0.01	5.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(10 June 2022)

図 米国の干ばつ状況(2022 年 6 月 14 日時点)

(冬小麦)



資料: U.S. Agriculture in Drought (2022.6.16)

写真 干ばつ影響を受けたカンザス州の小麦圃場



＜ カナダ ＞ 干ばつ被害から回復し、生産量は前年度に比べ5割以上増加

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook For Principal Field Crops」(2022.6.20)によれば、2022/23年度の小麦全体の生産量は、前月予測から1.5百万トン上方修正され、33.1百万トンと、カナダ西部の干ばつ被害により減少した2021/22年度に比べ、播種面積と単収(例年の水準を仮定)の増加から52.8%増加する見込み。そのうち、デュラム小麦の生産量は、前月予測からの変更はなく、5.7百万トンと前年度に比べ2倍以上の増加。また、普通小麦の生産量は、前月予測から1.5百万トン上方修正され、27.4百万トンと同44.3%の増加。

小麦全体の播種面積は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ7.5%増加の10.02百万ヘクタールの見込み。そのうち、デュラム小麦は同12.6%増加の2.52百万ヘクタール、普通小麦は、同5.9%増加の7.68百万ヘクタールの見込み。普通小麦のうち、春小麦は、前年度に比べ7%増加したものの、冬小麦は同13%減少した。小麦全体の播種面積の増加は、カナダ統計局「Principal field crop areas, March 2022」(2022.4.26)によれば、菜種、大麦等からのシフトとみられる。

AAFCによれば、デュラム小麦の播種は、サスカチュワン州やアルバータ州で進展し、5月30日時点のそれぞれの播種進捗率は96%及び100%。なお、土壌水分が不足しており、生育には十分な降雨が必要となっている。また、普通小麦の播種は、マニトバ州で冷涼で雨がちな天候から遅延し、サスカチュワン州の一部やアルバータ州で乾燥天候の継続で遅延しており、単収への影響が懸念されている。

【貿易情報・その他】AAFCによれば、2022/23年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から0.3百万トン上方修正され22.2百万トンと、前年度に比べ50.0%増加する見込み。そのうち、デュラム小麦は前月予測からの変更はなく4.4百万トンと、輸出余力の増加から前年度に比べ91.3%増加。普通小麦は前月予測から0.3百万トン上方修正され、17.8百万トンの見込みで、輸出余力の増加や、アフリカやアジアの需要増から前年度に比べ34.6%増加。なお、デュラム小麦は供給量の約70%が輸出に仕向けられる。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022年4月の輸出量は普通小麦が79.7万トン、デュラム小麦は24.5万トンの計104.2万トンで、輸出先国は、普通小麦はインドネシア(20.1%)、中国(18.9%)、デュラム小麦は、アルジェリア(75.1%)、米国(18.4%)の順。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年8月～23年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	35.2	21.7	33.0 (33.1)	-	52.4
消費量	9.1	9.5	9.1 (9.6)	-	▲ 4.2
うち飼料用	4.2	4.5	4.0 (5.2)	-	▲ 11.1
輸 出 量	26.4	15.5	24.0 (22.2)	-	54.8
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	-
期末在庫量	5.7	2.9	3.4 (5.0)	-	17.1
期末在庫率	15.9%	11.7%	10.3% (15.7%)	-	▲ 1.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.02	9.25	9.70 (10.00)	-	4.9
単収(t/ha)	3.51	2.34	3.40 (3.31)	-	45.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(20 June 2022)

写真：マニトバ州の発芽段階の小麦



表 カナダ産普通小麦及びデュラム小麦の輸出先国(2022年4月)
〈普通小麦〉 〈デュラム小麦〉

国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
インドネシア	16.0	20.1	アルジェリア	18.4	75.1
中国	15.1	18.9	米国	4.5	18.4
日本	12.1	15.2	日本	0.9	3.6
バングラデシュ	8.6	10.8	ベネズエラ	0.7	2.9
コロンビア	4.9	6.1	-	-	-
その他	23.0	28.9	その他	-	-
計	79.7	100.0	計	24.5	100.0

注1: Canadian Grain Commissionが認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のみのデータ。
注2 普通小麦の品種は0.1-3Canada Western Red Spring, No.2 Canada Prairie Spring, No.1Canada Western Red winter, No.2 Canada Eastern, Other, デュラムはCanada Western Amber Durum Others
資料: Canadian Grain Commission 「Export of Canadian Grain and Wheat Flour」 (2022年5月27日) をもとに作成。

＜ 豪州 ＞ 生産量は史上最高の前年度を 17.4%下回るも 30.0 百万トンの見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は前月予測からの変更なく、史上最高となった前年度に比べ 17.4%減少し、30.0 百万トンの見込み。2022/23 年度の実収穫面積は、肥料、燃料価格は高いものの、小麦価格が高水準であることから増加。一方、単収は、豊作であった前年度に比べ減少するが、平年よりは高い見込み。

豪州農業資源経済科学局 (ABARES)「Australian Crop Report」(2022.6.7)によれば、2022/23 年度の実生産量は、播種面積が前年度より 1 %増加の 13.2 百万ヘクタールとなることから、30.3 百万トンと 10 年平均を 22%上回り史上第 4 位となる見込み。

主要生産州の実生産量は次の通り。ニュー・サウス・ウェールズ州 (NSW 州)では、播種面積が菜種にシフトし前年度に比べ 1 %減少し、単収も同 22%減少することから、9.9 百万トン(同 23%減)。ウェスタン・オーストラリア州 (WA 州)では、大麦等からのシフトで播種面積が前年度に比べ 1 %増加するものの、単収が同 21%減少することから 10.3 百万トン(同 20%減少)の見込み。

GIWA (西オーストラリア州穀物団体) (2022.6.10)によれば、西豪州の作付面積は前月予測の 4.95 百万ヘクタールから 4.89 百万ヘクタールに下方修正。2022 年 6 月の生育条件は、降雨不足の中部、北部を除いて、前年度より良好である。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、生産量が減少することから、前年度に比べ 12.7%減少するものの、史上第 3 番目となる 24.0 百万トンの見込み。なお、6 月 10 日時点の豪州の輸出価格(FOB)は、旺盛な国際需要を受けて、5 月 12 日時点の 417 ドル/トンから 455 ドル/トンに上昇した。

豪州統計局によれば、2022 年 4 月の輸出量は、前月 (2.9 百万トン)に比べ 2.7 百万トンと減少。また、2022 年 1 月から 4 月までの輸出量は 10.6 百万トン。輸出先国は、中国(20.9%)、フィリピン(12.7%)、インドネシア(12.1 %)、ベトナム(10.1%)の順で、これらの国の輸出量計は全体の約 56%を占める。なお、インドネシアはその多くを豪州から輸入していたが、2018～2020 年の間は豪州の干ばつによる小麦価格の上昇から、黒海周辺国に輸入先を切り替えていた。

また、昨年度の北米産小麦の減産、ウクライナ侵攻による需要の集中等から、輸出港のスロット確保が難しい状況。そのため、物流の遅延や混乱、輸入国の穀物輸入コストの増加が生じている。

小麦－豪州 (冬小麦を主に栽培)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
			予測値、()	は IGC		
生 産 量	33.3	36.3	30.0	(29.9)	-	▲ 17.4
消 費 量	8.0	8.5	7.6	(8.8)	-	▲ 11.2
うち飼料用	4.5	5.0	4.0	(5.0)	-	▲ 20.0
輸 出 量	23.9	27.5	24.0	(24.7)	-	▲ 12.7
輸 入 量	0.2	0.2	0.2	(0.4)	-	-
期末在庫量	4.3	4.8	3.5	(3.2)	-	▲ 28.0
期末在庫率	13.6%	13.4%	11.0%	(9.6%)	-	▲ 2.4
(参考)						
収穫面積(百万ha)	12.90	13.00	13.20	(12.8)	0.30	1.5
単収(t/ha)	2.58	2.79	2.27	(2.34)	▲ 0.06	▲ 18.6

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)
IGC 「Grain Market Report」(19 May 2022)

図 豪州主要生産州別の小麦生産量の推移

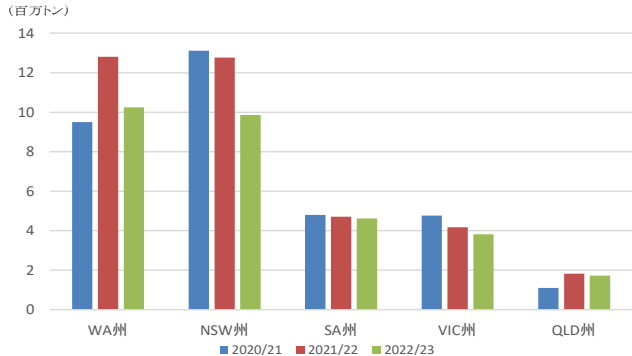


表 豪州の小麦輸出先国別輸出量

2022年4月			2022年1月～4月		
国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	累積輸出量(万トン)	シェア(%)
中国	221.0	20.9	中国	76.1	28.6
フィリピン	134.0	12.7	ベトナム	34.0	12.8
インドネシア	127.8	12.1	フィリピン	33.4	12.5
ベトナム	107.4	10.1	韓国	22.9	8.6
韓国	76.3	7.2	インドネシア	16.5	6.2
その他	392.1	37.0	その他	83.5	31.4
合計	1058.7	100.0	合計	266.3	100.0

資料：豪州統計局のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ EU27+英国 ＞輸出量は世界第2位となる見込み

【生育・生産状況】欧州委員会によれば、EU27の2022/23年度の生産量は、前月予測に比べ0.3百万トン上方修正され、前年度に比べ0.1百万トン増加の139.1百万トンの見込み。そのうち、普通小麦はリトアニア、イタリア等で下方修正されたものの、フランス、ドイツ等で上方修正されたことから、前月予測に比べ0.3百万トン上方修正され、131.4百万トンの見込み。また、デュラム小麦はスペイン、フランス等で下方修正されたものの、イタリアで上方修正されたことから同0.03百万トン上方修正され7.7百万トンの見込み。また、USDAによれば、英国は、前月予測から0.2百万トン上方修正され、14.6百万トン。

USDAによれば、5月中旬から6月初旬にかけて、ヨーロッパ北部及び東部で雨天が続く、土壌に水分が供給された。一方、ヨーロッパ南部および西部では乾燥した気候となり、特にポルトガル、スペイン、イタリア、ギリシャなどの地中海沿岸の地域では、平年よりも高温の日が続いた。フランスの乾燥状態は5月中旬からの降雨によって緩和されたが、降雨の時期が遅すぎたため、多くの冬作物は乾燥による影響を受けたと見られている。スペインでは南部で収穫が開始されているが、依然として乾燥状態が続いており、冬小麦の生産量減少が懸念されている。そのため、ヨーロッパの多くの地域では気温が高く平年より約1週間生育が進んでいるものの、土壌水分は十分ではない。

フランスアグリメール(2022.6.6)によれば、フランス産普通小麦、デュラム小麦とも出穂が終了。普通小麦の生育は、前年度同期(出穂進捗率92%)に比べると早い。一方、デュラム小麦の生育は前年度並(同99%)である。また、同6日時点のフランス産小麦の生育状況を示す「とても良いから良い」の割合は、乾燥天候の影響で、普通小麦は前月の72%から66%に低下し、前年度同期の81%を下回り、デュラム小麦も前月の83%から62%に低下し、前年度同期の70%を下回っている。今後の乾燥天候による作柄への影響が懸念されている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度のEU27の輸出量は、前月予測から0.1百万トン上方修正され36.0百万トンと、前年度に比べ22.0%増加し世界第2位となる見込み。

なお、フランスアグリメール(2022.6.6)によれば、2021/22年度のフランス産普通小麦の輸出量は前月予測(9.3百万トン)から9.1百万トンに下方修正された。これは、中国の新型コロナウイルス感染対策に伴う輸入量の減少と、小麦価格の高止まりが要因である。

小麦－EU27+英国（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	136.4	152.4	150.7 (152.0)	▲ 0.2	▲ 1.1	
消費量	118.2	125.1	124.1 (121.0)	▲ 0.1	▲ 0.8	
うち飼料用	48.5	53.9	52.1 (48.8)	▲ 0.1	▲ 3.2	
輸 出 量	30.2	30.2	37.0 (35.3)	0.1	22.5	
輸 入 量	8.6	6.8	7.0 (7.2)	-	2.9	
期末在庫量	12.1	16.1	12.7 (14.0)	0.6	▲ 21.2	
期末在庫率	8.2%	10.3%	7.9% (9.0%)	▲ 0.1	▲ 2.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	24.37	26.02	25.90 (25.68)	-	▲ 0.5	
単収(t/ha)	5.59	5.86	5.82 (5.92)	▲ 0.01	▲ 0.7	
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(10 June 2022) IGC 「Grain Market Report」(19 May 2022) 表内及び () 内のデータはEU27ヶ国+英国のデータ						

表 EU産小麦の輸出先国別輸出量

《普通小麦》

2022年3月			2021年7月-2022年3月		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
1 エジプト	41.96	19.1%	アルジェリア	337.65	15.7%
2 アルジェリア	29.95	13.6%	エジプト	230.90	10.8%
3 イラン	19.80	9.0%	中国	221.36	10.3%
4 中国	17.47	8.0%	ナイジェリア	161.80	7.5%
5 モロッコ	14.03	6.4%	モロッコ	115.34	5.4%
6 ナイジェリア	10.92	5.0%	韓国	86.30	4.0%
その他	85.39	38.9%	その他	993.15	46.3%
計	219.52	100%	計	2,146.49	100%

《デュラム小麦》

2022年3月			2021年7月-2022年3月		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
1 チュニジア	30.92	28.9%	チュニジア	26.32	53.4%
2 アルジェリア	26.25	24.6%	アルジェリア	15.63	16.2%
3 モロッコ	14.80	13.8%	トルコ	6.49	5.3%
4 リビア	14.50	13.6%	コートジボワール	6.26	5.1%
5 スイス	6.63	6.2%	モロッコ	4.24	3.8%
6 コートジボワール	3.78	3.5%	スイス	3.82	2.1%
その他	10.00	9.4%	その他	17.25	21.6%
計	106.88	100%	計	80.00	100%

資料：EC 欧州委員会, Cereals exports and imports (2022.5.23)をもとに農林水産省にて作成

＜ 中国 ＞ 小麦生産量は前年度に比べ 3.2%増加の 138.5 百万トン

【生育・生産状況】中国糧油情報センター(2022.6.2)によれば、2022/23 年度の生産量は、単収の増加により前月予測から 1.7 百万トン上方修正され、前年度に比べ 3.2%増加の 138.5 百万トンの見込み。

作期別には、冬小麦は前月予測に比べ、1.6 百万トン上方修正され 132.9 百万トン(対前年度比 3.2%増)、春小麦は同 0.1 百万トン上方修正され 5.6 百万トン(同 4.2%増)。なお、省別の生産量のシェアは、冬小麦が、河南省(28.6%)、山東省(19.9%)、安徽省(13.0%)、河北省(11.0%)。一方、春小麦は冬小麦に比べ少ないものの、新疆地区、内モンゴル地区で生産されている。

2022/23 年度の冬小麦の生育条件は、主要産地の河南省等では、概ね登熟期に適した天候となり、安徽省等では収穫に適した乾燥天候となった。中国農業農村部によると、6 月 16 日時点で冬小麦の収穫面積は 18.3 百万ヘクタール(作付面積の 90.4%)で、収穫進捗率は前年度同期比 1.6 ポイント遅い。中国糧油情報センターによれば、冬小麦の各生産地域の収穫状況は、陝西省等で収穫が開始、河南省で約 10%、安徽省で約 20%が収穫され、四川省では収穫が終了した。一方、中国中央气象台(2022.6.6)によれば、全国の春小麦は、分げつ期から出穂期に入っている。

なお、前年度の秋の洪水により冬小麦の播種に遅れが発生し、その影響が懸念されたが、全国の冬小麦の一、二類苗の比率は、越冬前の 72.1%に比べ 17.4 ポイント上昇した。作柄は予想を上回っており、多くの生産地域で増産傾向となり豊作が見込まれている。

【貿易情報・その他】農業農村部飼料行業情報網(2022.5.23)によれば、小麦価格の上昇により、飼料用需要は減少した。中国糧油情報センターによれば、2022/23 年度の飼料用需要は前月予測から 8.0 百万トン下方修正され 19.0 百万トンと、前年度に比べ 50.0%減少した。また、小麦輸入量は前年度(10.4 百万トン)から 25.2%減少し、7.8 百万トンの見込み。中国海関統計によれば、2022 年 4 月の小麦輸入量は、前年度同期(89.5 万トン)を 22.6%下回る 69.3 万トン。2022 年 1 月から 4 月の輸入量は、同(380.7 万トン)を 2.0%下回る 372.9 万トン。農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022 年 4 月号」によれば、国内卸売価格は、依然高い水準であるものの、小麦粉の消費需要が弱いため安定した。今後、新穀の小麦が流通するまで安定的に推移するとみられている。

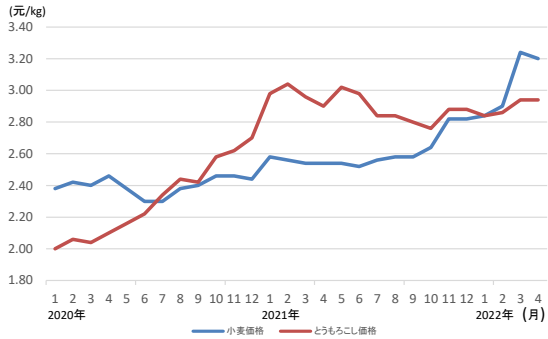
小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	134.3	137.0	135.0 (135.0)	-	▲ 1.4	
消費量	150.0	148.0	144.0 (141.0)	-	▲ 2.7	
うち飼料用	40.0	35.0	30.0 (26.5)	-	▲ 14.3	
輸 出 量	0.8	0.9	0.9 (1.0)	-	5.9	
輸 入 量	10.6	9.7	9.5 (9.4)	-	▲ 2.1	
期末在庫量	144.1	141.9	141.5 (135.4)	-	▲ 0.3	
期末在庫率	95.6%	95.3%	97.7% (95.3%)	-	2.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.40 (23.5)	-	▲ 0.7	
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.77 (5.74)	-	▲ 0.7	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)
IGC 「Grain Market Report」(19 May 2022)

図 小麦、とうもろこしの中国国内価格の推移



注：小麦：河南省鄭州市食料卸売市場の卸売価格、とうもろこし：全国平均卸売価格

資料：中国糧油情報センター

表 中国の小麦輸入先国(2022年4月、2022年1月～2022年4月、2021年1月～2021年4月)
(輸出量:万トン、シェア%)

2022年4月			2022年1月～2022年4月			2021年1月～2021年4月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	49.6	71.5	豪州	209.0	56.0	カナダ	108.9	28.6
フランス	19.2	27.6	フランス	133.0	35.7	豪州	104.5	27.4
カナダ	0.4	0.5	カナダ	30.0	8.0	米国	86.2	22.6
カザフスタン	0.2	0.4	カザフスタン	0.7	0.2	フランス	65.4	17.2
—	—	—	ロシア	0.1	0.0	カザフスタン	7.5	2.0
その他	0.0	0	その他	0.0	0.0	その他	8.2	2.2
計	69.3	100	計	372.9	100.0	計	380.7	100.0

資料：中国海関統計(2022.5.20)をもとに農林水産省で作成

資料：中国海関統計(2022.5.20)をもとに農林水産省にて作成

＜ ロシア ＞ 小麦輸出量は世界第 1 位

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、天候に恵まれ冬小麦の単収が上昇したことにより、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度に比べ 7.8% 増加の 81.0 百万トンの見込み。作期別の生産量は、冬小麦は前月予測に比べ、1.0 百万トン上方修正され 59.5 百万トン(前年度 52.2 百万トン)、春小麦は前月予測からの変更はなく 21.5 百万トン(同 23.0 百万トン)の見込み。冬小麦は前年度に比べ、収穫面積が減少するものの、冬期の枯死も少なく生育状況が良好で単収が増加した。他方、春小麦は収穫面積が減少し、単収も減少する見込み。

2022/23 年度の生育状況は、特にロシアヨーロッパ部の南部や北カフカス地域で降雨により 5 月を通じて土壌水分が十分となり良好な生産見通しとなった。なお、その十分な土壌水分のため、最近生じた高温の影響はなかった。なお、同地域で冬小麦の約 56%が生産されている。また、冬小麦の約 44%が生産される中央連邦管区や沿ボルガ連邦管区では、6 月中旬から下旬にかけて生産量を左右する重要な登熟期に入り、7 月に収穫期を迎える見込み。

他方、ロシア農業省の速報値によれば、6 月 3 日時点の春小麦の播種面積は、播種予定面積(13.01 百万ヘクタール)の 92.7%に当たる 12.06 百万ヘクタールとなったものの、前年度同期(12.77 百万ヘクタール)に比べ減少している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 40.0 百万トンと前年度に比べ 21.2%増加し、史上第 2 位となる見込み。輸出量の増加の要因は、生産量の増加や他の主要輸出国に比べ輸出価格が相対的に安価なこと、輸出競合国であるウクライナへのロシア侵攻により海上輸送による輸出が大幅に制限されていることである。また、インドが 5 月に国内供給の確保のため輸出規制を開始したことや、対露経済制裁に参加していない中近東、北アフリカからの強い需要から、2022/23 年度はロシアが世界第 1 位の輸出国となる見込み。

現地情報会社によれば、5 月の小麦輸出量は前年度同期に比べ約 2 倍の 1.2 百万トン。ロシア穀物同盟によれば、2 月 15 日から設定された輸出枠が 6 月 30 日で解除されること、7 月以降の新年度もロシアが主要輸出国になるとの見込みから、7 月以降の新年度は輸出需要が高まると見られている。なお、可変関税額は、2022 年 4 月中旬に初めて 100 ドル/トンを超え、6 月下旬には 146.1 ドル/トンまで上昇した。

小麦ーロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	85.4	75.2	81.0 (84.7)	1.0	7.8	
消 費 量	42.5	41.8	42.3 (44.3)	-	1.2	
うち飼料用	19.0	18.5	19.0 (19.4)	-	2.7	
輸 出 量	39.1	33.0	40.0 (37.1)	1.0	21.2	
輸 入 量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	-	-	
期末在庫量	11.4	12.1	11.1 (14.7)	-	▲ 7.9	
期末在庫率	13.9%	16.2%	13.5% (18.0%)	▲ 0.2	▲ 2.6	

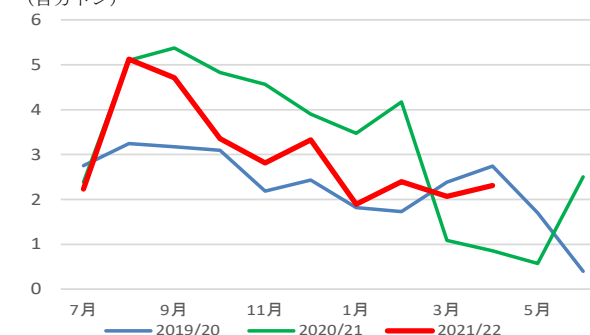
(参考)

収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	27.50 (28.2)	-	▲ 0.5
単収(t/ha)	2.98	2.72	2.95 (3.00)	0.04	8.5

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)
IGC 「Grain Market Report」(19 May 2022)

図: ロシア産小麦の輸出量の推移

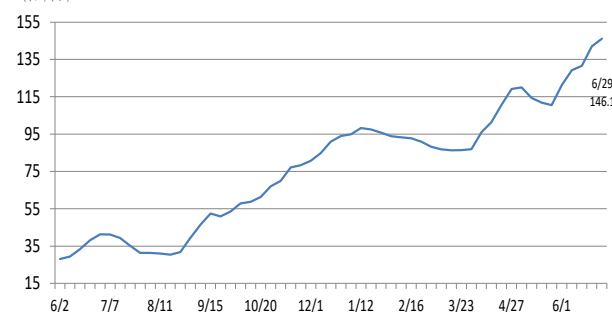
(百万トン)



資料: 農業市況研究所のデータをもとに農林水産省にて作成

図: ロシア産小麦の輸出関税額の推移(2021 年 6 月～2022 年 6 月)

(ドル/トン)



資料: ロシア農業省のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ウクライナ＞ ロシアの侵攻により小麦の輸出量は前年度に比べ47.4%減少

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく、21.5百万トンの見込み。ロシアの侵攻により、前年度に比べ、収穫面積と単収が減少し、生産量は史上最高だった前年度に比べ34.9%減少する見込み(過去5年平均より23%減)。

ウクライナ農業政策食料省(2022.6)によれば、2022/23年度の春小麦の播種は終了し、播種面積は前年度と同水準の0.19百万ヘクタールとなった。

ほぼ順調に播種が進んだ理由は、ロシアの侵攻前に、生産者が無機肥料(必要分の80%)、種子(同70~80%)、農薬(60%)等を購入していたためである。

他方、ウクライナ統計局によれば、主要作物の冬小麦の播種面積は前年度に比べ2.5%減少の6.54百万ヘクタール(クリミア及びドネツク州、ルガンスク州を含まず、現在の紛争地域のデータを含む)である。

同省は、2022/23年度の全体的小麦収穫量を18.0百万トンから20.0百万トンと見込んでいる。

2022/23年度の小麦の生育状況(5月末現在)は、冬小麦が茎立期から出穂期の初期で、春小麦が第3葉形成期から分げつ、根茎形成期。作柄は共に概ね良好及び並である。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ47.4%減少の10.0百万トンの見込み。輸出量の減少要因は、ロシアの侵攻による黒海の港湾の閉鎖や、生産量の減少である。なお、海上輸送の代替として、鉄道利用による近隣ヨーロッパ諸国を通じての輸出方法が検討されている。

また、通常ウクライナでは小麦の98%が黒海経由で輸出されていたが、南部の港湾地域がロシアからの攻撃を受けていること、及び黒海に機雷が敷設されていることから、ポーランド経由で鉄道による輸出が検討されているとの報道もある。

しかし、通関手続きの遅れ、及びインフラの問題(ウクライナのレール幅が欧州と異なる)があり、輸出は遅延し、穀物等の輸出品は同国西部に滞留している。このため、農業政策食料省によれば、2022年3月、4月、5月のそれぞれの小麦輸出量は、3.3万トン(対前年度同月比95.3%減)、0.9万トン(同98.7%減)、4.4万トン(同94.9%減)となった。

小麦－ウクライナ (主に冬小麦を栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	25.4	33.0	21.5 (19.4)	-	▲ 34.9	
消費量	8.7	10.0	11.2 (8.7)	-	12.0	
うち飼料用	2.6	4.0	6.0 (2.8)	-	50.0	
輸出量	16.9	19.0	10.0 (10.0)	-	▲ 47.4	
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-	
期末在庫量	1.5	5.6	6.0 (7.9)	-	7.1	
期末在庫率	5.9%	19.3%	28.3% (42.4%)	-	9.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.85 (5.03)	-	▲ 21.1	
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.68 (3.86)	-	▲ 17.3	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)

図 ウクライナの鉄道貨物路線図



ウクライナと隣接する EU 加盟国間の主な鉄道の国境検問所は、ポーランドとの①「イゾフ〜グルベシユフ」、②「モスティスカ〜メデカ」、③「ヤゴジン〜ドログスク」、スロバキアとの④「チョプ〜チエルナ・ナド・ティソウ」、ハンガリーとの⑤「チョプ〜ザホニ」、ルーマニアとの⑥「バドウル・シレ〜ドルネシュティ」の6ヶ所である。しかし、線路幅が異なるため積み替えが不可欠であることや、台車の不足などの理由により、実際の処理能力は半分程度とも見られている。

資料: ウクライナ鉄道

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・ウクライナで上方修正され、前月から上方修正された。

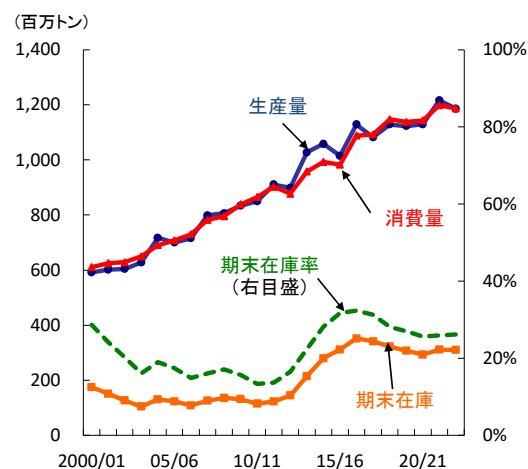
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・ウクライナ、EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・トルコで下方修正され、前月からわずかに下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」（2022.6.10）をもとに農林水産省にて作成

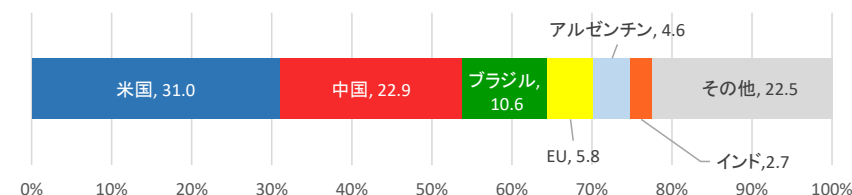
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

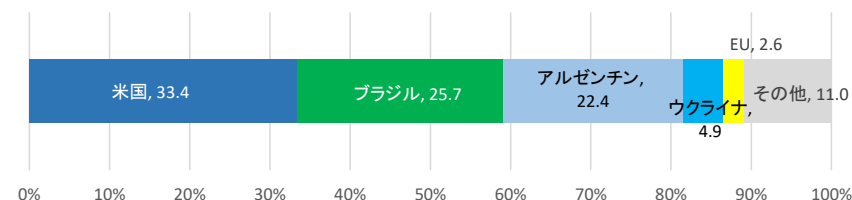
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,129.0	1,216.1	1,185.8	5.1	▲ 2.5
消 費 量	1,143.2	1,198.4	1,186.3	1.3	▲ 1.0
うち飼料用	723.5	748.7	747.9	1.3	▲ 0.1
輸 出 量	182.9	196.7	182.7	▲ 0.0	▲ 7.1
輸 入 量	185.3	179.5	176.7	▲ 0.2	▲ 1.5
期末在庫量	293.3	310.9	310.5	5.3	▲ 0.2
期末在庫率	25.7%	25.9%	26.2%	0.4	0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(10 June 2022)

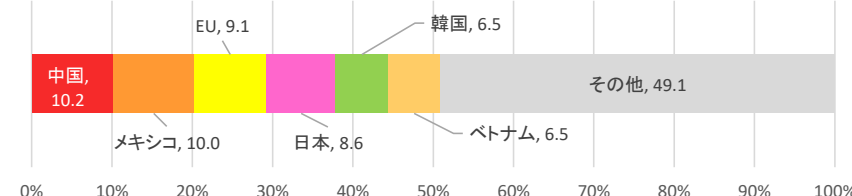
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,185.8百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(182.7百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(176.7百万トン) (単位：%)



(2) 国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は主に収穫面積減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より4.3%減の367.3百万トンの見込み。肥料価格高騰の影響から中西部の主要生産州で作付けが肥料の投入量のより少ない大豆等へシフトしたことが要因。

5月上旬までの中西部の低温で雨がちな天候により遅れていた作付けは5月中旬以降の天候改善により急速に進展し、作付けはほぼ終了した。USDA「Crop Progress」(2022.6.21)によれば、主要18州における発芽率は95%と前年度同期(99%)より遅れているものの、過去5年平均(95%)並みとなっている。作柄評価は、良からやや良が70%と前年度同期(65%)を上回っている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、スターチ・グルコース向けの需要が前月予測から0.1百万トン上方修正された。エタノール用需要が前年度から横ばいの一方、生産量の減少による国内価格の上昇等から飼料用需要が減少することから、前年度より2.2%減の309.1百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少に加えて、世界的な価格高騰による需要の抑制、一定の国内需要があること等から、前年度より2.0%減の61.0百万トンの見込み。なお、2021/22年度の輸出量は、カナダ向けの輸出見通しの下方修正等を背景に前月予測から1.3百万トン下方修正され、2020/21年度より11.0%減の62.2百万トンの見込み。

USDAによれば、2022年輸出検証高(2022年1月6日～6月2日)は、30.5百万トンであり、内訳は中国(8.4百万トン)、メキシコ(6.8百万トン)、日本(5.6百万トン)、コロンビア(2.5百万トン)の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前年度より5.7%減の35.6百万トンの見込み。なお、期末在庫率は9.6%で、前年度より低下し、引き続き低水準の見込み。

とうもろこしー米国

(単位: 百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	358.5	383.9	367.3	-	▲ 4.3
消 費 量	306.5	316.0	309.1	0.1	▲ 2.2
うち飼料用	142.2	142.9	135.9	-	▲ 4.9
エタノール用等	127.8	136.5	136.5	-	-
輸 出 量	69.9	62.2	61.0	-	▲ 2.0
輸 入 量	0.6	0.6	0.6	-	-
期末在庫量	31.4	37.7	35.6	1.0	▲ 5.7
期末在庫率	8.3%	10.0%	9.6%	0.3	▲ 0.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.31	34.56	33.06	-	▲ 4.3
単収(t/ha)	10.76	11.11	11.11	-	-

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)

図: 米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格(FOB)の推移



資料: IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加により、前年度より 8.6% 増の 126.0 百万トンで史上最高の見込み。

なお、ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2022.6.8）によれば、2021/22 年度の収穫が終了した夏とうもろこしの生産量は、2020/21 年度比 0.3% 増の 24.8 百万トンの見込み。

一方、生育中で、一部では収穫を開始した冬とうもろこしの生産量は、マット・グロッソ州やゴイアス州など中西部の主産地では乾燥が続く一方、南部産地では良好な天候に恵まれ、干ばつ・霜害で減産となった 2020/21 年度に比べ 45.0% 増の 90.4 百万トンの見込み。

夏作・冬作の合計では 2020/21 年度比 32.3% 増の 115.2 百万トンで史上最高の見込み。（P.23 大豆ーブラジルのクロップカレンダー参照）。

冬とうもろこしの主産地である中西部のマット・グロッソ州で 6 月 10 日現在、収穫率は 16% で前年度同期より 2 ポイント遅れている。南部のパラナ州で 6 月 6 日現在、冬とうもろこしの 26% が成熟期に入っている。ブラジル全体で収穫作業は 8 月まで続く見込み。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より 5.5% 増の 77.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 5.6% 増の 47.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022 年 1～4 月の輸出量は 4.2 百万トンで、前年同期（3.5 百万トン）と比べ 18.7% 増となっている。内訳は、1 位がエジプト 101 万トン、2 位がイラン 86 万トン、3 位が韓国 58 万トン。4 月の輸出量は 69 万トンで、前年同月（13 万トン）と比べ、5.3 倍。ロシアのウクライナ侵攻の影響により、ウクライナ産の市場シェアが低下したことで、ブラジル産の中東向け輸出が増加した。なお、5 月 23 日、ブラジル農務省は中国政府とブラジル産とうもろこしについて検疫問題をクリアし対中輸出の合意に至ったと公表した。

とうもろこしーブラジル

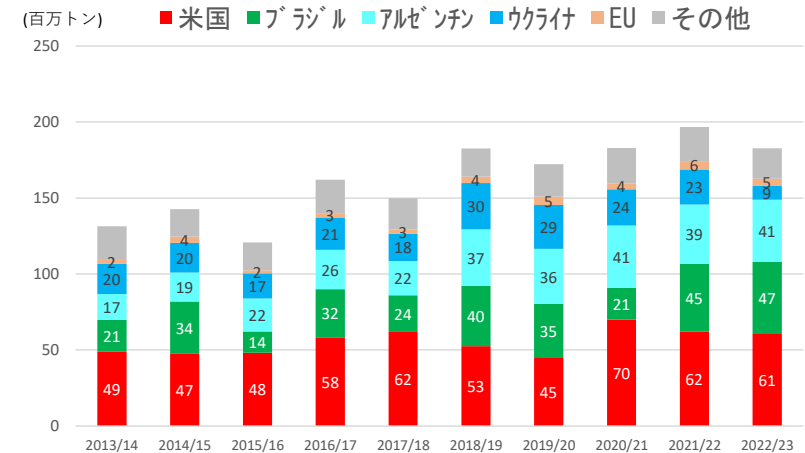
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが 3/4 を占め、夏とうもろこしは 1/4）

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)	
生 産 量	87.0	116.0	126.0 (123.1)	-	8.6	
消 費 量	70.0	73.0	77.0 (78.6)	-	5.5	
うち飼料用	59.5	62.0	65.5 (56.5)	-	5.6	
輸 出 量	21.0	44.5	47.0 (43.6)	-	5.6	
輸 入 量	2.9	2.0	1.3 (0.5)	-	▲ 35.0	
期末在庫量	4.2	4.7	8.0 (8.4)	-	71.0	
期末在庫率	4.6%	4.0%	6.4% (6.9%)	-	2.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	19.90	21.80	22.70 (21.80)	-	4.1	
単収(t/ha)	4.37	5.32	5.55 (5.65)	-	4.3	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)
IGC 「Grain Market Report」(19 May 2022)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2022.6.10) のデータをもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収の増加により、前年度より 3.8%増の 55.0 百万トンで史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.6.16）によれば、2021/22 年度の収穫進捗率は 37%で、霜害の影響を受けやすい大豆の収穫作業を優先させているため過去 5 年平均より 14 ポイント遅れている。作柄は良からやや良が 71%と前週（76%）から低下。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より 2.2%増の 14.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 5.1%増の 41.0 百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1～4 月の輸出量は 11.0 百万トンで、前年同期（9.9 百万トン）より 10.5%増。内訳は、1 位がベトナム 1.7 百万トン、2 位がペルー 1.0 百万トン、3 位がマレーシア 1.0 百万トン。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、その後継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧漁業大臣が 2021/22 年度のとうもろこしと小麦の輸出に関し、輸出上限数量を設定することを表明。同省プレスによれば、とうもろこしの輸出上限数量は 4,160 万トンとしている。

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)	
生 産 量	52.0	53.0	55.0 (60.6)	-	3.8	
消 費 量	13.5	13.7	14.0 (21.2)	-	2.2	
うち飼料用	9.5	9.8	10.0 (16.3)	-	2.0	
輸 出 量	40.9	39.0	41.0 (41.0)	-	5.1	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	1.2	1.5	1.5 (2.5)	-	-	
期末在庫率	2.2%	2.8%	2.7% (4.0%)	-	▲ 0.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.55	7.20	7.00 (8.00)	-	▲ 2.8	
単収(t/ha)	7.94	7.36	7.86 (7.58)	-	6.8	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)
IGC 「Grain Market Report」(19 May 2022)

写真：北部サンタフェ州の遅植えとうもろこしの生育風景 (5月30日撮影)

前年 12 月末に作付けされ、成熟期を迎えている。

収穫作業は 7 月を予定。

生育期を通じた天候不順で、実入りが悪い。



< 中国 > 生産量減少、消費量史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、政府補助金による大豆奨励策により作付けが大豆にシフトし、収穫面積が減少することから、前年度より0.6%減の271.0百万トンの見込み。

中国中央气象台週報（2022.6.6）によれば、5月は日照時間が少なかったものの、土壌水分に恵まれ、播種・生育は順調で、6月上旬現在、東北地区の春とうもろこしは出苗期から三葉期に入っている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より1.4%増の295.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、主要な輸入先であるウクライナの輸出減少に伴い、前年度より21.7%減の18.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～4月の輸入量は9.3百万トンで、前年同期比で8.5%増。内訳は、ウクライナ産4.7百万トン（50%）、米国産4.5百万トン（48%）。

5月23日には、中国政府は、ブラジル産とうもろこしについても検疫問題をクリアし輸入の合意に至ったと公表した。しかし、遺伝子組み換えに係る事項等を調整中とみられている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年4月号」によると、4月の国内流通価格は、2,900元/トンと前月（2,880元/トン）からやや上昇した。主な要因は、一部の地域で新型コロナウイルス感染対策が徐々に緩和され、加工業者の操業再開が需要を押し上げ、取引業者の仕入れ需要が高まった一方、小麦等の価格上昇でとうもろこしの飼料需要が増加したことである。また、4月の輸入価格は、ロシアのウクライナ侵攻による黒海での穀物輸出の中断、米国中西部の悪天候による作付けの遅れ等により、3,220元/トンと前月（3,120元/トン）から上昇し、国内価格を上回っている。他の穀物の代替輸入等も含め、今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

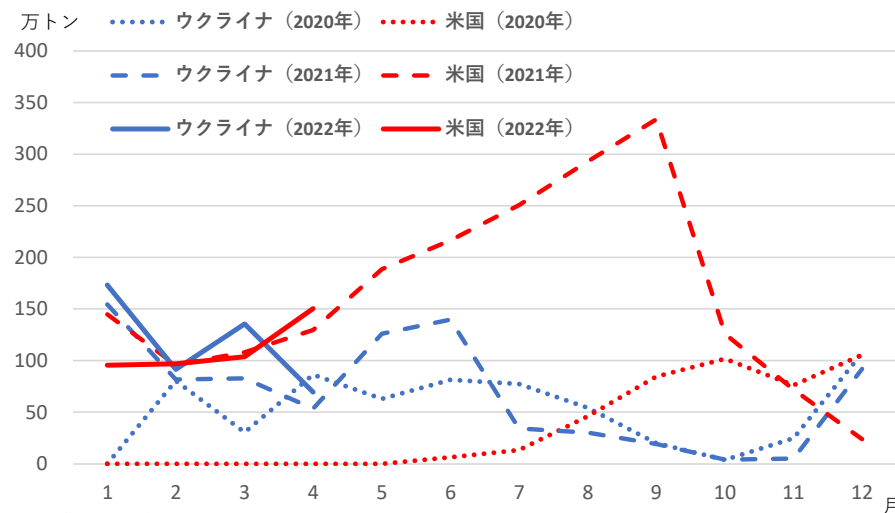
とうもろこしー中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	260.7	272.6	271.0 (273.0)	-	▲ 0.6
消 費 量	285.0	291.0	295.0 (305.2)	-	1.4
うち飼料用	203.0	209.0	214.0 (203.0)	-	2.4
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-
輸 入 量	29.5	23.0	18.0 (19.0)	-	▲ 21.7
期末在庫量	205.7	210.2	204.2 (175.0)	-	▲ 2.9
期末在庫率	72.2%	72.2%	69.2% (57.3%)	-	▲ 3.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.00 (42.50)	-	▲ 0.7
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.30 (6.42)	-	0.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)
IGC 「Grain Market Report」(19 May 2022)

図：中国におけるウクライナ・米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

＜ ウクライナ ＞ ロシアの侵攻の影響等で生産量・輸出量が大幅に減少見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、ロシアによるウクライナ侵攻の影響で、燃料や肥料等の生産資材不足もあり、史上最高の生産量となった前年度より40.7%減の25.0百万トンの見込み。ただし、ウクライナ政府発表の作付け進捗データに基づく収穫面積の上方修正により前月予測から5.5百万トン上方修正された。

ウクライナ農業政策食料省によれば、作付けはほぼ終了し、6月16日時点の2022/23年度の作付面積は4.6百万ヘクタールで前年度（5.5百万ヘクタール）より減少している。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、生産量の大幅な減少に伴い、前年度より18.9%減の10.7百万トンの見込み。ただし、生産量の上方修正分（5.5百万トン）の一部は侵攻により利用に適さなくなるとの予想から、便宜的に飼料用等消費が1.5百万トン上方修正された。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、生産量の上方修正にも関わらず、ロシアの侵攻以降黒海の港の閉鎖が継続していることから、前月予測からの変更はなく、前年度より60.9%減の9.0百万トンの見込み。この輸出量は、紛争以前の潜在的な輸出可能量の三分の一以下となっている。

ウクライナ農業政策食料省によれば、5月の穀物・油糧種子・副産物の輸出量は174万トンで4月より180%増。3月～5月の輸出のうち道路経由11%、鉄道経由51%、ドナウ川沿いの港経由37%となっている。うち、とうもろこしの5月の輸出量は96万トンで4月の60万トンより60%増も、前年同月の225万トンに比べ大幅に減少。

USDAによれば、2022/23年度の実在庫量は、生産量の上方修正分のおお半が在庫となるため、前月予測から4.0百万トン上方修正され、前年度より78.3%増の12.1百万トンと史上最高の見込み。小麦を加算すると穀物の実在庫量は20.0百万トンに達する。ウクライナ政府は、生産者に今後の収穫を保全するため、サイロバッグのような移動式貯蔵設備の入手を支援するとみられる。

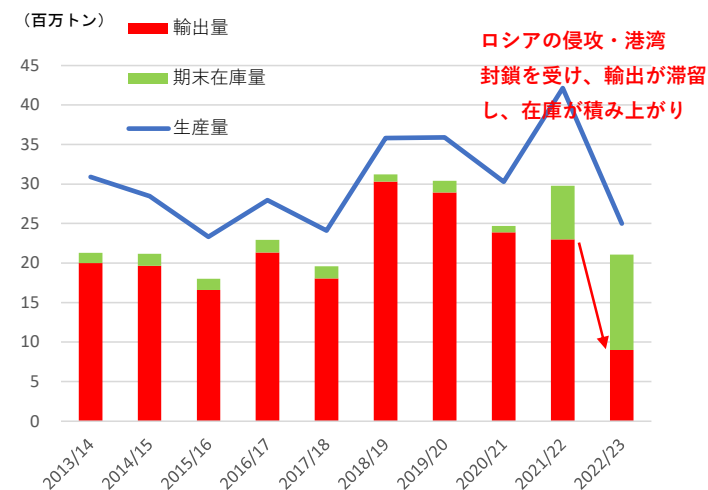
とうもろこしーウクライナ

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	30.3	42.1	25.0 (18.6)	5.5	▲ 40.7
消 費 量	7.1	13.2	10.7 (8.8)	1.5	▲ 18.9
うち飼料用	5.9	12.0	9.5 (5.5)	1.5	▲ 20.8
輸 出 量	23.9	23.0	9.0 (10.0)	-	▲ 60.9
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 100.0
期末在庫量	0.8	6.8	12.1 (9.2)	4.0	78.3
期末在庫率	2.7%	18.7%	61.3% (49.3%)	16.9%	42.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.50 (3.30)	1.00	▲ 18.0
単収(t/ha)	5.62	7.68	5.56 (5.64)	▲ 0.01	▲ 27.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)
IGC「Grain Market Report」(19 May 2022)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.6.10)をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

生産量

前年度比



2022/23 年度

前月比



- ・インド、ペルー、ドミニカ共和国で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

消費量

前年度比



前月比



- ・エジプトで下方修正されたものの、インド、ブラジル等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量

前年度比



前月比



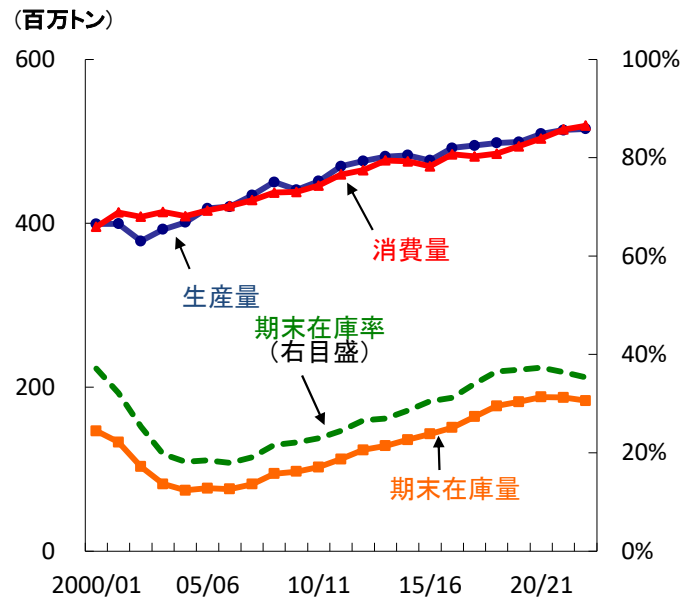
- ・前月から変化なし。史上最高の見込み。

期末在庫量

前年度比



前月比



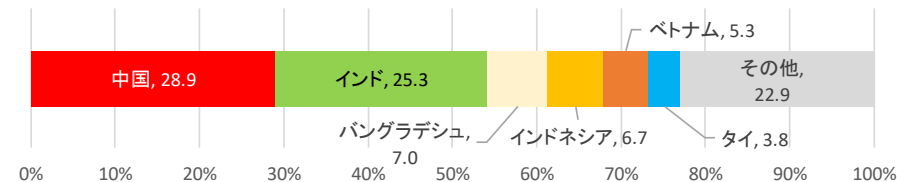
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

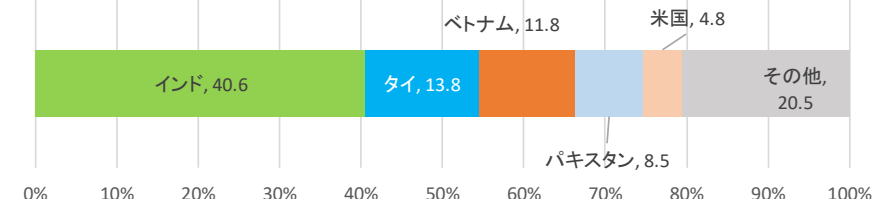
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	513.7	515.4	0.7	0.3
消 費 量	503.6	514.4	519.2	0.8	0.9
輸 出 量	50.9	52.9	54.2	—	2.4
輸 入 量	46.5	52.3	52.5	▲ 0.2	0.4
期末在庫量	188.0	187.3	183.4	▲ 2.8	▲ 2.1
期末在庫率	37.3%	36.4%	35.3%	▲ 0.6	▲ 1.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（10 June 2022）

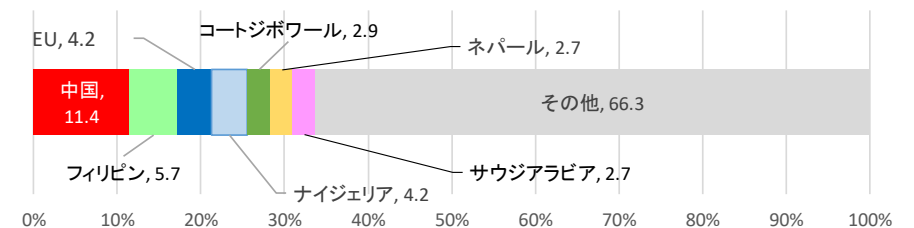
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(515.4百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(54.2百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(52.5百万トン)（単位：%）



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 減産に伴い輸入が史上最高の見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変化はなく、特にカリフォルニア州における収穫面積の減少、および単収の若干の低下から、対前年度比 4.8%減の 5.8 百万トンと、ここ 5 年間で最も少なくなる見込み。(うち長粒種が 4.5 百万トン、単粒種が 1.3 百万トン)

同「Rice Outlook」(2022.6.14)によれば、南部の多くの地域は雨で作付けの開始が遅れたものの、6月5日までの週で、ほとんどの州がほぼ例年通りの進捗率となった。同「Crop Progress」(2022.6.21)によると、6月19日までの週で、主要6州における出穂率は5%と前年同期(3%)より高いものの、過去5年平均(5%)と同水準。作柄評価は、やや良から最良が99%と、ほぼ前年同期(97%)と同じ。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、供給量の減少により、対前年度比 3.8%減の 4.5 百万トンの見込み。

2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、引き続きタイ産ジャスミン米やインド産バスマティ米の輸入増加や、主にカリフォルニア州の干ばつの影響により中・短粒種米の輸入が史上最高になるとの予想から、対前年度比 7.1%増の 1.2 百万トンと、史上最高の見込み。

2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、供給量の減少、輸出価格の上昇により米国産米の競争力低下が予想されることから、対前年度比 2.6%減の 2.6 百万トンの見込み。

同「Rice Outlook」(2022.6.14)によれば、長粒種の価格はここ数か月間上昇しており、6月7日までの週のイラク向け長粒種(2等、砕米4%混入)は700ドル/トンと、2008年10月以来の高値となった(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。また中・短粒種の価格もここ数か月間上昇しており、6月7日までの週の地中海向けカリフォルニア米(1等、砕米4%混入)は、1,410ドル/トンと、5月10日までの週から45ドル上昇し、過去最高となった。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約2割

(単位: 百万精米トン)

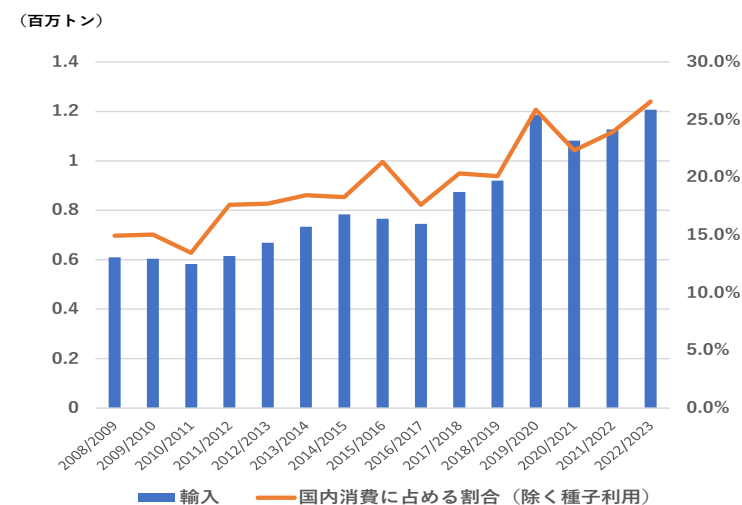
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月~23年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.2	6.1	5.8	-	▲ 4.8
消費量	4.9	4.7	4.5	-	▲ 3.8
輸出量	3.0	2.7	2.6	-	▲ 2.6
輸入量	1.1	1.1	1.2	-	7.1
期末在庫量	1.4	1.2	1.1	0.0	▲ 10.7
期末在庫率	17.8%	16.5%	15.3%	0.6	▲ 1.2

(参考)

収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.97	-	▲ 4.0
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.52	-	▲ 1.4

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)

図: 2022/23年度の輸入が史上最高の見込み



資料: USDA「Rice Outlook」(2022.6.14)より

< インド > 単収の向上により生産量が7年連続史上最高を更新

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、単収の上方修正により、前月予測から0.5百万トン上方修正され、対前年度比0.6%増の130.5百万トンと、7年連続で史上最高を更新する見込み。南西部には例年通りモンスーンが到来している。

なお、USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2022.6.14)によると、降雨量が例年より非常に少なく、一部地域で、カリフ米の播種には土壌水分量が不足している。6月1日までの降雨量が、過去30年で2番目の低水準となっている地域もある。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の上方修正に伴い、前月予測から0.5百万トン上方修正され、対前年度比0.5%増の107.5百万トンと史上最高の見込み。これは、小麦の供給逼迫を受け、政府が低所得世帯向け食料配給プログラム等で対象穀物を小麦からコメへシフトさせているため。

USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、史上最高の生産量や価格競争力から、22.0百万トンと、前年度を4.8%上回り、史上最高となる見込み。輸出シェアは世界全体の約41%を占め、世界最大のコメ輸出国となる見通し。また、主に中国、西アフリカ、ベトナム向けの碎米輸出量も史上最高となる見込み。

なお、インド商務省によると、2021年4月～2022年3月の輸出量の合計は21.2百万トンであり、主要輸出先国は中国(1.6百万トン)、バングラデシュ(1.6百万トン)、ベナン(1.5百万トン)、ネパール(1.4百万トン)である。

USDAによると、2022/23年度の期末在庫量も、史上最高の39.7百万トンの見込み。ただし、2021/22年度の消費量の上方修正により、前月予測から2.8百万トン下方修正された。

インド産米(碎米5%混入)の6月7日までの週の価格は、330ドル/トンと、依然としてアジアの主要輸出国の中で最も低い価格となっている(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。

コメ・インド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ(小麦)の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位:百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	124.4	129.7	130.5 (129.5)	0.5	0.6	
消 費 量	101.1	107.0	107.5 (108.0)	0.5	0.5	
輸 出 量	20.2	21.0	22.0 (19.3)	-	4.8	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	37.0	38.7	39.7 (39.9)	▲ 2.8	2.6	
期末在庫率	30.5%	30.2%	30.7% (31.3%)	▲ 2.3	0.4	

(参考)

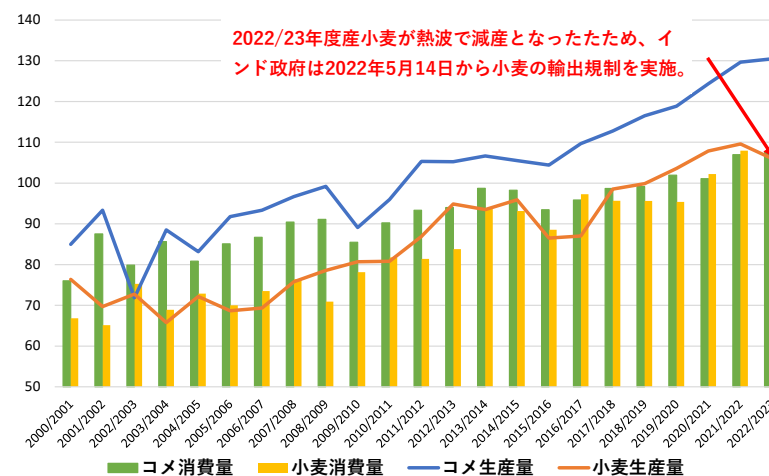
収穫面積(百万ha)	45.77	47.00	47.00 (46.00)	-	-
単収(もみt/ha)	4.08	4.14	4.17 (2.82)	0.02	0.7

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(10 June 2022)

IGC「Grain Market Report」(19 May 2022) (単収は精米t/ha)

(百万トン) 図: コメ・小麦の消費量・生産量の推移



資料: USDA「PS&D」(2022.6.10)をもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 世界の期末在庫量のうち、中国の割合は6割弱

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度をわずかに上回って149.0百万トンと、史上最高の見込み。

中国中央气象台（2022.6.3）によれば、5月末現在、一期作米の大部分は生育期が平年並みまたはやや早くなっており、作柄は良好である。また、二期作早期米の大部分は、生育期が平年並みから3～7日早く、作柄は良好。浙江、湖北地区は分げつ期に入っており、福建、江西地区は分げつから節間伸長期、湖南地区は活着から節間伸長期、安徽地区は節間伸長期、広東、広西地区は節間伸長から穂ばらみ期、海南地区は穂ばらみ期に入っている。

なお、USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」（2022.6.14）によると、6月5日～11日にかけて、中国南部の一部地域で豪雨による洪水があり、二期作早期米の生育に影響が懸念されているが、必要な土壌水分量は供給されているとみられる。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比0.5%増の156.6百万トンと、史上最高の見込み。とうもろこしなど飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインドやパキスタン等から輸入している。

2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、こうした飼料用碎米の輸入が継続する見込みから、前年度から0.4百万トン増加して、6.0百万トンと史上最高の見込み。

中国海関統計によれば、2022年1～4月の輸入量は、対前年同期の1.9百万トンから約18%増の2.2百万トンであった。輸入先はパキスタンが0.6百万トン、インドが0.7百万トン。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量と輸入を上回る消費の増加により、前年度末から4.0百万トン減少して、109.0百万トンとなる見込み。なお、世界の期末在庫量のうち、中国が6割弱を占める見通し。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位：百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	148.3	149.0	149.0	(149.8)	-	0.0
消 費 量	150.3	155.8	156.6	(153.9)	-	0.5
輸 出 量	2.2	2.3	2.4	(2.4)	-	6.7
輸 入 量	4.2	5.6	6.0	(5.0)	-	7.1
期末在庫量	116.5	113.0	109.0	(106.3)	-	▲ 3.5
期末在庫率	76.4%	71.5%	68.6%	(68.0%)	-	▲ 2.9

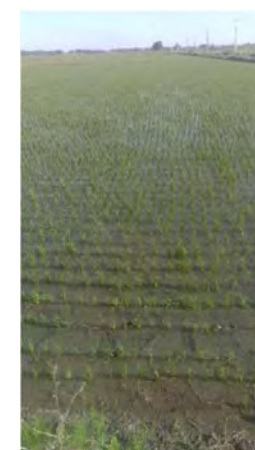
(参考)

収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	30.00	(30.03)	-	0.3
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.10	(4.99)	-	▲ 0.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)
IGC「Grain Market Report」(19 May 2022) (単収は精米t/ha)

写真：黒竜江省の水稲風景

(5月17日(移植作業)、6月8日現在)



< タイ > パーツ安や低価格他国産米への需要シフトで輸出価格は下落傾向

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 0.8%増の 19.8 百万トンの見込み。

2021/22 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 4.2%増の 19.7 百万トンの見込み。

なお、タイ農業経済局によれば、収穫面積が拡大した理由は、前年 5 月から 8 月の降雨量が多く、栽培に十分な水分が確保され、作付面積を拡大したためとみられる。また政府は、2021/22 年度稲作価格保証プログラム等で継続的に生産者を援助している。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2022.6.14)によると、ここ 1 か月間の降水量は例年以上となったものの、6 月 5 日～11 日にかけて、タイの大部分で降水量が 25mm 以下と記録的に少なくなり、それ以上の降水量があった地域は限定的であった。現地調査会社によれば、今後降雨不足が継続すると、地域によっては生育が影響を受ける可能性も指摘されている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、対前年度比 7.1%増の 7.5 百万トンの見込み。インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 7.1%増の 7.0 百万トンとなる見込み。

USDA「Rice Outlook」(2022.6.14)によれば、6 月 7 日までの週のタイ産米（長粒、2 等精米）の輸出価格は、5 月 10 日までの週の価格から 2 ドル下落し、456 ドル/トンとなっている（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

IGC「Grain Market Indicators」(2022.6.14)によると、パーツ安やより価格の低い輸出国のコメへのシフトなどから、価格は下落傾向にある。

コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

(単位：百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1 月～23年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	18.9	19.7	19.8 (20.0)	-	0.8
消 費 量	12.7	13.0	13.1 (12.1)	-	0.8
輸 出 量	6.1	7.0	7.5 (7.9)	-	7.1
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	-
期末在庫量	4.3	4.1	3.5 (6.9)	-	▲ 14.5
期末在庫率	22.8%	20.7%	17.1% (34.7%)	-	▲ 3.5

(参考)

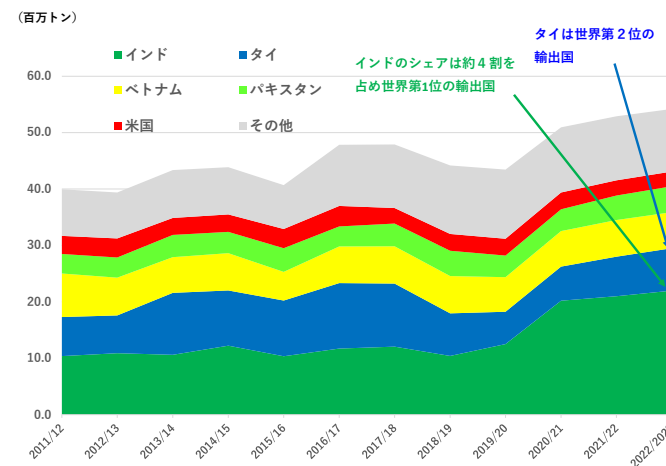
収穫面積(百万ha)	10.51	10.59	10.70 (10.50)	-	1.0
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.80 (1.90)	-	▲ 0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(10 June 2022)

IGC「Grain Market Report」(19 May 2022) (単収は精米t/ha)

図：世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.6)をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > 2021/22 年度の夏秋作の作付けが開始。進捗率は約 4 割。

【生育・生産動向】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が 6.01 トン/ヘクタールと過去最高になることから、対前年度比 0.3%増の 27.4 百万トンの見込み。

2021/22 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収・収穫面積ともわずかに減少していることから、対前年度比 0.4%減の 27.3 百万トンの見込み。

ベトナム農業・農村開発省によれば、夏秋作の作付けが開始され、6 月 10 日時点の作付面積は 1.15 百万ヘクタールの見込み。対前年度実績（2.67 百万ヘクタール）比で約 4 割進捗している。

【貿易情報・その他】USDA および IGC 「Grain Market Indicators」 (2022.6.17) によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 1.5%減の 6.4 百万トンの見込み。

2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 3.2%増の 6.5 百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2022 年 1～4 月の輸出量は 2.1 百万トンであり、上位からフィリピン（0.9 百万トン）、中国（0.3 百万トン）、コートジボワール（0.2 百万トン）となっている。うちジャポニカ米は 0.06 百万トン。

USDA 「Rice Outlook」 (2022.6.14) によれば、冬春作のベトナム産米（長粒種、5% 碎米混入）の 6 月 7 日までの週の価格は、前月から 5 ドル/トン上昇して 425 ドル/トンと、前年 11 月以来の高値となった。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

(単位：百万精米トン)

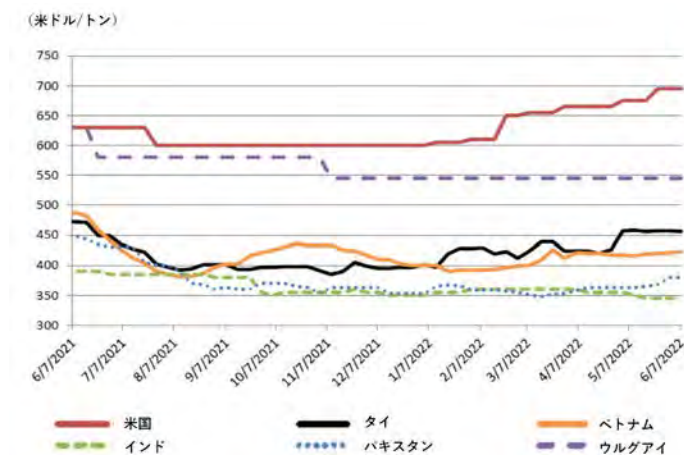
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1 月～23年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	27.4	27.3	27.4 (28.9)	-	0.3
消 費 量	21.5	21.5	21.6 (23.6)	-	0.2
輸 出 量	6.3	6.5	6.4 (6.5)	-	▲ 1.5
輸 入 量	1.8	0.8	0.6 (1.0)	-	▲ 25.0
期末在庫量	2.6	2.8	2.8 (3.0)	-	1.8
期末在庫率	9.5%	9.9%	10.1% (10.0%)	-	0.2

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.31	7.30	7.29 (7.28)	-	▲ 0.1
単収(もみt/ha)	6.00	5.99	6.01 (3.98)	-	0.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (10 June 2022)
IGC 「Grain Market Report」 (19 May 2022) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain : World Markets and Trade」 (2022.6.10)

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

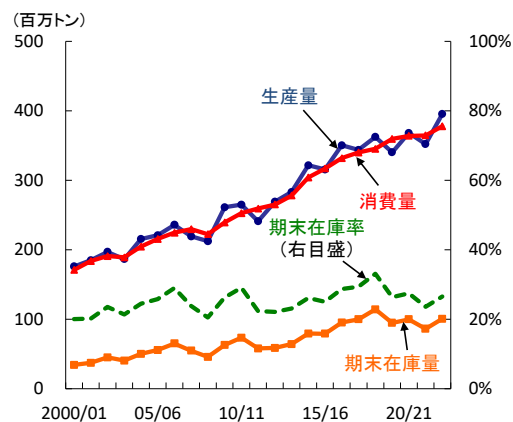
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ブラジル等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ウクライナで上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」（2022.6.10）をもとに農林水産省で作成

◎ 世界の大豆需給

（単位：百万トン）

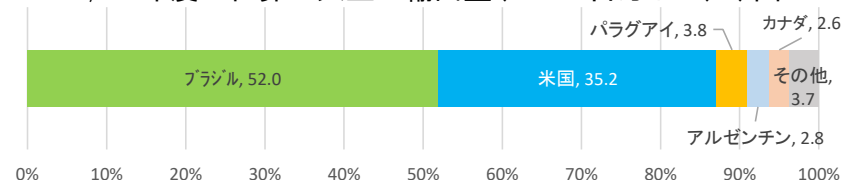
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	368.1	352.0	395.4	0.7	12.3
消 費 量	363.9	364.7	377.9	0.4	3.6
うち搾油用	315.1	315.4	327.2	0.4	3.7
輸 出 量	164.5	155.9	170.3	0.3	9.2
輸 入 量	165.5	154.8	167.1	-	8.0
期末在庫量	99.9	86.2	100.5	0.9	16.6
期末在庫率	27.5%	23.6%	26.6%	0.2	3.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（10 June 2022）

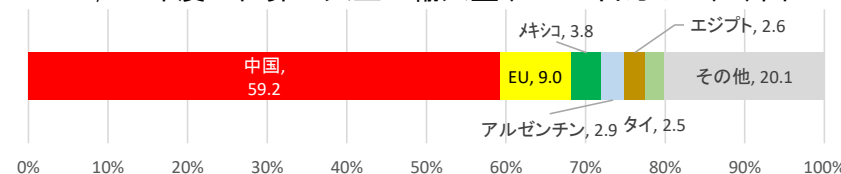
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量(395.4 百万トン)（単位：％）



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出量(170.3 百万トン)（単位：％）



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量(167.1 百万トン)（単位：％）



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 生産量は史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、肥料価格高騰による作付けのとうもろこしからのシフトを背景に収穫面積の増加から、前年度より 4.6%増の 126.3 百万トンと史上最高の見込み。

5 月上旬までの中西部の低温で雨がちな天候により遅れていた作付けは 5 月中旬以降の天候改善で急速に進展した。USDA「Crop Progress」(2022.6.21)によれば、主要 18 州における作付け進捗率は 94%と、前年度同期 (97%) より遅れているものの、過去 5 年平均 (93%) より進んでいる。発芽率は 83%と、前年度同期 (90%) 及び過去 5 年平均 (84%) より遅れている。作柄評価は良からやや良が 68%と前年度同期 (60%) を上回っている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な搾油用需要から、前年度より 2.1%増の 64.8 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 1.4%増の 59.9 百万トンの見込み。なお、2021/22 年度の実輸出量は、最近の堅調な輸出実績とブラジルの輸出見通しの下方修正に伴い、前月予測から 0.8 百万トン上方修正され、59.1 百万トンの見込み。

USDA によれば、2022 年輸出検証高 (2022 年 1 月 6 日～6 月 2 日) は、19.0 百万トンであり、内訳は中国 (8.5 百万トン)、メキシコ (2.1 百万トン)、エジプト (2.0 百万トン)、インドネシア (1.0 百万トン)、日本 (0.9 百万トン) の順。

USDA によれば、2022/23 年度の実在庫量は、前年度の実輸出量の上方修正に伴い、前月予測から 0.8 百万トン下方修正され、前年度より 36.4%増の 7.6 百万トンの見込み。なお、実在庫率は 6.1%で、前年度を上回るものの、依然として低水準の見込み。

大豆－米国

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率 (%)
生 産 量	114.8	120.7	126.3	－	4.6
消 費 量	61.1	63.5	64.8	－	2.1
うち搾油用	58.3	60.3	61.4	－	1.8
輸 出 量	61.5	59.1	59.9	－	1.4
輸 入 量	0.5	0.4	0.4	－	－
期末在庫量	7.0	5.6	7.6	▲ 0.8	36.4
期末在庫率	5.7%	4.6%	6.1%	▲ 0.7	1.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.43	34.94	36.46	－	4.4
単収(t/ha)	3.43	3.45	3.46	－	0.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格 (FOB) の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

< ブラジル > 2021/22 年度の収穫終了、高温・乾燥で減産見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 10 月以降に作付けが開始される 2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加から、前年度より 18.3%増の 149.0 百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22 年度の実産量は、マツト・グロッソ州の収穫面積の上方修正に伴い、前月予測から 1.0 百万トン上方修正されたものの、2020/21 年度より 9.7%減の 126.0 百万トンの見込み。収穫作業は、主産地で終了している。

また、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告 (2022.6.8) によれば、2021/22 年度の実産量は、南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受け、前年度より 10.1%減の 124.3 百万トンの見込み。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、旺盛な搾油用需要により前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度より 1.2%増の 52.4 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 7.6%増の 88.5 百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22 年度の輸出量は、輸出ペースの減速により前月予測から 0.5 百万トン下方修正されたものの、2020/21 年度より 0.7%増の 82.3 百万トンの見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022 年 1～4 月の輸出量は 30.4 百万トンで、前年同期 (31.5 百万トン) に比べ 3.5%減となっている。内訳は、1 位が中国 22.3 百万トン、2 位がスペイン 1.6 百万トン、3 位がタイ 0.9 百万トンとなっている。なお、4 月の輸出量は 11.5 百万トンで前年同月 (16.1 百万トン) と比べ、28.8%減となっている。例年より収穫の遅れが目立った前年と異なり、本年は年初から輸出が順調であったため、4 月の輸出量は前年より低い数量となった。

大豆ーブラジル

(単位: 百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	139.5	126.0	149.0 (142.0)	-	18.3	
消 費 量	49.9	51.8	52.4 (49.1)	0.3	1.2	
うち搾油用	46.7	48.5	49.0 (46.3)	0.3	1.0	
輸 出 量	81.7	82.3	88.5 (88.4)	-	7.6	
輸 入 量	1.0	0.5	0.8 (0.2)	-	66.7	
期末在庫量	29.4	21.9	30.8 (8.5)	0.3	40.7	
期末在庫率	22.4%	16.3%	21.8% (6.2%)	0.1	5.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	39.20	41.00	42.00 (41.40)	-	2.4	
単収(t/ha)	3.56	3.07	3.55 (3.43)	-	15.6	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)
IGC 「Grain Market Report」(19 May 2022)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2021/22年度	2021年												2022年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし																					
冬とうもろこし																					
大豆																					

資料: CONAB穀物レポート (2022. 6. 8)

< アルゼンチン > 2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDAによれば、本年11月以降作付けが開始される2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加から、高温・乾燥の影響を受けた前年度より17.5%増の51.0百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22年度の実産量は、収穫終盤での単収の上方修正により前月予測から1.4百万トン上方修正されたものの、生育期の高温・乾燥の影響で、2020/21年度より6.1%減の43.4百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.6.16）によれば、2021/22年度の収穫進捗率は99%で、過去5年平均（99%）と並び、収穫終盤となっている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、前月予測からわずかに下方修正されたものの、生産量の増加に伴い、前年度より1.7%増の48.3百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より70.9%増の4.7百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022年1～4月の輸出量は2.0万トンで、前年同期（47.9万トン）より95.8%減。内訳は、1位がチリ1.7万トンとなっている。現地情報によると、5月以降徐々に輸出は持ち直してくるとみられている。

アルゼンチンは、丸大豆より搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第1位の輸出国である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021年1月以降、輸出税を大豆最大33%、大豆油及び大豆粕31%に設定。さらに、2022年3月19日付けアルゼンチン農牧漁業省プレスによれば、大豆油及び大豆粕の輸出税について2022年末まで2%引き上げ、大豆と横並びの33%に変更した。

大豆ーアルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	46.2	43.4	51.0 (48.0)	-	17.5	
消費量	47.4	47.5	48.3 (47.5)	▲ 0.0	1.7	
うち搾油用	40.2	40.3	41.0 (41.5)	-	1.9	
輸 出 量	5.2	2.8	4.7 (4.1)	-	70.9	
輸 入 量	4.8	2.4	4.8 (4.6)	-	100.0	
期末在庫量	25.1	20.7	23.5 (3.4)	1.4	13.8	
期末在庫率	47.6%	41.1%	44.4% (6.6%)	2.7	3.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	16.00	17.00 (16.65)	-	6.3	
単収(t/ha)	2.81	2.71	3.00 (2.88)	-	10.7	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(10 June 2022)

IGC「Grain Market Report」(19 May 2022)

写真：北部サンタフェ州の大豆の保管風景 (6月1日撮影)



< 中国 > 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、政府の補助金による大豆奨励策から主に収穫面積の増加により、前年度より6.7%増の17.5百万トンの見込み。

中国中央气象台週報（2022.6.6）によれば、5月の主産地の天候はおおむね良好で、6月上旬現在、黒竜江省等東北地区は出苗期から三葉期に入っている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、国内大豆粕需要の回復による搾油用消費量の増加から、前年度より6.3%増の115.6百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、搾油用消費量の増加に伴い、前年度より7.6%増の99.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～4月の輸入量は28.4百万トンと、前年同期比で0.9%減。内訳は、米国産15.0百万トン（53%）、ブラジル産12.7百万トン（45%）。前年同期は米国産の輸入が74%を占めていたが、2022年はブラジルの収穫が主産地で例年より早く終了したこともあり、ブラジル産の輸入シェアが高まっている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年4月号」によると、4月は、新型コロナウイルス感染対策下で、大豆販売業者は仕入れに慎重であった一方、政府備蓄倉庫の買付は依然として継続しており、4月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（6,500元/トン）から横ばいの6,500元/トンで、依然として高水準で推移している。4月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、これまでの乾燥天候で南米産大豆の減産が確実になった一方、米国の新穀大豆の作付面積が市場予想を上回ったことから、5,240元/トンと前月（5,320元/トン）から下落した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

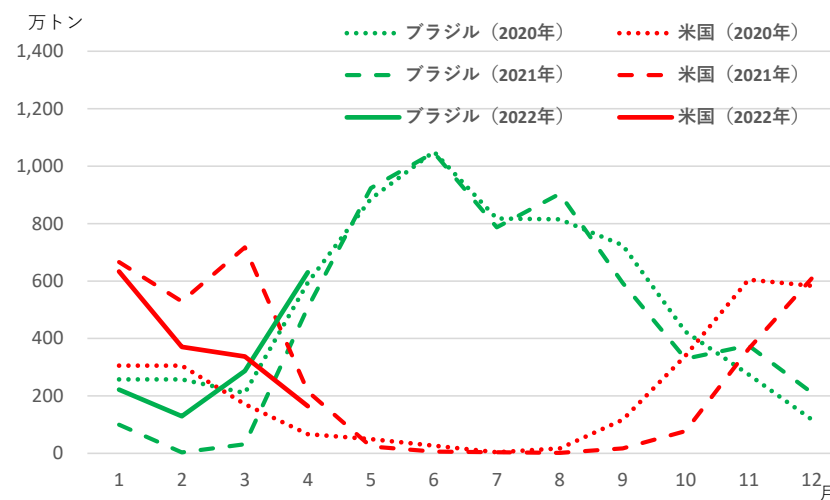
大豆－中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.6	16.4	17.5	(19.5)	-	6.7
消 費 量	112.7	108.7	115.6	(116.2)	-	6.3
うち搾油用	93.0	89.0	95.0	(97.5)	-	6.7
輸 出 量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	-	-
輸 入 量	99.8	92.0	99.0	(98.5)	-	7.6
期末在庫量	31.2	30.7	31.6	(30.5)	-	2.7
期末在庫率	27.6%	28.2%	27.3%	(26.2%)	-	▲ 1.0
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.88	8.40	8.90	(9.90)	-	6.0
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.97	(1.97)	-	1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 June 2022)
IGC「Grain Market Report」(19 May 2022)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積の増加により増産、輸出量も増加見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収は減少するものの、収穫面積の増加から、前年度より0.4%増の6.3百万トンの見込み。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2022.6.14)によれば、主産地のカナダ南東部では、降雨があった。特に、オンタリオ州では降雨過多で作付け遅れも発生している。また、マニトバ州など平原3州でも、降雨があった。

なお、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.6.20)によれば、2022/23年度の生産量は、作付意向面積の増加と過去5年平均単収を前提とすれば、前年度より2.0%増の6.4百万トンの見込み。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より3.2%減の2.4百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より6.0%増の4.5百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2021/22年度(2021年8月～2022年7月)のうち、2021年8月～2022年4月の輸出量は262.7万トンで、国別では、イラン(47.1万トン)、イタリア(37.2万トン)、オランダ(22.6万トン)、アルジェリア(21.9万トン)、中国(21.2万トン)の順。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.4	6.3	6.3 (6.4)	－	0.4
消 費 量	2.7	2.4	2.4 (2.4)	－	▲ 3.2
うち搾油用	1.6	1.9	1.8 (1.9)	－	▲ 5.4
輸 出 量	4.5	4.2	4.5 (4.5)	－	6.0
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	－	▲ 2.0
期末在庫量	0.3	0.4	0.4 (0.4)	▲ 0.1	▲ 4.7
期末在庫率	4.1%	6.4%	6.0% (5.1%)	▲ 1.5	▲ 0.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.04	2.13	2.20 (2.17)	－	3.3
単収(t/ha)	3.12	2.94	2.86 (2.96)	－	▲ 2.7

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(10 June 2022)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(20 June 2022)

写真：カナダ平原部マニトバ州の大豆の生育風景 (6月11日撮影)



(参考)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。

例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。

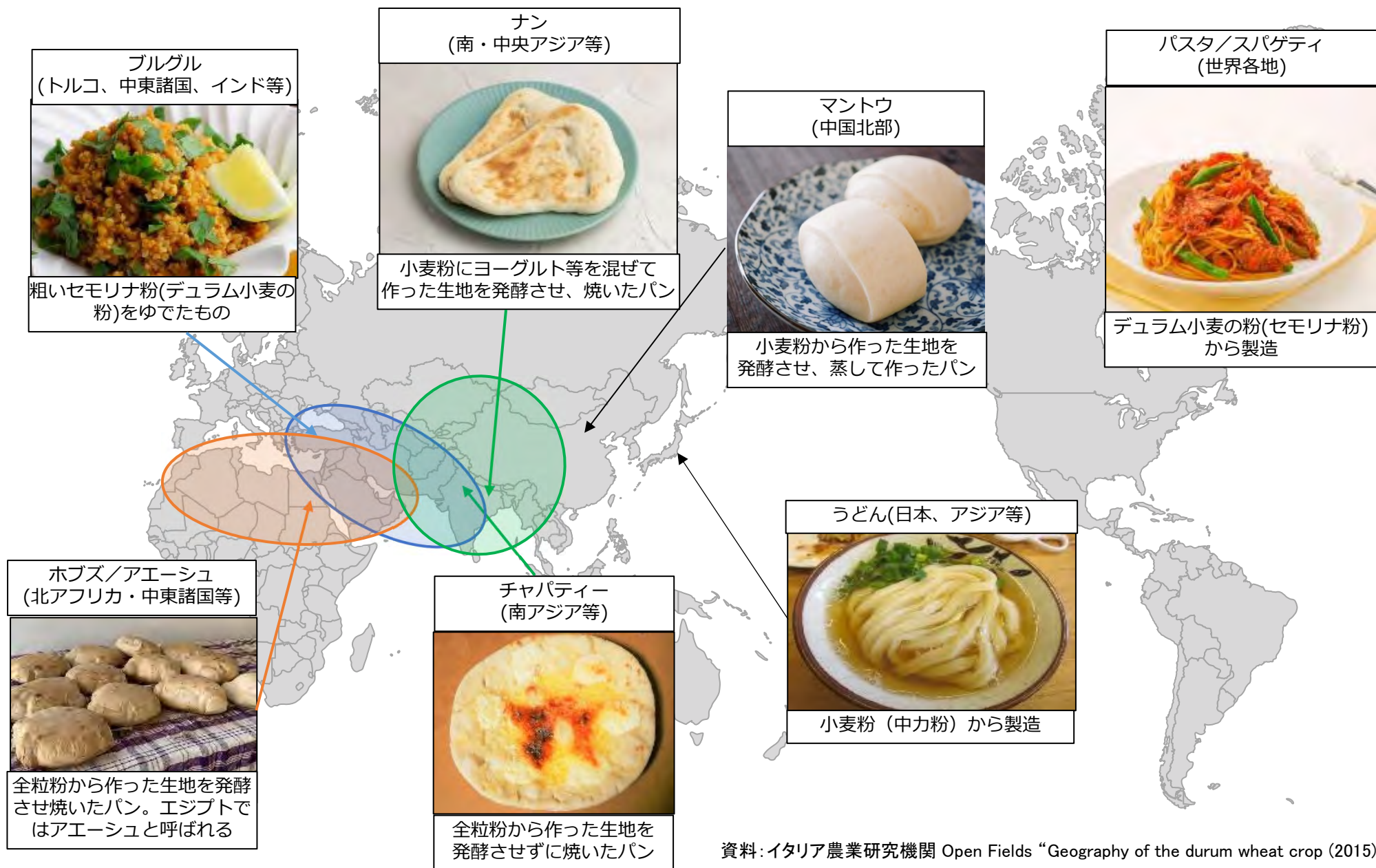
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

第12号特別分析トピック1：インド、トルコ、エジプトの小麦政策

世界で消費される小麦製品・料理

○ 小麦・小麦粉は世界中で多種多様な形に加工され、消費されている。



資料: イタリア農業研究機関 Open Fields “Geography of the durum wheat crop (2015)”

インドの農林水産概況

- 人口は、中国に次いで世界で2番目に多い13億5,264万人（2018年）。
- 国土面積は日本の約9倍、農用地面積は約40倍。農用地面積は国土の約半数を占めており、そのうち約6割で穀物を生産している。
- 主要農産物はコメ、小麦、とうもろこし、ばれいしょ、バナナ、マンゴー、牛乳(水牛・牛)等。特に主食穀物であるコメと小麦の生産を重視しており、コメは穀物生産量の約40%、小麦は約35%を占める。



・主要農産物の生産状況

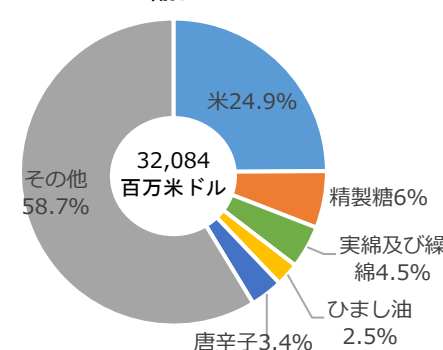
(単位：万トン)

	2016	2017	2018	2019	2020
コメ（粳）	16,370	16,850	17,472	17,765	17,831
小麦	9,229	9,851	9,987	10,360	10,759
とうもろこし	2,590	2,590	2,875	2,772	3,016
じゃがいも	4,342	4,861	5,131	5,019	5,130
バナナ	2,914	3,048	3,081	3,046	3,150
マンゴー・マンゴスチン・グアバ	1,864	2,333	2,497	2,563	2,475
りんご	252	227	233	232	273
綿実及び繰綿	1,731	1,743	1,466	1,856	1,773
茶	125	133	134	139	142
生乳（水牛）	8,127	8,626	9,182	9,200	9,003
生乳（牛）	7,810	8,363	8,983	9,000	8,782

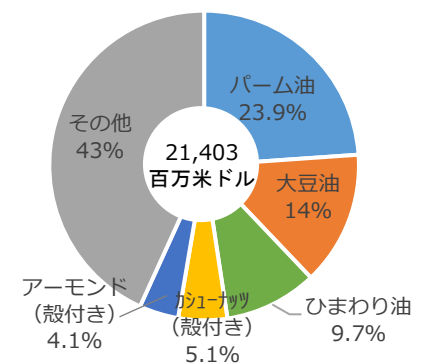
資料：FAO統計

農林水産物貿易の概況(2020年)

<輸出>

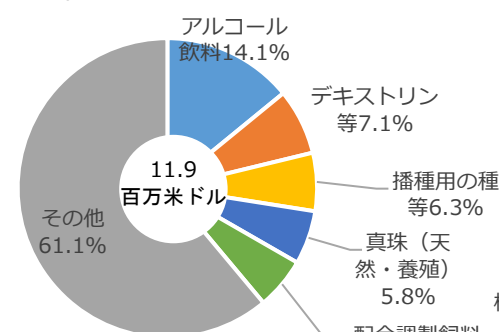


<輸入>

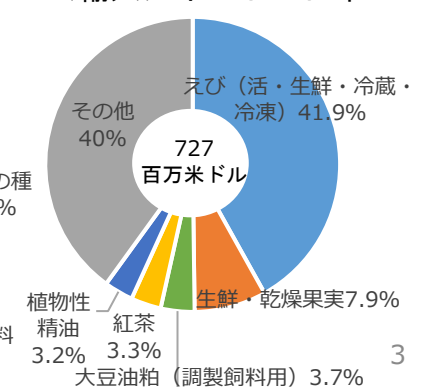


我が国との農林水産物貿易(2020年)

<輸出>日本→インド



<輸入>インド→日本



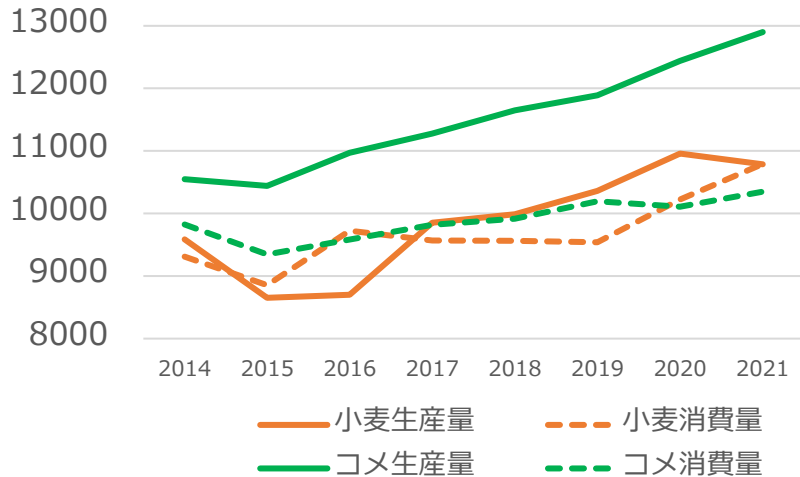
インドの小麦・コメの生産地域及び自給状況

- 小麦は主にインド北西部地方で生産されている一方、コメの生産地は東部から南部にかけて逆「く」の字を書くように位置している。
- 小麦の播種は10～12月、収穫は3～6月。一方でコメには雨季に育つカリフ米と乾季に育つラビ米があり、カリフ米の播種はおおよそ6～8月、収穫は10～1月、ラビ米の播種は12～1月、収穫は8～9月。主に北部ではカリフ米と小麦の二毛作が、南部ではカリフ米とラビ米の二期作が行われている。
- インドでは、1940年代や1960年代などに飢饉が起こり多くの犠牲者が出ていたが、主食穀物の生産に力を入れた結果、近年は小麦生産量が消費量を上回り、基本的に自給は達成できている。

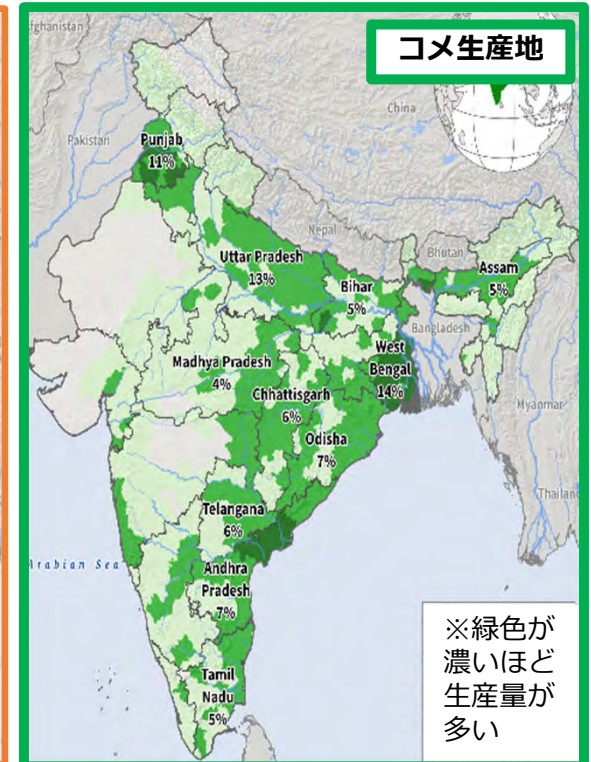
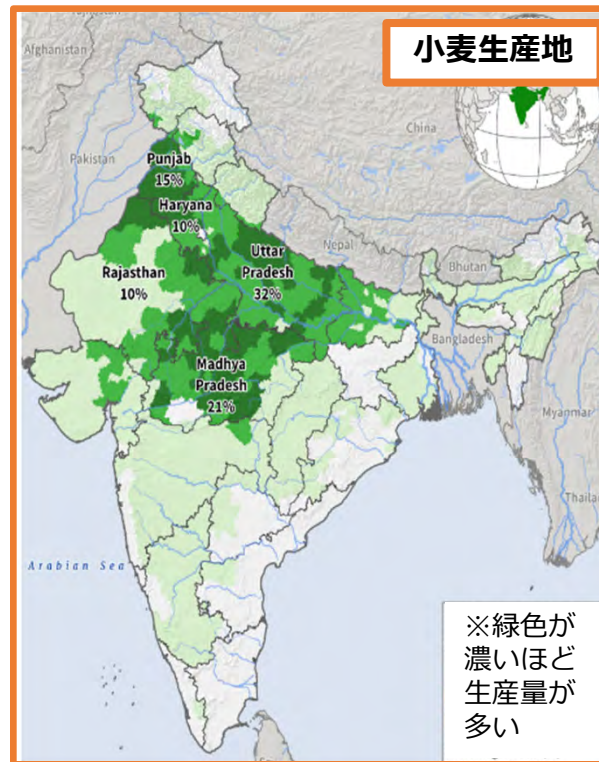
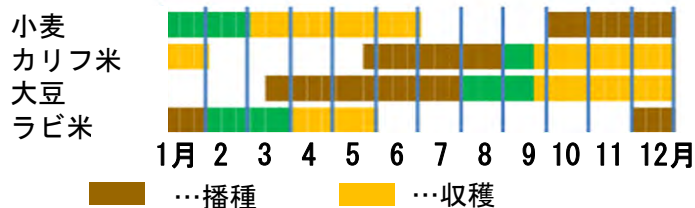
インドの小麦及びコメの生産量と消費量の変化

(単位：万トン)

出典：米国農務省(USDA)



クロープカレンダー 出典：FAO



出典：米国農務省(USDA) 穀物生産地図(Crop Production Maps)

インドの国内小麦政策（政府買入制度と公的分配制度）

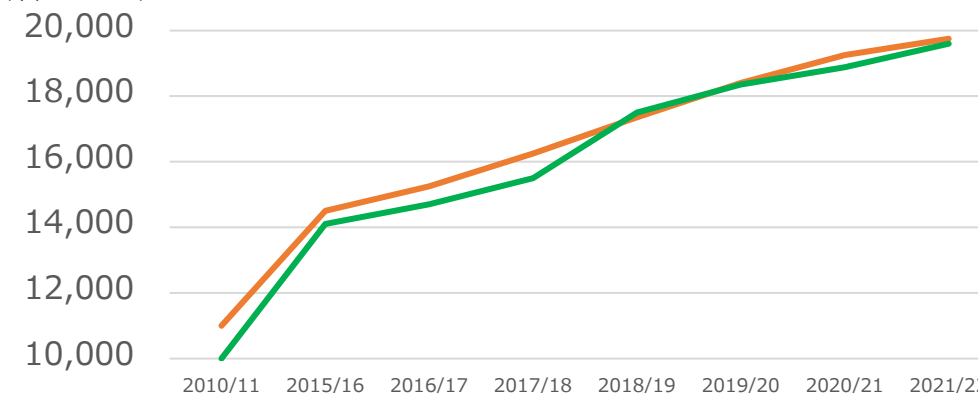
最低支持価格（MSP：Minimum Support Price）に基づく政府買入制度

- インド政府は、農家の収入安定（セーフティネット）のため、小麦、コメ、大豆、サトウキビ、綿花など23種の農産物を対象に、最低支持価格（MSP）に基づく政府買入を行っている。
- 実際の買い付けは、インド食料公社（FCI：Food Corporation of India）と州政府が共同で実施。原則、買上量の上限は設定されておらず、政府は生産者の希望に応じて買上を行っている。
- MSPは政治論争の的になることも多く、価格決定は与野党にとって非常に重要。実際に、2014年に政権の座に就いたモディ首相は、小麦とコメのMSPを就任以来毎年引き上げている。

公的分配制度（PDS：Public Distribution System）

- 1960年代、干ばつによって食料危機が発生したことをきっかけにインド政府が導入した制度。
- 最低支持価格（MSP）で買い入れた小麦やコメ等の穀物を、政府が低所得層向けに低価格（逆ざや）で販売することで、低所得層に対する食料支援を行うもの。2013年に食料安全保障法が制定されたことで、法的根拠を持つ制度となった。

（単位：ルピー）（参考） 1トン当たりの小麦及びコメのMSPの推移



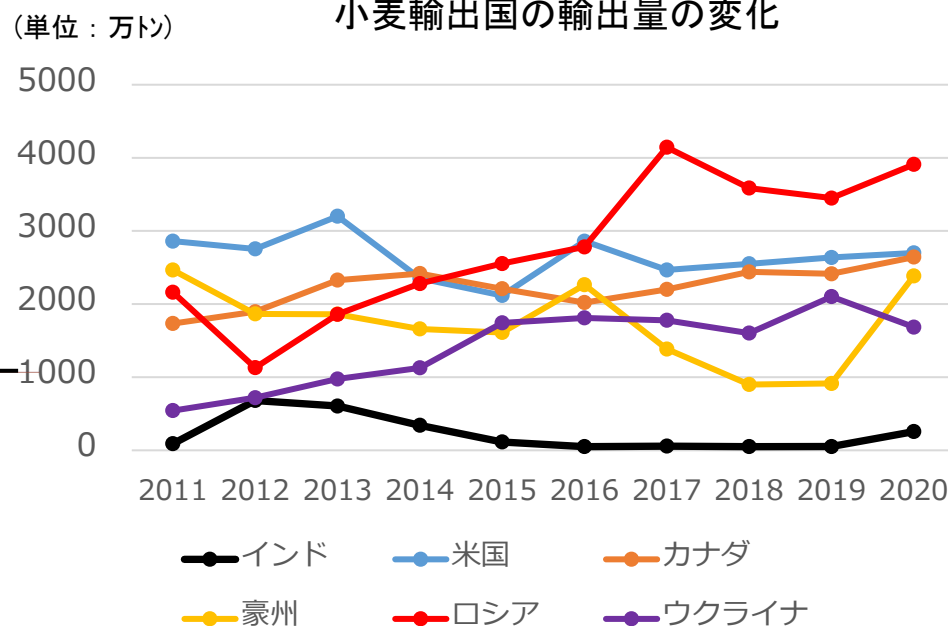
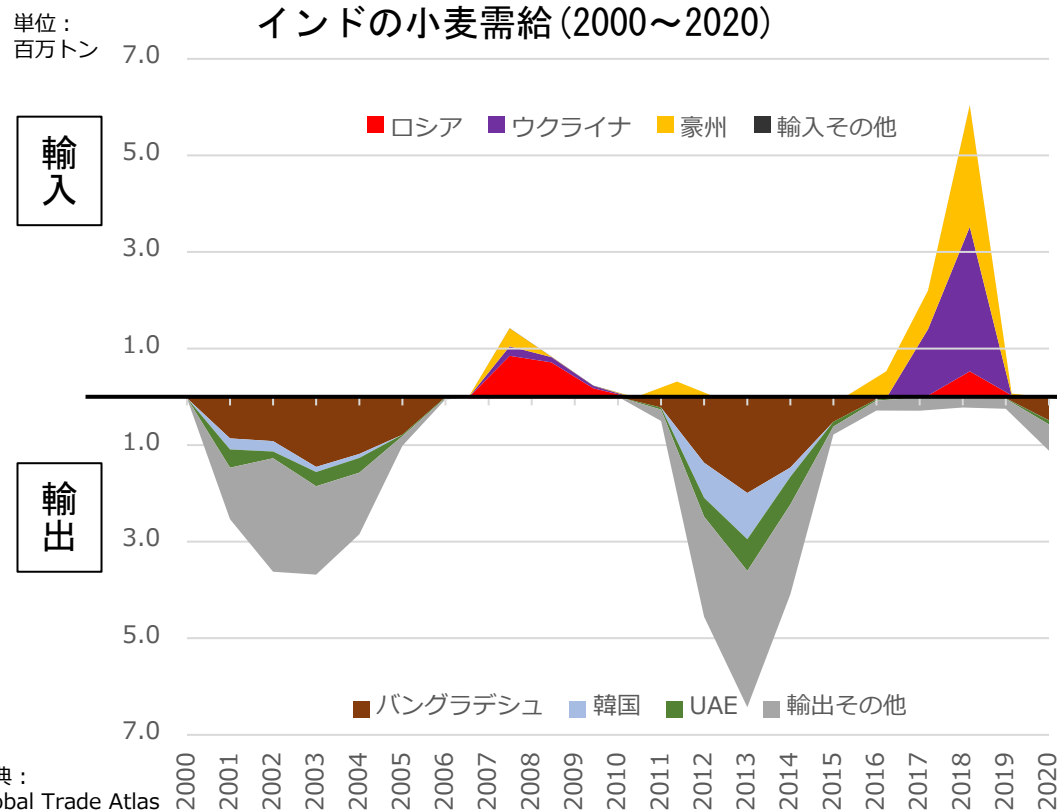
19,750ルピー（小麦）

19,600ルピー（コメ）

※ 1ルピー：約1.7円
（2022年6月現在）

インドの小麦貿易と対外政策

- インドは基本的に小麦を自給できているが、不足時には輸入し、余剰が生じた際には輸出している。
- 2011年、インド政府は小麦の輸出禁止措置を解除し輸出を再開。しかし輸出量を比較すると北米やロシア・ウクライナ等の輸出量には及ばず、輸出先も近隣のアジア諸国が中心となっている。これは、インド農業の競争力が向上したわけではなく、最低支持価格（MSP）の引き上げに伴って公的分配制度（PDS）の在庫が積み上がり、捌ききれない分が国際市場に流出しただけとする見方もある。
- また、世界的に小麦の需給のひっ迫が続く中、2022年5月14日からインドは小麦の輸出規制を実施。なお、輸入国の食料安全保障に支障がある場合は、協議の上、輸出が許可される場合もある。



出典：米国農務省（USDA） PSDオンライン

トルコの農林水産概況

- 人口は 約8,361万人(2020年)。三方を海に囲まれている一方で、内陸部に標高3,000mを超える山々があるため、地域による気候差が大きく、多種多様な農業形態を有している。
- 主要農産物は、小麦、てん菜、トマト、大麦、とうもろこし、ぶどう、さくらんぼ、ヘーゼルナッツ等。特にヘーゼルナッツは生産量で世界の58%、輸出量では57%を占める（2018年）。
- トルコから日本への輸入額は2億7,186万米ドル（2019年）となっており、かつお・まぐろ類等の魚介類の他、スパゲティといった小麦粉製品も多い。



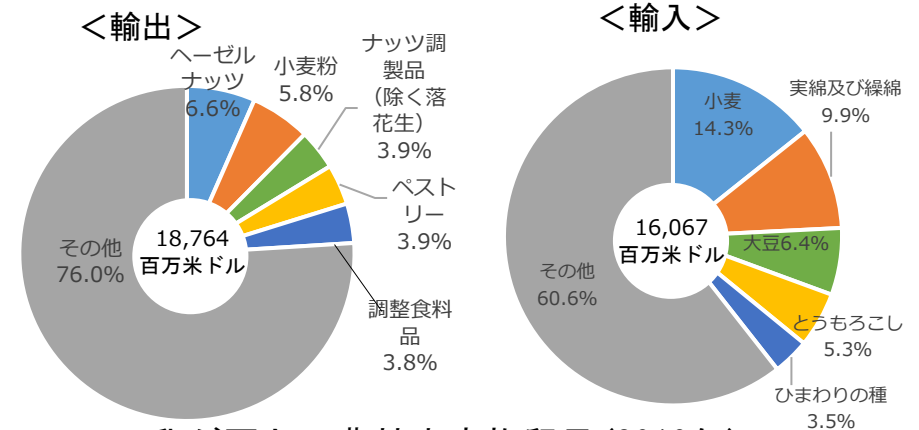
・主要農産物の生産状況

(単位：万トン)

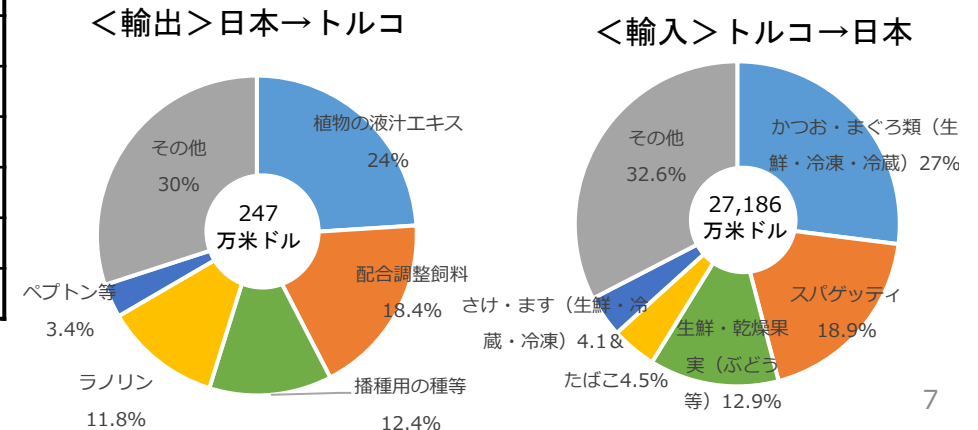
	2015	2016	2017	2018	2019
小麦	2,260	2,060	2,150	2,000	1,900
てん菜	1,646	1,959	2,115	1,744	1,809
トマト	1,262	1,260	1,275	1,215	1,284
大麦	800	670	710	700	760
とうもろこし	640	640	590	570	600
ぶどう	365	400	420	393	410
さくらんぼ	54	60	63	64	66
ヘーゼルナッツ	65	42	68	52	78
牛乳	1,693	1,679	1,876	2,004	2,078
鶏肉	191	188	214	216	214
鶏卵	105	113	121	123	124

資料：FAO統計

農林水産物貿易の概況(2019年)

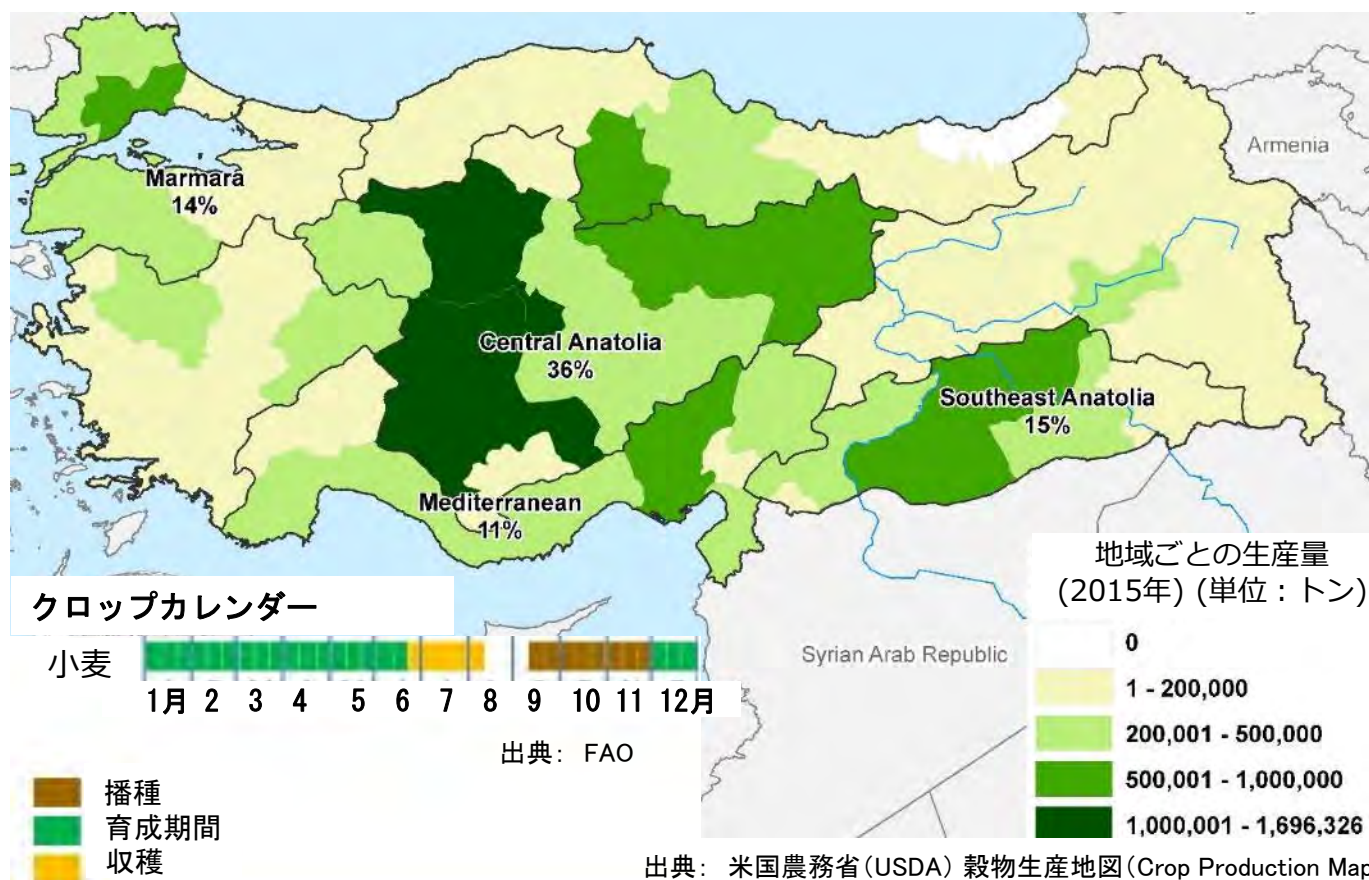


我が国との農林水産物貿易(2019年)



トルコの小麦生産地域

- トルコは世界有数の小麦生産国（2021/2022年度生産量は1600万トン）。中央アナトリア、南東部アナトリア、地中海沿岸地域等で主に生産されている。播種は9月中旬～11月末、収穫は6月下旬～8月上旬。
- トルコは小麦の自給をほぼ達成している一方で、諸外国から年間数百万トン以上の小麦を輸入している。それら輸入小麦を加工し小麦粉や小麦粉製品とした上で、近隣国に輸出する政策を行っている。



トルコの小麦自給率

年度	小麦自給率
2018/2019	102.3%
2019/2020	89.5%
2020/2021	100.5%

出典: トルコ統計局

トルコの国内小麦政策

- トルコは国内において以下の小麦政策を実施している。また、これらの他、国境措置や市場介入も行っている。

生産者に対する直接支援（プレミアム）

- 2005年に政府が導入した補助金制度（通称「プレミアム」）。国内生産が不足していると考えられている品目・分野（油糧種子、オリーブ、綿花、穀物、茶等）が対象。
- 小麦に対するプレミアムの補助額は以下のとおりであり、毎年農家が作付けを決める頃に発表されるため、農家の作物選択の指標の一つとなっている。

年	2015	2016	2017	2018	2019	2020
小麦補助額 (1トン当たり)	50トルコリラ (TL)	50TL	50TL	50TL	100TL	100TL

※1TL＝約8円（2022年6月現在）
（ただしTLは変動が激しく、2015年は約45円、2017年は約30円、2019年は約19円と急落している）

パンへの補助金

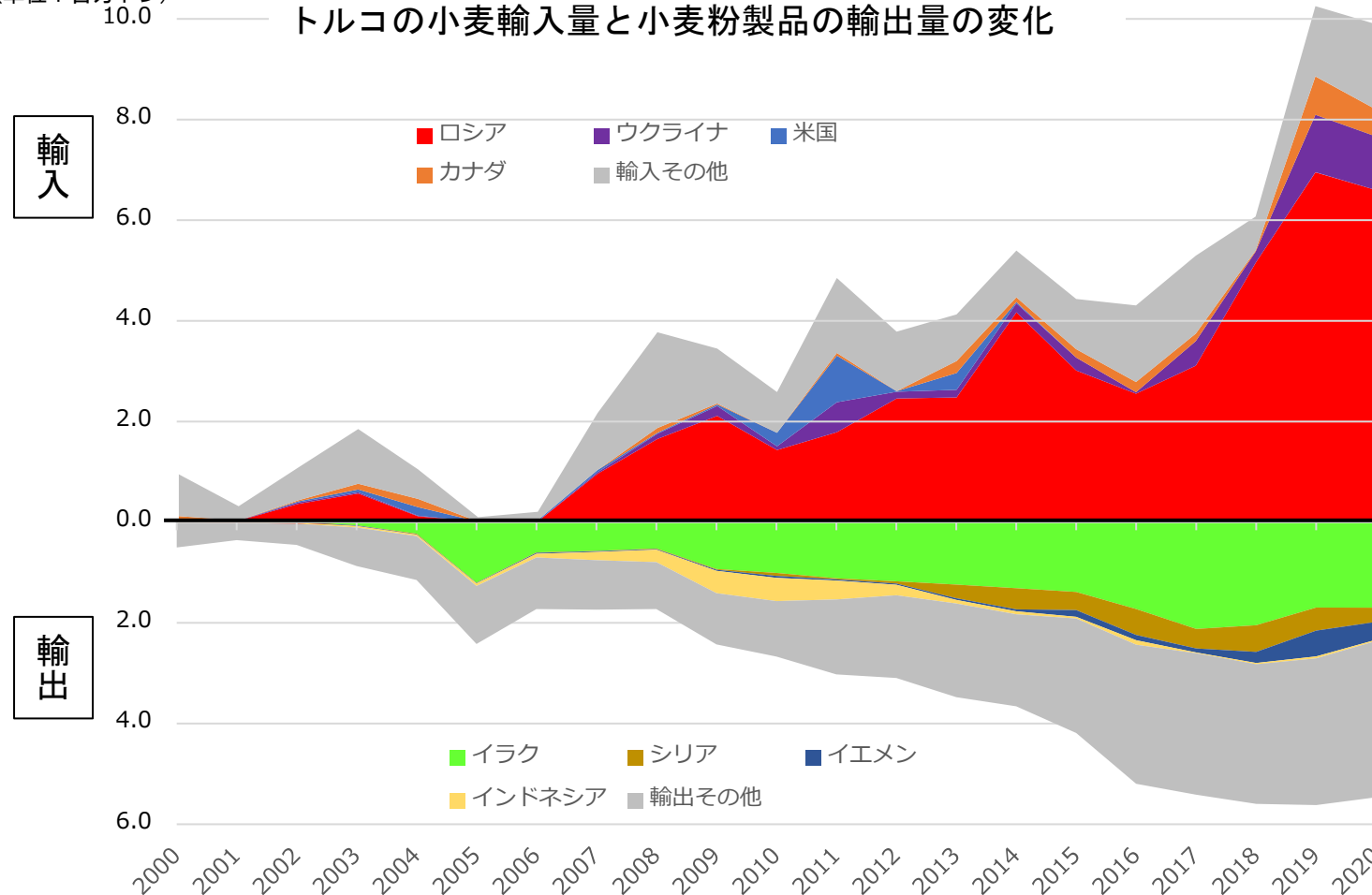
- トルコ政府は、各地方で営業する公営ベーカリーにおいて、特定のパンを安価で販売している。それら補助金が入ったパンの生産量は、全生産量の10%を占めるとされる。また、民間ベーカリーでも同じ種類のパンが販売されているが、その価格を上げる際には政府の許可が必要とされている。
- 例えばイスタンブールの市営ベーカリーでは、1斤（250g）当たり1トルコリラ（TL）で販売されており、市場価格の1斤（200g）2TLの半額以下である。また、アンカラの市営ベーカリーの販売価格は1斤（250g）当たり1.25TLであり、これも1斤（200g）の市場価格1.5TLより安い価格となっている。

トルコの小麦貿易と対外政策

- トルコは、小麦自給率がほぼ100%であるにもかかわらず、ロシアやウクライナ等からタンパク含有率の高い小麦を年間数百万トン規模で輸入し、それらを国産小麦と混ぜて小麦粉の品質を高めて使用している。また、主に国産小麦を小麦粉やベーカリー、菓子類等に製粉・加工した上で中東・アフリカ・アジア諸国等に輸出もしている。したがって、トルコの小麦生産や輸出入の動向は、近隣のアフリカ諸国等の食料安全保障の観点からも重要。
- 近年はコロナの影響等による各国の国境措置や物流コストの増加、輸出関税などに悩まされ、小麦粉や加工品等の輸出量は伸び悩んでいる模様。

(単位：百万トン)

トルコの小麦輸入量と小麦粉製品の輸出量の変化



主な輸出小麦製品と輸出先
(2019/20年)

製品	輸出総量	主な輸出先
小麦粉	約306万トン	イラク (約130万トン) イエメン (約39万トン) シリア (約26万トン)
パスタ	約132万トン	ソマリア (約12万トン) ベネズエラ (約12万トン)
ブルグル	約30万トン	イラク、シリア等

出典：米国農務省 (USDA)

出典：Global Trade Atlas

エジプトの農林水産概況

- 人口は約1億233万人(2020年)。農用地は国土の僅か3.7%で、95%は砂漠地帯。スーダンから流入し、国土を南北に流れるナイル川の沿岸とその河口の三角州地帯の狭い地域に人口・農地が集中。
- 砂漠気候で雨が殆ど降らないため、水資源の殆どをナイル川に依存。1970年に完成したアスワンハイダムによりナイル川の通年利用が可能となり、洪水防止とかんがい用水の安定的供給に大きく貢献したが、人口増加や農地拡大等により水資源が不足しており、限られた水資源の効率的利用のため水利組合の組織化を図っている。
- 野菜や果実の他、小麦、とうもろこし、コメなどの穀物生産もさかん。コメは日本由来の短粒種であるジャポニカ米が普及しており、日常的に食されている。



農林水産物貿易の概況 (2020年)

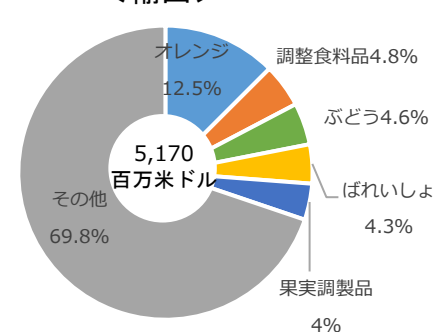
・主要農産物の生産状況

(単位：万トン)

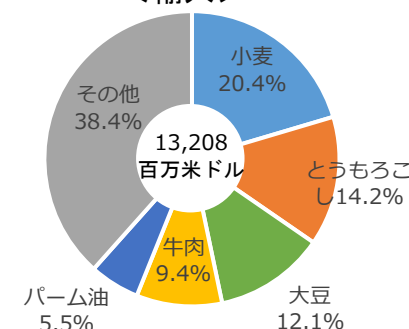
	2016	2017	2018	2019	2020
さとうきび	1,556	1,538	1,582	1,534	1,491
てんさい	1,121	1,086	1,038	1,225	1,304
小麦	934	842	835	856	900
とうもろこし	782	854	511	759	750
トマト	732	673	678	681	673
ばれいしょ	411	484	496	520	522
コメ(粳)	531	496	32	481	489
生乳(牛)	263	296	288	397	327
生乳(水牛)	233	235	221	123	175

資料：FAO統計

<輸出>

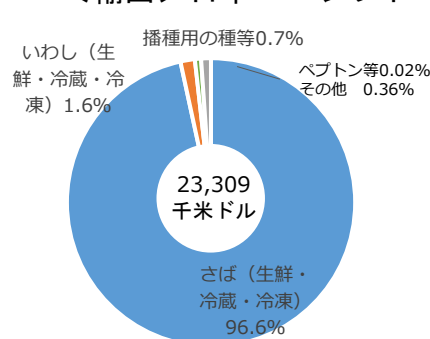


<輸入>

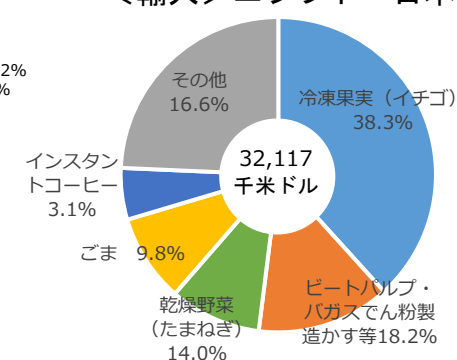


我が国との農林水産物貿易 (2021年)

<輸出>日本→エジプト

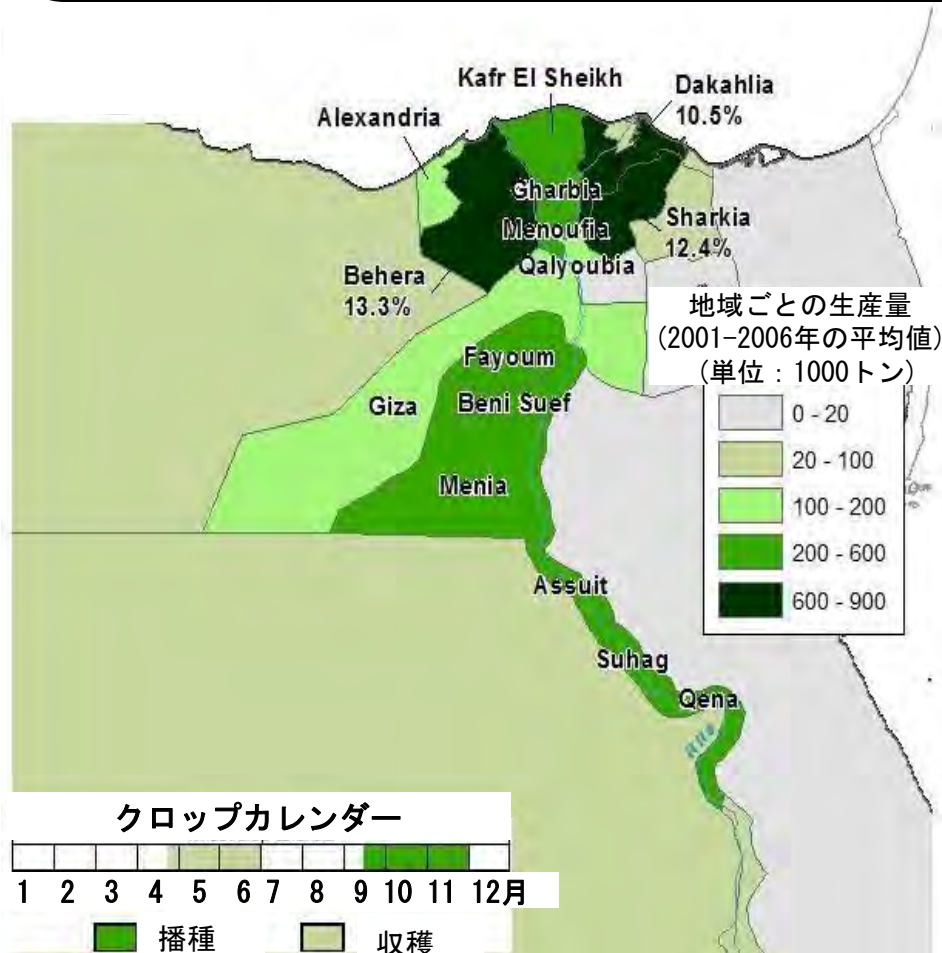


<輸入>エジプト→日本



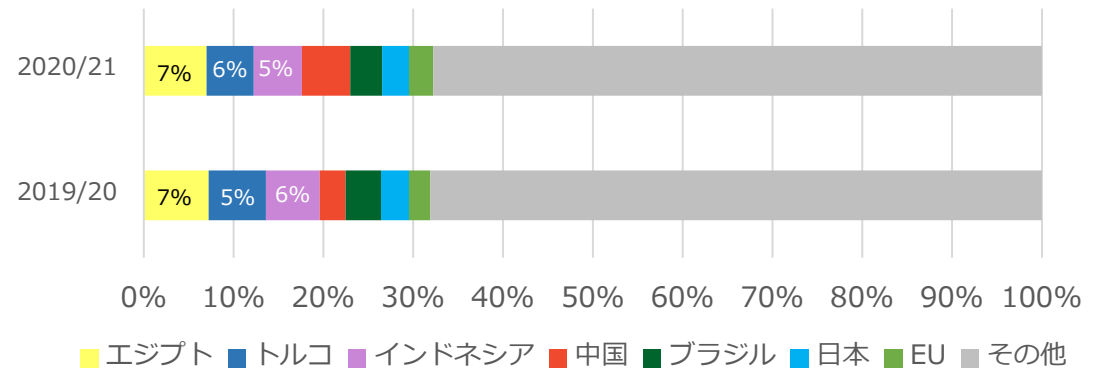
エジプトの小麦生産地域と需給状況

- エジプトは食料の純輸入国。特に小麦については世界最大の輸入国（世界の小麦輸入量に占める割合は約7%）。
- 一方で小麦はエジプトの主要農産物でもあり、ナイル川沿いの地域を中心に生産されている。播種は9月中旬～11月末、収穫は4月下旬～6月末。
- 小麦の自給率は41.4%（2020年）。変動はあるものの、2017年以降は緩やかな上昇傾向。



出典: 米国農務省 (USDA) 穀物生産地図 (Crop Production Maps)

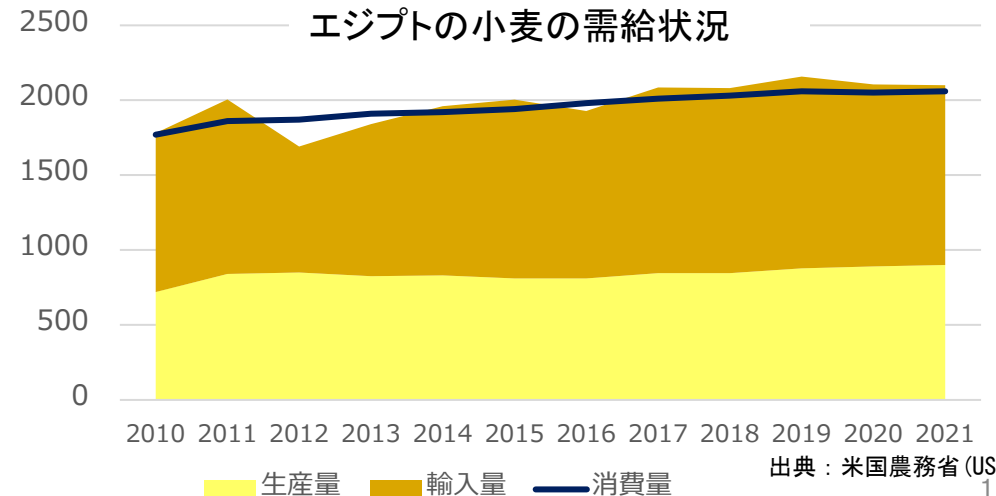
世界の小麦輸入国の内訳・割合



出典: FAO Food Outlook 2020、2021

(単位: 万トン)

エジプトの小麦の需給状況



出典: 米国農務省 (USDA)

エジプトの国内小麦政策①

政府買取制度

- エジプト政府は、貧困層向けのパンの製造のため、輸入小麦と国産小麦を国費により調達。
- 輸入小麦は、供給商品総局（GASC：供給・国内通商省直下の食料調達等を担当する公的機関）が複数企業による国際競争入札により調達。国産小麦は、例年3月末に政府が買取価格を公表し、4月中旬から調達を開始する。なお、政府による買取だけでなく、営農者が民間企業に卸すルートもある。
- 2022年の買取価格については、世界的な小麦価格の上昇を踏まえて、2021年11月に過去最高額となる820エジプトポンド（LE）（約52米ドル）／150kgとすることを発表した。さらに2022年3月には、市場価格の更なる高騰を受け、865～885LE（約57米ドル）／150kgとすることを発表。

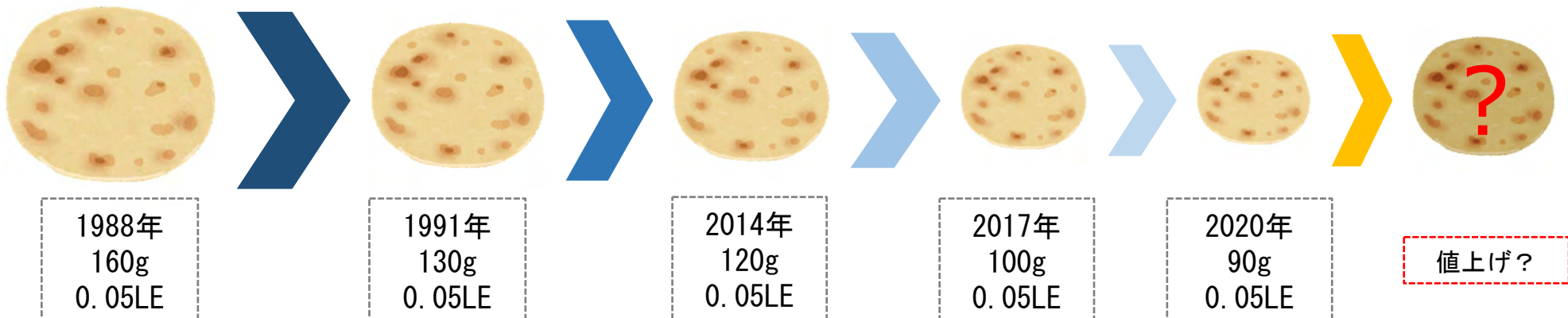
貧困層向けパンの補助金

- 貧困層向けの支援として、エジプト政府はベーカリーに対して補助金を支払い、ベーカリーは安価でパン（アエーシュ）を販売する施策を行っている。
- パンの販売価格は1斤あたり0.05LE（約0.003米ドル）で、政府によるベーカリーへの補助金額は、原価との差額（1斤あたり0.6 LE（約0.04米ドル））。人口の約7割がこの補助金の恩恵を受けているとされている。
- しかしこの補助金は年間で約500億LE（約33.3億米ドル）（2021年）にまで達しており、他の食料品（食用油や砂糖等）やエネルギー（天然ガス、軽油等）への補助金と併せて、エジプト財政を大きく圧迫している。

エジプトの国内小麦政策②貧困層向けパン補助金の変遷

- パンの販売価格は政治的に非常に機微な問題。1940年代に補助金制度が導入されてから3度しか値上げされておらず、現在の価格である0.05LE（約0.003米ドル）は30年以上改定されていない。1977年にサダト大統領（当時）がパンの値上げを試みた際には、死者が発生する暴動にまで発展し、値上げの撤回を余儀なくされる事態にもなった。
- しかし、貧困層向けパンの補助金は、他の食料品等への補助金と共にエジプトの国家財政を大きくひっ迫していることから、政府は長い年月をかけて徐々に実質的な削減を実施。ベーカリーでの販売価格は引き上げなくとも、パンの大きさを少しずつ小さくするなど、大きな反発を招かないよう時間をかけて慎重に補助を減らしてきた。
- 2021年8月には、現在政権を握るエルシーシ大統領が、パンの販売価格の引き上げが必要である旨発言。2022年6月現在、具体的な引き上げ金額等はまだ発表されていないが、改定後の価格のみならず、エジプト国民がどう受け止めるかも注目される。

（参考）ベーカリーでのパンの販売価格と容量の変遷

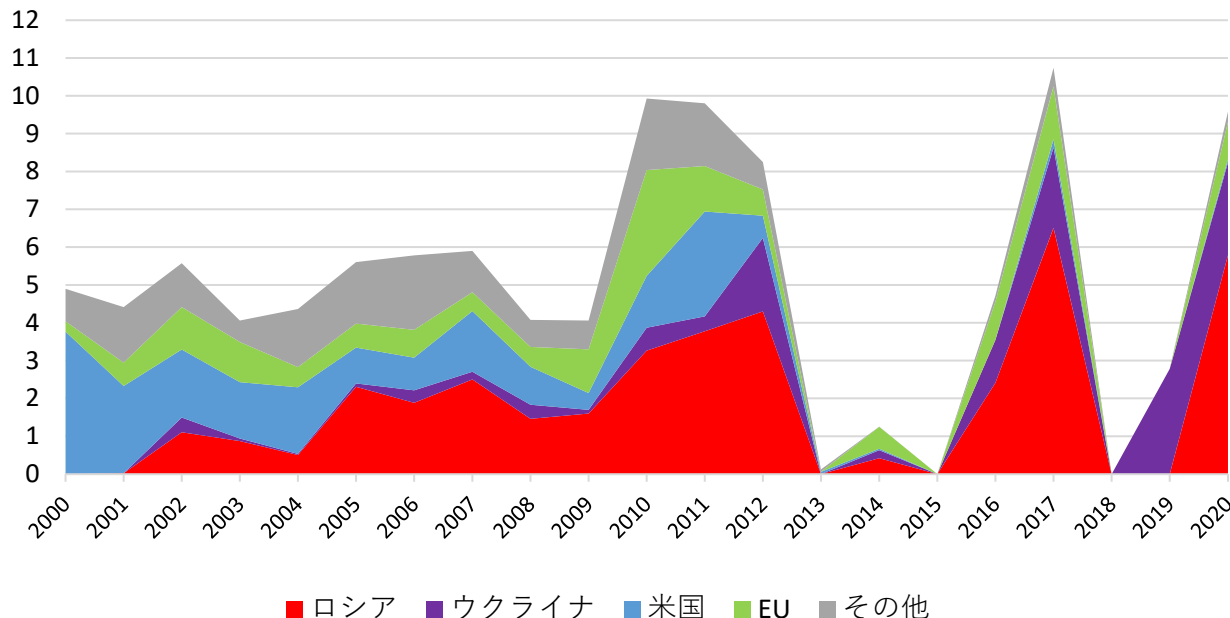


エジプトの小麦輸入

- エジプトは、2000年頃は主に米国から輸入していたが、2006年～2008年の食料危機を受けて輸入先国の多角化を図り、特にロシアからの輸入割合を増やしてきた。2020年にはロシア・ウクライナからの輸入額が小麦全体の86%を占めている。
- ロシアにとっても最大の輸出先はエジプト・トルコを含む中東・北アフリカであり、2020/2021年度の輸出額では52%を占める。
- したがって、現下のロシア・ウクライナ情勢がエジプト・トルコに与える影響は大きく、さらにトルコから小麦粉や小麦製品を輸入する国々にも影響を与える可能性がある。

エジプトの小麦輸入国の内訳とその割合の変遷

(単位：百万トン)

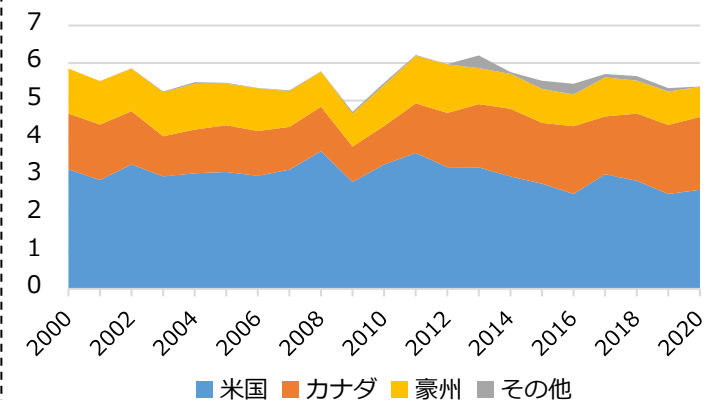


出典：Global Trade Atlas 注：エジプトは一部データなし。

(参考：日本との比較)
日本の小麦輸入国の内訳とその割合の変遷

日本は小麦のほとんどを米国・カナダ・豪州の3か国から輸入しており、過去20年間では輸入先もほぼ変わらず、輸入量も安定していることがわかる。

(単位：百万トン)



「食料の安定供給に関するリスク検証（2022）」について

令和4年6月
農林水産省

1 背景・目的

我が国の食料の生産や供給をめぐる国内外の状況は刻々と変化しており、特に近年、新型コロナウイルスの感染拡大やロシアによるウクライナ侵略といった新たなリスクの発生により、食料安全保障上の懸念は高まりつつある。

このため、「食料安全保障に関する省内検討チーム（チーム長：武部副大臣）」を立ち上げ、将来にわたって我が国の食料安全保障を確立するために必要な施策の検討に資するよう、食料の安定供給に影響を及ぼす可能性のある様々な要因（リスク）を洗い出し、包括的な検証を行った。

2 検証方法

リスク管理の国際規格である「ISO31000」に準拠しつつ、専門家（食料安全保障アドバイザリーボード）の意見を参考にして、以下のとおりリスク検証を実施した。

（1）リスクの特定

我が国の農林水産物・食品の安定供給に影響を与える可能性のあるリスクの洗い出しを行い、国内におけるリスク 10 種、海外におけるリスク 15 種の計 25 種のリスクを対象として選定。

（2）対象品目の選定

食料・農業・農村基本計画において生産努力目標を設定している 24 品目^{※1}を基本とした上で、食料産業 4 業種^{※2}及び林業（木材）等を合わせた 32 品目を対象として選定（カロリーベースで 98%をカバー）。

※1:24 品目に関連して砂糖類（輸入）、飼料穀物、植物油脂・油脂原料（輸入）を追加

※2:食品製造業、食品卸売業、食品小売業、外食産業

（3）リスク分析

検証対象の 25 種のリスクについて、それぞれの概況を定量的、定性的に分析・整理した「リスクシート」を作成した上で、対象 32 品目について、各リスクの「起こりやすさ」と「影響度」を分析。

（4）リスク評価

リスク分析の結果を基に、品目毎に、起こりやすさを 5 段階、影響度を 3 段階で評価し、①重要なリスクと②注意すべきリスクを特定。

3 検証結果概要（別紙参照）

- 我が国の食料供給は、国産と、輸入上位4ヶ国（米国・カナダ・豪州・ブラジル）で供給カロリーの約9割^{※3}を占める。

※3:国産 37%、米国 23%、カナダ 11%、豪州 8%、ブラジル 6%で計 85%

- 輸入については、価格高騰のリスクは、輸入割合の高い主要な品目のうち、飼料穀物等では顕在化しつつあり、「重要なリスク」と評価した。また、小麦、大豆、なたねでは、その起こりやすさは中程度であるが、その影響度が大きく、「重要なリスク」と評価した。
- 国内生産については、労働力・後継者不足のリスクが、特に労働集約的な品目（果実、野菜、畜産物等）を中心にその起こりやすさが高まっているか、顕在化しており、「重要なリスク」と評価した。また、関係人材・施設の減少リスクは多くの品目で顕在化しつつあり、「注意すべきリスク」と評価した。

輸入依存度の高い生産資材のうち、燃油の価格高騰等のリスクについては、その起こりやすさが高まっており、燃油費の割合が高い品目（野菜、水産物等）では「重要なリスク」と評価した。肥料の価格高騰等のリスクについては、肥料は農産物の生産に必須でその影響度は大きく、ほとんどの品目で「重要なリスク」と評価した。

- 温暖化や高温化のリスクは、ほとんどの品目で顕在化しつつあり、「注意すべきリスク」等と評価した。

家畜伝染病のリスクについては、水際対策の強化を図っているものの、口蹄疫やアフリカ豚熱が近隣諸国で継続的に発生しており、その起こりやすさが高まっていることに加え、発生した場合の影響度が大きいため、「重要なリスク」と評価した。

4 今後の進め方

今回のリスク検証の結果を踏まえ、現行の食料・農業・農村基本法に基づく食料安全保障に関連する施策全般について、更なる検証を行い、必要となる施策等を検討。

(別紙) リスク検証の結果概要

(1) 我が国の食料供給の概観（カロリーベース）

<国産 37%・輸入 63%を国別・品目別に分解>

食料供給の現状を俯瞰してみると、我が国の供給カロリー（令和2年度：2,269kcal/人・日）のうち37%は国内生産によって賄われているが、この裏返しでもある残りの63%は海外から輸入する農林水産物・食品に頼っていることとなる。この海外からの供給分をより詳細に分析するため、各国・地域からの輸入量で按分して試算したものが図1の国別構成となっている。

<国産と輸入の上位4ヶ国で全体の9割近くを占める>

供給カロリーの多い順に、米国（23%）、カナダ（11%）、豪州（8%）、ブラジル（6%）となり、国産とこれら主要4ヶ国分とを合わせると、供給カロリーの約9割（85%）を占めている。これら4ヶ国はいずれも国土面積が広大で、とうもろこし、小麦、大豆、なたね等の穀物や油糧種子、飼料作物といった土地利用型作物と、それを活かした畜産物が主な輸入品目となっている。現在の私たちの食生活を前提として、今後の食料供給の安定性を維持していくためには、これらの輸入品目の国産への置き換えを着実に進めるとともに、主要輸入先国との関係を維持していくことも必要不可欠となる。

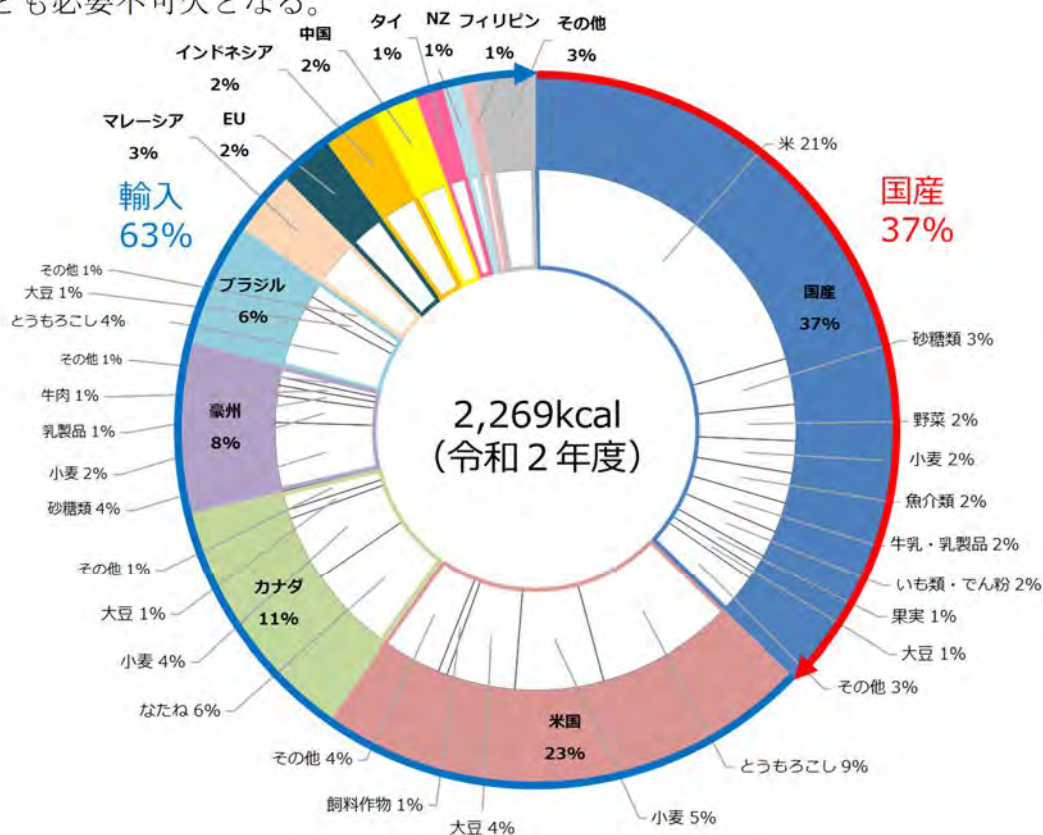


図1：我が国の供給カロリーの国別構成（試算）：令和2年度

表 1：供給カロリーの国別・品目別構成（試算）：令和 2 年度

国名	品目名	熱量 (kcal)	割合	国名	品目名	熱量 (kcal)	割合
国産	(合計)	843	37.2%	ブラジル	(合計)	127	5.6%
	米	467	20.6%		とうもろこし	86	3.8%
	砂糖類	65	2.8%		大豆	18	0.8%
	野菜	51	2.2%		鶏肉	8	0.3%
	小麦	45	2.0%		大豆油かす	6	0.3%
	魚介類	43	1.9%	マレーシア	(合計)	67	3.0%
	牛乳・乳製品	42	1.9%		パーム油	64	2.8%
	いも類・でん粉	38	1.7%	EU	(合計)	56	2.5%
	果実	20	0.9%		乳製品	25	1.1%
	大豆	16	0.7%		豚肉	11	0.5%
	鶏卵	8	0.3%		オリーブ油	10	0.4%
	植物油脂(米ぬか油等)	8	0.3%	インドネシア	(合計)	56	2.5%
	牛肉	5	0.2%		パーム油	50	2.2%
	海藻類	5	0.2%	中国	(合計)	46	2.0%
	豚肉	5	0.2%		野菜(玉ねぎ等)	11	0.5%
	鶏肉	4	0.2%		果実(りんごジュース等)	9	0.4%
米国	(合計)	513	22.6%		大豆油かす	9	0.4%
	とうもろこし	195	8.6%		魚介類(いか等)	4	0.2%
	小麦	125	5.5%		鶏肉	3	0.1%
	大豆	96	4.2%	タイ	(合計)	29	1.3%
	飼料作物	13	0.6%		砂糖類	12	0.5%
	牛肉	11	0.5%		鶏肉	8	0.4%
	豚肉	11	0.5%		米	3	0.2%
	ばれいしょ	9	0.4%	NZ	(合計)	19	0.8%
	乳製品	9	0.4%		乳製品	14	0.6%
	魚介類(たら等)	6	0.3%	フィリピン	(合計)	15	0.7%
	米	4	0.2%		果実(バナナ等)	11	0.5%
	果実(オレンジ等)	3	0.1%		やし油	3	0.2%
カナダ	(合計)	260	11.4%	メキシコ	(合計)	9	0.4%
	なたね	128	5.6%		豚肉	5	0.2%
	小麦	92	4.0%	南アフリカ	(合計)	8	0.3%
	大豆	13	0.6%		砂糖類	3	0.1%
	豚肉	10	0.4%	チリ	(合計)	8	0.3%
豪州	(合計)	176	7.8%		魚介類(さけ等)	5	0.2%
	砂糖類	97	4.3%	ロシア	(合計)	5	0.2%
	小麦	38	1.7%		魚介類(さけ・たら等)	3	0.1%
	乳製品	14	0.6%	ノルウェー	(合計)	4	0.2%
	牛肉	11	0.5%		魚介類(さけ等)	4	0.2%
	なたね	3	0.2%				
	飼料作物	3	0.1%	計		2,269	100.0%

＜主要作物の輸入先は特定国に限定＞

海外からの輸入量の多いとうもろこし、小麦、大豆、なたねについて、国別の割合を示したのが図2である。米国、カナダ、豪州、ブラジルといった特定の輸入先国に限定されており、このことが安定的な輸入を支えている一方で、特定国への過度な依存というリスクにもなっている。

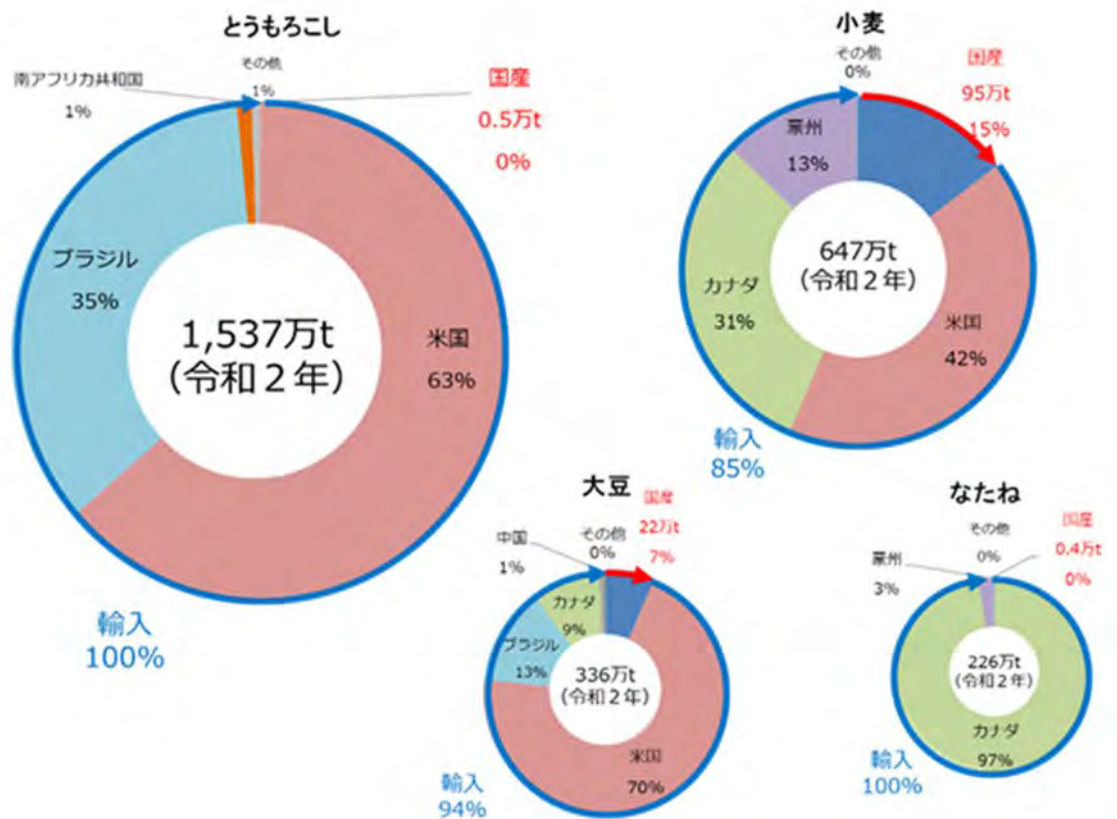


図2：国内消費に占める国産、海外輸入割合：令和2年度

(2) 主な検証結果

＜輸入品目(飼料穀物等)では価格高騰リスクが顕在化、供給量の減少リスクも＞

輸入品目については、世界的な食料需要の高まりや昨今の国際情勢等によってその国際価格が高騰している。輸入割合の高い主要な品目のうち、特に飼料穀物や木材については価格高騰のリスクは顕在化しつつあり、「重要なリスク」と評価した。また、小麦・大豆・なたねでは、価格高騰のリスクの「起こりやすさ」は中程度であるが、その影響度が大きく、「重要なリスク」と評価した。

一方、供給量減少のリスクについては、これらの品目では、我が国の輸入量は相手先国の生産量や輸出量に比べて少ないこと等から、その「起こりやすさ」は、基本的に価格高騰のリスクよりも低いか同等となった。

<野菜・果実・畜産物・水産物等では労働力不足のリスク、関係人材・施設の減少リスクは多くの品目で顕在化>

労働力・後継者の不足に関するリスクは、手作業が多く労働集約的な品目（野菜、果実等）でその「起こりやすさ」が高まっており、特に畜産物、水産物等については顕在化しつつある。これらの品目では総じて影響度も大きく、「重要なリスク」と評価した。一方、土地利用型作物など一定程度機械化が進んでいる品目については、「起こりやすさ」、影響度ともに比較的小さくなると評価した。

また、自治体や団体など農業者以外の関係人材や施設の減少によるリスクについては、多くの品目で顕在化しつつあり、「注意すべきリスク」と評価した。

<輸入に依存する燃油・肥料・飼料穀物の価格高騰リスクは重大なリスク>

生産資材に関するリスクを見ると、燃油や肥料、飼料穀物といった原材料への輸入依存度が高い生産資材の価格高騰等のリスクは、飼料穀物では顕在化しつつあり、燃油や肥料ではその「起こりやすさ」が高まっている。影響度については、その生産資材の使用割合によって品目毎に異なり、例えば、飼料穀物や肥料は生産に必須とも言えることから総じて影響度も大きく、燃油は経営費に占める燃料費の割合が高い品目（野菜、茶、水産物、きのこ類等）において影響度が大きくなった。その結果、飼料穀物、肥料の価格高騰等のリスクは「重要なリスク」と評価し、燃油の価格高騰等のリスクについては、燃油費の割合が高い品目について「重要なリスク」と評価した。

また、種子・種苗のうち稲、麦、大豆等の種子についてはほぼ国産である一方で、野菜の種子については、輸入割合が9割と高いものの、日本の種苗会社が日本の市場向けに海外で生産しているものであり、リスク分散の観点から複数国で生産していることや、約1年分を国内で備蓄している等の影響度を下げるための取組が行われているなど、概して種子・種苗に関するリスクは「起こりやすさ」や影響度ともに大きいわけではないと評価した。

<温暖化リスクはほとんどの品目で顕在化、家畜伝染病リスクは重大なリスク>

温暖化や高温化のリスクについては、さとうきびと飼料作物・飼料穀物を除く全ての品目で顕在化しつつあり、「注意すべきリスク」と評価し、特に、海水温の影響を受けやすい水産物では「重要なリスク」と評価した。

家畜伝染病のリスクについては、水際対策の強化を図っているものの、口蹄疫やアフリカ豚熱が近隣諸国で継続的に発生しており、その起こりやすさが高まっていることに加え、発生した場合の影響度が大きいことから「重要なリスク」と評価した。

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2022 年 6 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

英国については、2020 年 1 月 31 日付けで EU を離脱しました。英国の小麦に関する情報については小麦の EU27+英国のコーナーで取り扱います。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--